

小松市
大領遺跡

2022

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

大領遺跡

2022

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター



遺構遠景(南西から、加賀国府推定地方向を望む)



上空から見た調査区全景(北から、淡津駅推定方向を望む)



調査区(1区)全景(南西から)



中世の道路構造と路面幅(1区)(南西から)



調査区(3・4区)全景(南東から)



古代の道路遺構と路面幅(3区)(南西から)



古代と中世の道路遺構全景（1～3区）（上空・東から）



調査区（5・6区）全景（南東から安宅駅推定方向を望む）

例　　言

- 1 本書は大領遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県小松市大領町・今江町地内である。
- 3 調査原因是北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下、「県埋文センター」）が、石川県教育委員会から委託を受けて、平成29（2017）～令和元（2019）年度および令和3（2021）年度に実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。現地調査については、発掘調査作業および空中写真測量図化作業等に係る関連作業の支援を平成29年度に日本海航測株式会社に委託し、県埋文センター監理のもと実施した。
- 5 また、石川県教育委員会文化財課が令和2（2020）年度に実施した工事立会による調査の記録も掲載した。
- 6 調査にかかる費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。
- 7 現地調査は平成29（2017）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者（当時）は下記のとおりである。

期　間	平成29年4月13日～同年8月25日
面　積	1,960m ²
担当課	調査部 特定事業調査グループ
担当者	安中哲徳（専門員）、神谷英生（嘱託）
- 8 出土品整理は平成30（2018）年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。
- 9 自然科学的分析は、令和元（2019）年度および令和3（2021）年度に株式会社パレオ・ラボに委託して実施し、その成果を第4章に記した。
- 10 報告書の作成は令和元年度および令和3（2021）年度に、編集・刊行は令和3（2021）年度に実施し、調査部特定事業調査グループが担当した。執筆（当時）は、第2章および第3章を岩瀬由美（県関係調査グループ主幹）が、第4章を株式会社パレオ・ラボ（第1・3節 藤根 久、第2節 小林克也、第3～5節 森 将志）が、第1章および第5章の執筆と全体の編集は安中哲徳（県関係調査グループ主幹）が行った。
- 11 調査には下記の機関・個人の協力を得た（敬称略）。

独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構	独立行政法人国際文化財機構奈良文化財研究所
向日市教育委員会	野々市市教育委員会
小松市教育委員会	小松市埋蔵文化財センター
今江町内会	小松市大領町内会、岩本信一、樋田 誠、川畑謙二、木本雅康（故人）、小岩直人、下濱賛子、新宅輝久（故人）、鈴木景二、田村昌宏、出越茂和、三浦純夫、望月精司、吉岡康暢、横幕 真
- 12 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 13 本書についての凡例は下記のとおりである。
 - (1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系（世界測地系：測地成果2000）に準拠した。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面）による。
 - (3) 遺構の名称は、下記の略記号に番号（算用数字）を付し表記した。

SB	: 掘立柱建物	SD	: 溝	SK	: 土坑	P	: 柱穴・小穴	SX	: その他（不明確遺構等）
UM	: 畦溝状遺構								
 - (4) 土層注記の標記は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』による。
 - (5) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測時の遺物番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。
 - (6) 遺物実測図については、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとし、弥生土器・土師器の赤彩処理は薄い網掛け、内黒処理は濃い網掛けでの範囲を示した。図中の主な網掛け表現は下のとおりである。ほかに、油煙痕や黒色処理等も網掛けにより示した。



赤彩



被熱



石器使用痕

(7) 引用文献、参考文献は第4章を除き各章末に記載した。第4章は章内各節の末尾に記載した。

目 次

卷頭写真図版	
第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘作業の経過	3
第3節 整理作業の経過	4
第2章 位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と成果	8
第1節 調査の方法	8
第2節 層序	8
第3節 遺構と遺物	8
第4章 自然科学的分析	63
第1節 石製品の石質同定	63
第2節 木製品の樹種同定	66
第3節 花粉分析	68
第4節 珪藻分析	72
第5節 植物珪酸体分析	78
第5章 総括	82
第1節 遺跡の変遷	82
第2節 発見された道路遺構と「古代北陸道」について	83
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線（金沢・福井間）概略図	1	第46図	遺物実測図1 (S=1/1・1/3)	55
第2図	大領遺跡周辺試掘坑位置図	2	第47図	遺物実測図2 (S=1/1・1/2・1/3)	56
第3図	試掘調査柱状図	2	第48図	遺物実測図3 (S=1/1・1/3)	57
第4図	調査区・グリッド配置図 (S=1/1,500)	3	第49図	遺物実測図4 (S=1/3・1/6)	58
第5図	遺跡の位置	5	第50図	遺物実測図5 (S=1/3)	59
第6図	周辺の遺跡 (S=1/25,000)	7	第51図	岩石のマイクロスコープ写真	64
第7図	全体図・調査区位置図 (S=1/800)	9	第52図	大領遺跡と周辺の地質図 〔鹿野ほか(1990)の20万分の1地質図 「金沢」を編集〕	65
第8図	全体図① (S=1/400)	10	第53図	大領遺跡出土木材の光学顕微鏡写真1 (1)	67
第9図	全体図② (S=1/400)	11	第54図	大領遺跡出土木材の光学顕微鏡写真2 (2)	68
第10図	0・1区断面実測箇所図 (S=1/150)	13	第55図	大領遺跡における花粉分布図	70
第11図	1区 SD・P 27断面実測図1 (S=1/40)	14	第56図	No.17から産出した花粉化石	71
第12図	1区 SD 断面実測図2 (S=1/40)	15	第57図	堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真	77
第13図	1・2区遺物出土状況図 (S=1/10)	16	第58図	大領遺跡における植物珪酸体分布図	80
第14図	2区断面実測箇所図 (S=1/150)	18	第59図	SD 08北壁下層 (No.3) から産出した 植物珪酸体	81
第15図	2区 SK 断面実測図1 (S=1/40)	19	第60図	延喜式による「古代北陸道」推定ルート	85
第16図	2区 SK 断面実測図2 (S=1/40)	20	第61図	「中世北陸道」の想定ルート	85
第17図	2区 SD・Pit 断面実測図 (S=1/40)	21	第62図	大領道路上空から見た古代・中世の 道路構造	85
第18図	3区断面実測箇所図 (S=1/150)	22	第63図	古代加賀三湖周辺の遺跡と「淡津駅」 推定地 (三浦2018) に一部加筆	85
第19図	3区 SK 断面実測図1 (S=1/40)	24	第64図	古代江沼郡の駅路と「淡津駅」推定地 (三浦2018) に一部加筆	85
第20図	3区 SK 断面実測図2 (S=1/40)	25	第65図	0・1区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)	86
第21図	3区 SK 断面実測図3 (S=1/40)	26	第66図	1区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)	87
第22図	3区 SD 18周辺断面実測図1 (S=1/40・60)	27	第67図	1区調査区壁断面実測図・オルソ写真3 (S=1/40)	88
第23図	3区 SD 18周辺断面実測図2 (S=1/40)	28	第68図	2区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)	89
第24図	3区 SD 断面実測図1 (S=1/40・1/80)	29	第69図	2区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)	90
第25図	3区 SD・Pit 断面実測図2 (S=1/40)	30	第70図	3区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)	91
第26図	4区断面実測箇所図 (S=1/150)	31	第71図	3区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)	92
第27図	4区 SK・Pit 断面実測図 (S=1/40)	33	第72図	4区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)	93
第28図	4区 SD 断面実測図1 (S=1/40)	34	第73図	4区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)	94
第29図	4区 SD 断面実測図2 (S=1/40)	35	第74図	5・6・7区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)	95
第30図	4区 SD 断面実測図3 (S=1/40)	36	第75図	5・6・7区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)	96
第31図	4区 SX 断面実測図 (S=1/40)	37			
第32図	5・6・7・8区断面実測箇所図1 (S=1/150)	40			
第33図	6区断面実測箇所図2 (S=1/150)	41			
第34図	5・6・7・8区 SD 断面実測図1 (S=1/40)	43			
第35図	5・6・7・8区 SD 断面実測図2 (S=1/40)	44			
第36図	5・6・7・8区 SD 断面実測図3 (S=1/40)	45			
第37図	5・6・7・8区 SD 断面実測図4 (S=1/40)	46			
第38図	5・6・7・8区 SD 断面実測図5 (S=1/40)	47			
第39図	5・6・7・8区 SD 断面実測図6 (S=1/40)	48			
第40図	5・6・7・8区 SK・Pit 断面実測図 (S=1/40)	49			
第41図	5・6・7・8区歓溝断面実測図 (S=1/40)	50			
第42図	6区 SB 01実測箇所図 (S=1/60)	51			
第43図	6区 SB 01断面実測図1 (S=1/40)	52			
第44図	6区 SB 01断面実測図2 (S=1/40)	53			
第45図	8区調査区断面実測図 (S=1/40)	54			

写 真 目 次

写真1	津幡町「加茂遺跡」の古代北陸道	85	写真3	野々市市「三日市A遺跡」の古代北陸道 野々市市教育委員会提供	85
写真2	金沢市「般若寺跡」の古代北陸道	85			

写真4 小松市「大領遺跡」の古代北陸道85
写真5 長屋王邸出土木簡「淡津駅」(711~716年)85

写真6 長屋王邸出土木簡「...駅子」85
写真7 長岡京出土木簡「安宅駅」(789年)85

表 目 次

第1表 調査・整理体制組織表	4
第2表 出土遺物観察表(1)	60
第3表 出土遺物観察表(2)	61
第4表 出土遺物観察表(3)	62
第5表 小松市大領遺跡出土石製品	63
第6表 大領遺跡出土木材の樹種同定結果	66
第7表 分析試料一覧	69
第8表 産出花粉孢子一覧表	69
第9表 分析試料一覧	73
第10表 堆積物中の珪藻化石産出表 (種群は、千葉・澤井(2014)による)	75
第11表 分析試料一覧	79
第12表 試料1g当たりのプランツ・オバール個数	79
第13表 能登・加賀における発掘された古代の道路 遺構	54

図 版 目 次

卷頭図版1	遺構遠景（南西から、加賀國府推定地方 向を望む） 上空から見た調査区全景（北から、淡津 駅推定方向を望む）
卷頭図版2	調査区(1区)全景（南西から） 中世の道路遺構と路面幅(1区)（南西か ら）
卷頭図版3	調査区(3・4区)全景（南東から） 古代の道路遺構と路面幅(3区)（南西か ら）
卷頭図版4	古代と中世の道路遺構全景(1~3区)（上 空・東から） 調査区(5・6区)（南東から安宅駅推定 方向を望む）
図版1	調査(0区)全景（南東から） P 28遺物出土状況（南西から） 1区中世の道路状遺構(SD 01・08)と水路(SD 06)の全景（北東から） 調査(1区)全景（南東から） 1区道路側溝(SD 01)の全景（南西から）
図版2	1区道路側溝(SD 08)と水路(SD 06)の全 景（南西から） 1区道路側溝(SD 08)と水路(SD 06)の土 層断面（南西から） 1区水路(SD 06)土師器皿出土状況（南東か ら） 1区水路(SD 11)完掘状況（北西から） 調査区(2区)全景（南東から）
図版3	調査区(2区)全景（北東から） 2区P 12周辺完掘状況（北から） 2区P 12須恵器坏出土状況（北から） 2区繩文土器出土状況（南から） 調査区(3区)全景（北東から）
図版4	調査区(3区)全景（北東から） 調査区(3区)全景（南東から） 3区古代の道路状遺構(SD 15・16)検出状況 (南西から)
図版5	3区道路側溝(SD 15)掘削作業風景（北東か ら） 3区道路側溝(SD 15)土層断面（北東から） 3区道路側溝(SD 15)遺物出土状況（南西か ら） 3区道路側溝(SD 15)須恵器双耳瓶出土状況 (南東から)
図版6	3区道路側溝(SD 15)完掘状況（北東から） 3区道路側溝(SD 15)土層断面（南西から） 3区道路側溝(SD 15)完掘状況（南西から） 3区SD 18完掘状況（南東から） 調査区(4区)全景（南東から） 調査区(4区)全景（南から） 調査区(4区)全景（北東から） 4区SD 21完掘状況（南東から） 4区SD 22完掘状況（北西から） 4区SD 23周辺完掘状況（南東から） 4区畝溝群(SD 43・44周辺)完掘状況（南 西から）
図版7	調査区(5・6区)全景（南西から） 調査区(5・6区)全景（南西から） 5区SD 45・畝溝群検出状況（北東から） 5・6区南SD 45・68(道路?)完掘状況（南 東から） 5・6区南SD 45・68(道路?)完掘状況（北 から）
図版8	5区SD 45(側溝?)上層断面（北西から） 5区SD 45(側溝?)完掘状況（北西から） 6区SD 68(側溝?)土層断面（南東から） 5・6区南畝溝群完掘状況（南西から） 5区畝溝(SD 57)土師器皿出土状況（西から） 6区北SB 01完掘状況（南西から） 7区完掘状況（北東から） 8区完掘状況（南西から）
図版9	出土遺物(0・1区)1
図版10	出土遺物(1~3区)2
図版11	出土遺物(3~6区)3
図版12	出土遺物(6区)4

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

大領遺跡の発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構（以下、鉄道・運輸機構）が所管する北陸新幹線建設事業（金沢・敦賀間）の工事に係るもので、石川県教育委員会および公益財団法人石川県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）が実施した。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9（1997）年に東京駅から長野駅までが長野新幹線として部分開業しており、平成27（2015）年3月には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。これに伴い、石川県内では平成10（1998）～22（2010）年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所までの区間において発掘調査が実施された。

さらに、平成24（2012）年6月に国土交通省による認可を受けて福井県敦賀までの延伸が決定され、金沢駅から敦賀駅間の事業が開始されることとなった。同年8月北陸新幹線（金沢・敦賀間）建設工事に着工し、同月には起工式が行われている。また、平成27年1月、政府は完成・開業時期を3年前倒しにして、令和4（2022）年度の開業を目指すことを決定した。令和3（2021）年3月、工事実施計画の変更が国土交通省により認可され、令和5（2023）年度末の開業を目指して現在工事が行われている。



第1図 北陸新幹線（金沢・福井間）概略図

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道・運輸機構鉄道建設本部大阪支社（以下、事業者）から石川県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）に照会があり、平成26（2014）年からは事業者の依頼に基づき、用地買収が済んで試掘を実施

する環境が整った範囲から順に、県文化財課が平成29(2017)年度にかけて埋蔵文化財分布調査等を実施した。

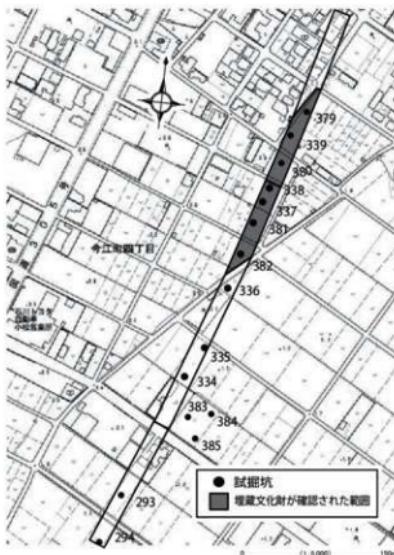
その結果、豊文化財課は計画範囲内に22箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。

大領遺跡が位置する今江町~大領町周辺の北陸新幹線建設事業に伴う試掘状況については、調査担当の県文化財課からの提出資料に基づき報告する。事業地周辺では周知の埋蔵文化財包蔵地である大領遺跡（古代）が知られており、平成28（2016）年7月5日と11月18日に試掘調査を実施し、大領遺跡の存在を確認した。今江町から大領町における基本層序は、耕土から浅黄色砂の地山層である。削平されている箇所が多く、遺物包含層と考えられる層も確認できなかった。

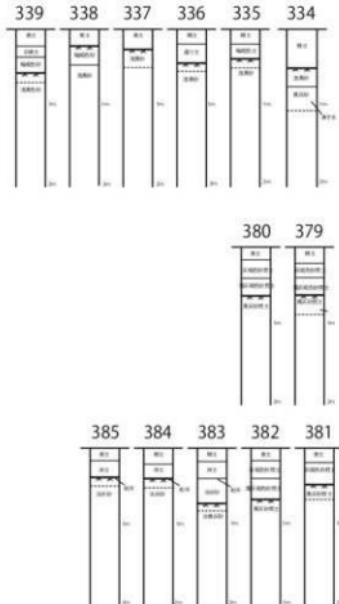
平成28年7月5日に実施された試掘のうち、試掘坑No337・No338・No339において土坑や溝などの遺構を検出した。遺物は出土していないが、周辺の踏査で青磁片を1点確認した。周知内でもあり、遺跡ありと判断すべきであるが、試掘の同意が得られていない箇所が存在するため、遺跡の範囲を確定させるまでは至らなかった。試掘坑No336以南については遺跡の存在が確認されなかつた。

平成28年11月18日に実施された試掘調査において、基本層序は、耕土、灰褐色砂質土、黄灰砂質土の地山となる。試掘坑No.379で遺構を検出し、試掘坑No.382の踏査では須恵器を確認した。なお、試掘坑No.379の市道を挟んで北西側は、小松市の試掘調査で埋蔵文化財無しとされていることから、埋蔵文化財包蔵地外であると判断した。試掘No.383～385については、耕土直下で灰色粗砂の地山を確認したため、削平されたものと考えられ、遺構・遺物も確認されなかった。

これにより、試掘坑No.379～382の間を埋蔵文化財包蔵地と判断し、「周知の埋蔵文化財包蔵地、大



第2圖 太領遺跡周辺試掘坑位置図



第3圖 試掘調查柱狀圖

領遺跡を確認した。」と事業者に回答し、平成29年度に発掘調査を行うことで調整中とされた。

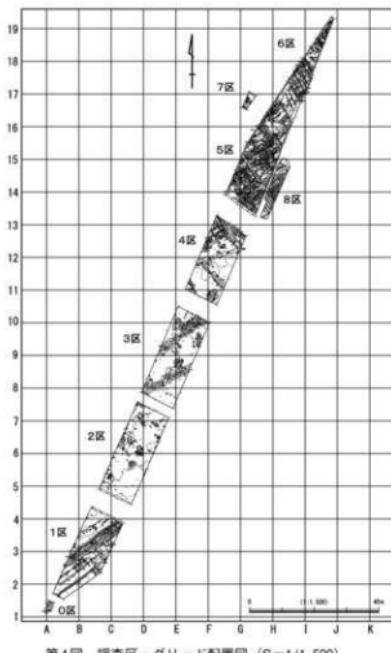
発見された遺跡のうち、16遺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条に基づき発掘調査等の保護措置が必要となった。平成25（2013）年度には、白山総合車両所内の本線部分に係る宮保B遺跡や北出遺跡の本調査が実施された。平成27年度は、新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施され、平成28年度以降県埋文センターにより本格的な発掘調査が行われた。

県埋文センターは、試掘の結果埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となることから、調査の効率化と期間短縮を目的に、平成28・29年度に民間会社による調査支援を導入した。主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査の実施については、石川県教育委員会と県埋蔵文化財センターとの間で平成29（2017）年4月1日付けで発掘調査等業務委託契約を締結、それを受け文化財保護法第92条1項の規定に基づく発掘調査届（同年4月5日付け財埋第3号）を県教育委員会あて届出、教育長から「発掘調査届に対する通知について」同年4月5日付け教文第69号）を受けた。依頼面積は1,940m²である。また、現地発掘調査作業および空中写真測量図化作業等に係る関連作業の支援を日本海航測株式会社（以下、支援業者と略）に委託し、県埋文センター監理のもと実施した。担当者は次のとおりである。現場代理人 村田道博、発掘補助員 竹中庸介、調査補助員 福富星一

現地調査は平成29年4月13日から同年8月25日にかけて実施した（第3章参照）。4月5日に事業者、JV、県文化財課、県埋文センター、支援業者による現地打合せを行い、事前調整工事の進捗状況、調査範囲、現地作業での注意点、排水処理、仮設建物建上などについて協議・確認をした。調査は調査区を南西側から北東側にかけて、農道・水路などを挟み、0区～6区に分けて行った。4月13日より1・2区から重機による表土除去作業を実施。4月14日から支援業者により機材・仮設建物等準備を着手、4月27日から作業員による現地での発掘調査を開始した。5月10日に3区の表土除去を行い、その後調査を進め、5月18日に2区、5月30日に1区の空中写真測量を行い、中世の道路側溝の可能性のある溝や水路を検出、地山と考えていた砂層から縄文土器が出土した。6月1日より4・5区の表土除去を開始し、6月29日に0・3・4区の空中写真測量を実施した。3区では古代の道路側溝の可能性のある並行する溝や4区で



第4図 調査区・グリッド配置図 (S=1/1,500)

は畝溝状の溝などを検出した。7月7日に6区の表土除去を行った。7月23日に現地説明会を開催し、大雨の中多くの参加者が来場した。8月19日に地元新聞に「平安期の道路遺構発見」とする新聞記事が掲載された。8月10日に5・6区の空中写真測量を行い、畝溝状の溝群や並行する溝を確認した。お盆休みを挟み、補足調査と撤収準備作業を行なながら、6区西側で県文化財課による試掘調査に合わせて小規模な7区を設定し、その日のうちに写真測量を実施した。8月25日に補足調査が終了し、8月30日に支援業者による仮設建物・機材等の撤収作業も完了した。

平成29年8月25日付け財埋第224号で教育長あてに発掘調査現地作業の完了報告を提出、現地調査で出土した遺物については、遺失物法第4条の規定に基づき、同年8月28日付け財埋225号で小松警察署長に埋蔵物発見届を提出、同年9月1日付け教文第1529号で出土品が文化財として認定された旨通知がなされた。なお、調査体制は第1表のとおりである。

また、県文化財課により、令和元年11月に5・6区東側で工事立会による調査が行われた。調査区を8区と設定し、畝溝を中心とする溝状遺構を検出した。成果は今回の報告に含めている。

第3節 整理作業の経過

事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として、出土品整理作業のうち出土遺物の記名・分類・接合・実測・トレース作業を平成30年度に実施した。

令和元年度に木製品の樹種同定と石器・石製品の石質同定作業を株式会社パレオ・ラボに委託して実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

また、令和3年度に株式会社パレオ・ラボに花粉分析・珪藻分析・植物珪酸体分析を委託して行い、調査部県関係調査グループが担当した。

報告書刊行については、令和元年度に一部の原稿・図版作成等を行い、令和3年度に残りの原稿・図版作成等を実施し、編集・校正作業を経て刊行することとなった。

調査年度	平成29年度	整理年度	平成30年度	整理年度	令和元年度	整理年度	令和3年度
調査期間	平成29年4月13日～同年8月25日	整理期間	平成30年4月1日～平成31年3月31日	整理期間	平成31年4月1日～令和2年3月31日	整理期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
調査主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 田中幹太郎	調査主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 田中幹太郎	調査主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 田中幹太郎	調査主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター 理事長 田中幹太郎
総 指 　柴田 正枝(専務理事)	総 指 　相野 索一(専務理事)	総 指 　相野 索一(専務理事)	総 指 　相野 索一(専務理事)	総 指 　相野 索一(専務理事)	事 務 　相野 利道(事務局員)	事 務 　北谷 伸康(事務局員)	事 務 　北谷 伸康(事務局員)
事 務 　相野 利道(事務局員)	事 務 　山口 登(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)	事 務 　伊藤 康(秘書 GL)
総 管 　藤田 阿謙(所長)	総 管 　藤田 阿謙(所長)	総 管 内 光次郎(調査部長)	総 管 内 光次郎(調査部長)	総 管 内 光次郎(調査部長)	整 理 　伊藤 雅文(調査部員)	整 理 　川辻 誠(調査部員)	整 理 　伊藤 雅文(調査部員)
総 管 　松山 和彦(特定事業調査 GL)	総 管 　土屋 宗宣(特定事業調査 GL)	総 管 　久田 正弘(専門調査 GL)	総 管 　久田 正弘(専門調査 GL)	総 管 　久田 正弘(専門調査 GL)	監 督 　松田 伸司(専門調査 GL)	監 督 　松田 伸司(専門調査 GL)	監 督 　松田 伸司(専門調査 GL)
相 当 　安中 啓徳(特定事業 G 専門員)	相 当 　神谷 実生(国際体調査 G 主幹)	相 当 　安中 啓徳(特定事業 G 専門員)	相 当 　安中 啓徳(特定事業 G 専門員)	相 当 　安中 啓徳(特定事業 G 専門員)	相 当 　安中 啓徳(専門調査 G 主幹)	相 当 　安中 啓徳(専門調査 G 主幹)	相 当 　安中 啓徳(専門調査 G 主幹)

G：グループ、GL：グループリーダー

第1表 調査・整理体制組織表

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大領遺跡は小松市大領町・今江町に所在する。小松市は南北に長い石川県の南西部に位置する南加賀の中心都市である。昭和15(1940)年に2町6村が合併して市制が施行され、昭和30・31(1955・1956)年の合併・編入を経て現在の市域は総面積371.05km²を測る。

地勢は南方の山間部が大勢を占め、中央の丘陵部、北方の平野部に大きく分かれる。山間部の南端に位置するのが市内最高峰の大日山(1,369m)であり、福井県境となっている。市域を流下する一級河川梯川は白山山系大日連峰鉢ヶ岳(1,175m)に源を発し、白山を中心とした加越山地を経てその北縁を成す江沼丘陵及び能美丘陵を開拓しながら平野部へ抜けて日本海へ注ぐ。下流に広がる平野部は、梯川が氾濫を繰り返することで形成された沖積低地であり、手取川扇状地外縁部でもある能美平野が広がる。その南西方に位置するのが小松平野であり、縄文海進期には海面下であった。次第に海岸部には北西からの季節風の影響で海岸砂州

が発達し、それが土台となって海岸砂丘が形成されていく。それとともに海水面が低下したためにその内側に取り残された海水が日本海から閉鎖されて潟となり、埋没して潟埋積平野となった。現在、小松平野の海岸部には小松砂丘が形成され、それに平行して内陸部により古い中列砂丘(砂州)と内列砂丘(砂州)が伸びている。潟が埋まらずに潟湖として残ったのが最も古い内列砂丘の内側に位置する今江潟と木場潟である。加賀市に所在する柴山潟を含めて加賀三湖と呼称されるが、そのうち今江潟は埋め立てによって完全に農地化され、柴山潟や木場潟も埋め立てが進んだことにより縮小している。

大領遺跡は小松平野に位置し、木場潟と旧今江潟・柴山潟との間に能美丘陵から派生する標高5~20mの低丘陵である月津台地先端から北東500m先、木場潟北方の標高2~3mの微高地に立地する。この微高地は月津台地の延長線上に延びる旧海岸砂州からなる浜堤であり、小松市の市街地は、この微高地に広がっている。現在では木場潟は前川によって梯川を経て日本海に通じているが、干拓以前は小河川で結ばれた今江潟を経由して、そこから延びる前川が梯川に連結していた。また、中世後半の史料から、内陸部の北陸道が加賀三湖の間を縫って現在の小松市街地に通じていたことが判明しており、水・陸上交通の利便性のよい場所であったことが窺われる。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺は木場潟や今江潟の干拓地によって陸地化したところが多いことからそれほど遺跡の密度は高くはない。古来より陸地であった月津台地やその延長にある微高地、旧木場潟の対岸となる能美丘陵上に遺跡が分布し、縄文時代からの遺跡が確認される。

縄文時代の遺跡はいくつか分布しているが、その多くが散布地である。草創期から後晩期までの土



第5図 遺跡の位置

器が出土し、中期の竪穴建物が確認された今江五丁目遺跡（12）を始め、縄文時代中期には月津台地上で五郎座貝塚（8）、土百遺跡（13）、矢崎宮の下遺跡（21）などが確認される。後期以降は遺跡分布の中心が丘陵部に移るが、本遺跡や八日市地方遺跡（7）など微高地上で後期から晩期の土器が出土している。縄文海進の頃は海面下であったとされる小松平野では、後晩期以降、ようやく居住が可能になりつつあったのだとみられる。

弥生時代も遺跡周辺は散布地が点在する程度であるが、約2km北に位置する小松駅周辺に北陸を代表する拠点集落である八日市地方遺跡の集落が形成される。八日市地方遺跡では、遺跡を東西に貫く川跡の両岸に多重の環濠に囲まれた居住域、その外側には墓域が広がっており、川跡の肩部付近では玉生産や木器生産が行われていたとともに、貝塚や木の実の貯蔵穴なども確認された。大量の出土遺物の中には、弥生時代中期前半、国内最古の柄付き鉄製鎧が含まれ、舶載鉄器の列島への普及過程を解明する上の重要な発見となった。後期以降は梯川流域に遺跡が点在し、終末期以降に月津台地の遺跡が増加する。

古墳時代になると、月津台地上に小規模な後期古墳が築造されており、三湖台古墳群と総称される。全長30mの前方後円墳、御幸塚古墳（11）を始め、円墳の土百古墳（14）、孤山古墳（15）、矢崎B古墳（20）などが築造されたが、その多くはすでに消滅しており、金環や馬具などわずかな出土品が知られるのみである。集落遺跡では矢崎宮の下遺跡（21）で6世紀前後の竪穴建物が確認される。

飛鳥時代では薬師遺跡（19）や矢崎宮の下遺跡で7~8世紀のL字型カマドを付設する竪穴建物を検出しておらず、額見町遺跡を中心とした月津台地西南部地域以外にも朝鮮系の移民集落が分布していたことが判明した。また今江五丁目遺跡や孤山遺跡（16）でも同時期の竪穴建物や掘立柱建物を検出している。奈良・平安時代にかけては薬師遺跡や三谷大谷遺跡（25）でも遺物が出土しており、薬師遺跡では倉庫とみられる掘立柱建物の存在から末端官衙の要素かと指摘されている。今回、大領遺跡（1）で新たに確認された北陸道とみられる道路遺構が、南西に位置する薬師遺跡近くを通っている可能性もあり、交通の要衝に設置された公的機関が存在しても不思議はない。

中世には幸町遺跡（3）、三谷大谷遺跡などの集落遺跡や、御幸塚城跡（10）、本折城跡（5）などの城跡があり、前代より遺跡数が増加する。また、近世には丘陵部で瓦窯や再興九谷の窯跡が操業する。三谷大谷遺跡では中世前半の大型掘立柱建物が検出されたと共に、中世後半の遺物も出土しており、断続的に集落が営まれていたことが分かる。幸町遺跡では多量の鍛冶関連遺物が出土したことから中世後半の工人集落と推定されている。当時、その北西に位置する本折は絹の産地とされ、加賀三湖の間を抜けて本折に至る中通り道は主要な街道として位置付けられていた。原料の調達、製品の出荷に利便性のよい街道近くに幸町遺跡のような手工業生産に携わる集落が成立したのだろう。この街道は、本遺跡で検出した道路遺構の理解にも関わってくる。御幸塚城跡や本折城跡はともに一向一揆の攻防が繰り広げられた戦国時代から近世初頭の城跡とされ、御幸塚城跡では今も本丸跡や二ノ丸跡が現存する。本遺跡東部に所在する県指定史跡である浅井畷古戦場（2）は、慶長五（1600）年に金沢へ帰還する途中の前田利長軍に丹羽長重軍が攻撃した場所とされ、戦死した利長軍の武将の供養塔が建てられている。

参考文献

- 石川県小松市 2010 「図説 こまつの歴史 新修 小松市史10」
柏野義夫 1992 「5 加賀平野」『アーバンクボタ N.O.31』 株式会社クボタ



1. 大領遺跡（縄文・古代・中世）
2. 浅井坂古戦場（近世）
3. 幸町遺跡（縄文・弥生・古代・中世）
4. 多太神社境内遺跡（中世）
5. 本折城跡（中世）
6. 上本折遺跡（弥生～中世）
7. 八日市地方遺跡（縄文～近世）
8. 五郎座貝塚（縄文）
9. 今江横穴群（不詳）
10. 御幸塚城跡（中世）
11. 御幸塚古墳（古墳）
12. 今江五丁目遺跡（縄文～中世）
13. 土百遺跡（縄文）
14. 土百古墳（古墳）
15. 狐山古墳（古墳）
16. 狐山遺跡（古墳）
17. 今江向／山遺跡（弥生）
18. 串カソノヤマ B 遺跡（古墳）
19. 葉師遺跡（縄文～古代）
20. 矢崎 B 古墳（古墳）
21. 矢崎宮の下遺跡（縄文～中世）
22. 三谷遺跡（縄文）
23. 三谷 B 遺跡（弥生・古墳）
24. 三谷トガ谷遺跡（不詳）
25. 三谷大谷遺跡（古代・中世）
26. 三谷大谷横穴群（不詳）
27. 蓬代寺 B 遺跡（縄文・中世）
28. 蓬代寺瓦窯跡（近世）
29. 蓬代寺窯跡（近世）
30. 蓬代寺ムコン山製鉄跡（中世）
31. 蓬代寺ニユーハ山遺跡（古代）
32. 蓬代寺城跡（不詳）
33. 三谷大谷 A 製鉄跡（不詳）
34. 三谷大谷 B 製鉄跡（不詳）

第6図 周辺の遺跡 ($S=1/25,000$)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

南北に細長い調査区は、東西方向の農道や水路が横断している箇所で複数に分断されたことからそれらを境としてそれぞれの調査区を南西から北東方向へ0区から6区と呼称した。また、6区西側では調査と並行して文化財課の試掘・確認調査により追加となった7区及び令和元年度に5区東側で文化財課の工事立ち合いにより調査された8区を設置している（巻頭図版1、第4・7～9図）。

グリッドは平面直角座標系に則した10m間隔とした。交点の杭名称を東西方向は西から東へアルファベットで、南北方向は南から北へ算用数字で表し、南東杭の名称をグリッド名とし10mメッシュをD7区等と呼称した（第1章第4図）。これを利用し、遺構の位置や遺物取り上げ地点の整理に利用した。遺構番号・遺物報告番号は区で分けることなく通し番号を付している。

第2節 層序

本遺跡は約7,300年～5,300年前頃の縄文時代に形成された内陸砂州（沿岸州）東端の潟埋積平野との境界付近に立地することから、各調査区に共通して海成砂を中心とする堆積土を確認した。後世の耕地整理により遺構面は削平を受け、耕作痕が掘り込まれており、上部には暗オリーブ褐色細砂を中心とする近世以降の耕作土が堆積していた。奈良・平安時代～中世の遺構検出面となる基盤層は黄色～黄褐色細砂を中心とするが、上面からは縄文・弥生土器が出土する。

各調査区の壁断面写真と土層断面図を合成したものを総括後ろの第65図～第75図に掲載した。

第3節 遺構と遺物

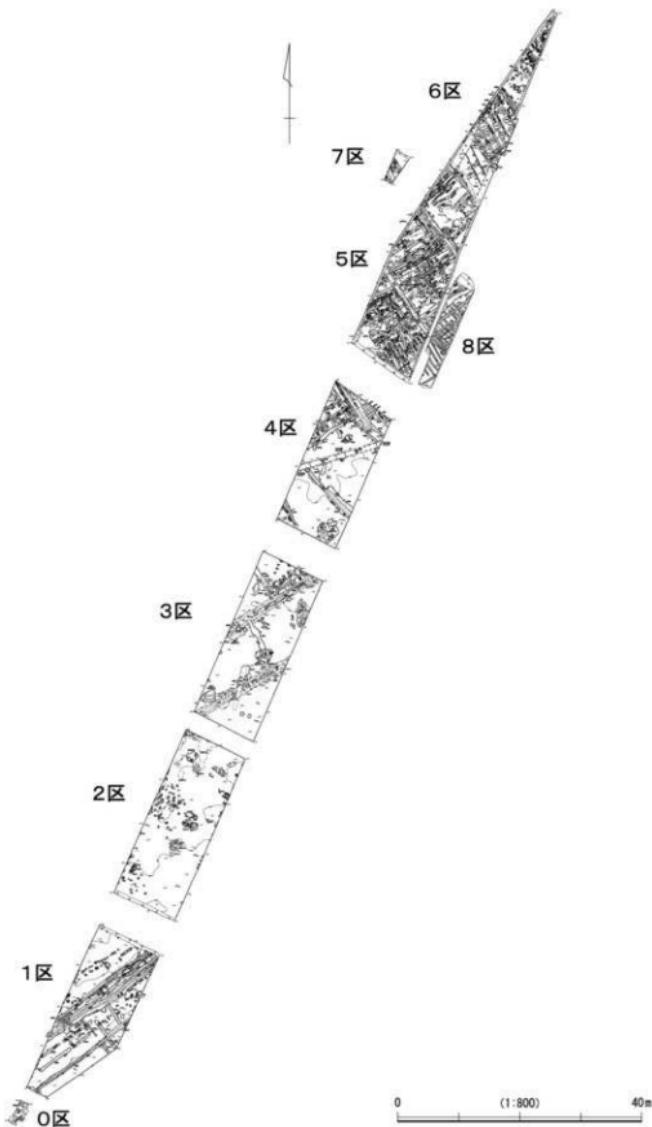
1. 0区（第10・46図、第2表、図版1・9）

0区は狭小であるため遺構は少ないが、P28の基盤層と遺構検出で弥生前期とみられる土器片が出土し、第46図1、2に図示した。1は内外面、2は外面に条痕文がみられ、1には外面に赤彩とススの痕跡が残る破片もある。

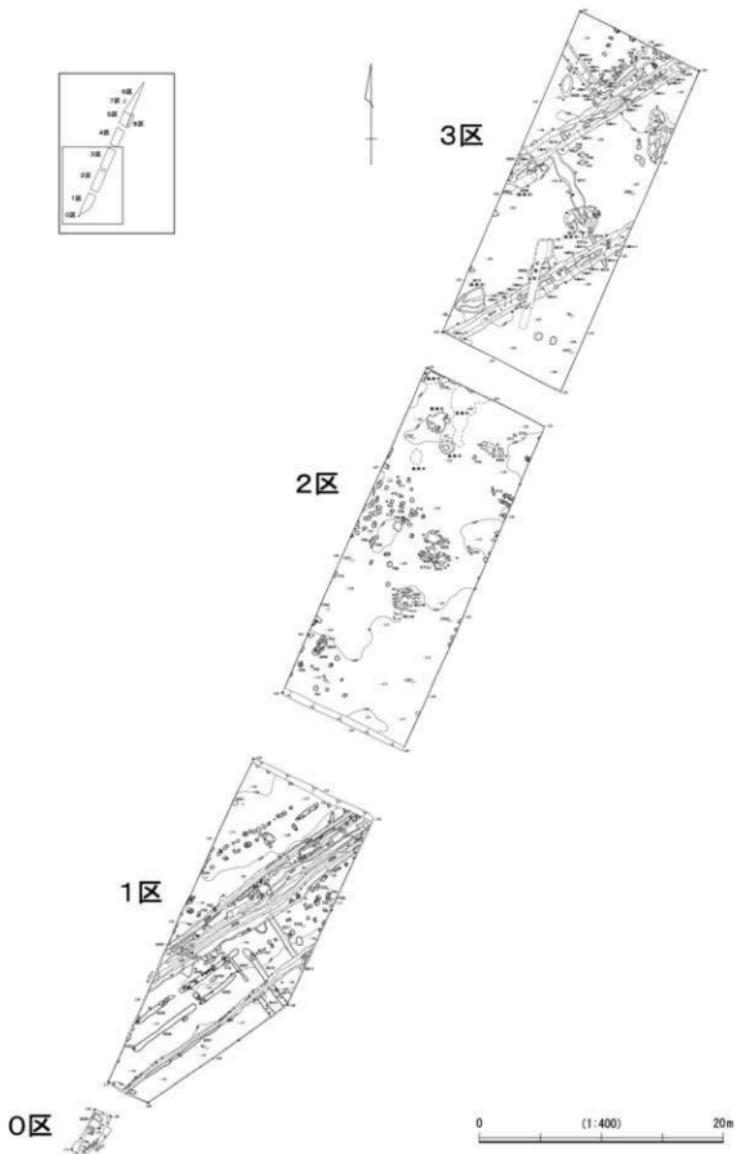
2. 1区（巻頭図版2・4、第10～13図、第2表、図版1・2・9・10）

延長約30m、幅約11mの台形状を呈する調査区であり、中世の道路遺構の両側側溝とみられるSD01・08や水路状の溝SD06と並行する溝SD13や直交する溝SD11、SD08西側に並行して並ぶ小穴列などを検出した。

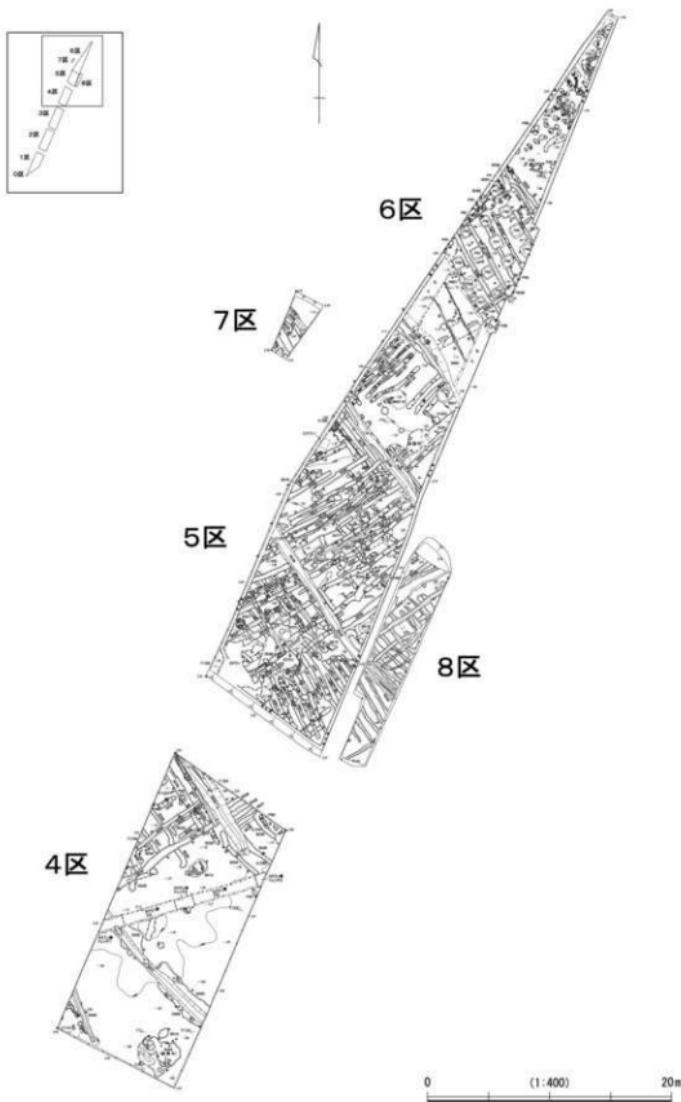
SD01 延長約20mを確認した中世道路遺構の東側側溝とみられる溝で、主軸はN55°Eで北東～南西方向に走る。幅40～80cm、深さ17～27cmを測り、底面レベルは南西側に向かってわずかに低くなる。南壁側の一部に浅いテラスが確認され、土層断面の観察からすればやや北西に場所を移して掘り直しが行われたか、別溝を切り込んでいるかのいずれかであろう。テラス部分の深さや覆土は並行して検出されたSD02・03に類似する。SD10～12を切り込んでいる。



第7図 全体図・調査区位置図 ($S=1/800$)



第8図 全体図① ($S=1/400$)



第9図 全体図② ($S=1/400$)

遺物は第46図3~6を図示した。4は青磁碗の胴部片で、外面にかすかに鏽薙弁が確認される。3、5は越前焼で、3は壺片を転用した円盤状陶製品、5は壺口縁端部片である。端部の方形化が進み、外面の稜も形態化していることから15世紀中葉頃の製品とみられる。

SD 02 長さ6.4mで北東-南西方向に走る。幅40~50cm、深さ2~6cmを測る。北東側の延長上に同軸のSD 04があり一連の溝とみられる。遺物は縄文土器片が出土した。

SD 03 長さ4mで北東-南西方向に走る。幅30~48cm、深さ1~7cmを測る。北東側の延長上に同軸のSD 05があり一連の溝とみられる。SD 02とは1.2mの距離を持って並行する。

SD 04 長さ3.8mで北東-南西方向に走る。幅36~48cm、深さ2~9cmを測る。南西側の延長上に同軸のSD 02があり一連の溝とみられる。

SD 05 長さ5.9mで北東-南西方向に走る。幅38~48cm、深さ2~3cmを測る。南西側の延長上に同軸のSD 03があり一連の溝とみられる。SD 04とは1.1~1.2mの距離を持って並行する。

SD 06 延長約20mを確認した、水路とみられる溝で北東-南西方向に部分的に湾曲しながら走る。幅112~220cm、深さ27~50cmを測る。二段掘りとなっており中心部分が深い。これは、土層堆積の観察から掘り直しが認められ、最終段階の溝が中心部分に深く掘削されたため、結果的に二段掘りに見えるだけである。湾曲部分でSD 11が直交し接続するが、掘り直し後のSD 06はSD 11より新しい。遺物は第46図7~9が出土した。

SD 07 長さ2.2mで北東-南西方向に走る。幅22~30cm、深さ3~6cmを測る。

SD 08 延長約18.6mを確認した中世道路遺構の西側側溝とみられる溝で、北東-南西方向に走る。幅36~66cm、深さ10~37cmを測り、底面レベルは南西側に向かってわずかに低くなる。

本遺構はSD 01と並行しており、セットで中世の道路遺構の両側側溝になるとみられる。SD 01との芯々距離は約7.5m、路面幅は約7mである。路面は削平のため残っていない。

遺物は第46図10、11が共に上層から出土した。10は越前焼で、鉢目などは確認できないが、内面が平滑であることからすり鉢片とみられる。11は瓦質土器の火鉢類で、外面は蕨手文と菊花のスタンプで加飾される。

SD 09 長さ2.6mで北西-南東方向に走る。幅18~36cm、深さ5~7cmを測る。南東側の延長上に同軸のSD 12があり一連の溝とみられる。SD 05より新しい。

SD 10 長さ4.9mで北西-南東方向に走る。幅46~60cm、深さ4~8cmを測る。SD 09とは約1m、SD 10とは0.8mの距離を持って並走する。SD 01より古い。

SD 11 長さ4.9mで北西-南東方向に走る。幅46~60cm、深さ25~35cmを測る。SD 10とは2.4m距離を持って並走する。SD 01、掘り直し後のSD 06より古い。遺物は第46図12、13を図示した。12は青花碗小片、13は鉄製の角釘である。

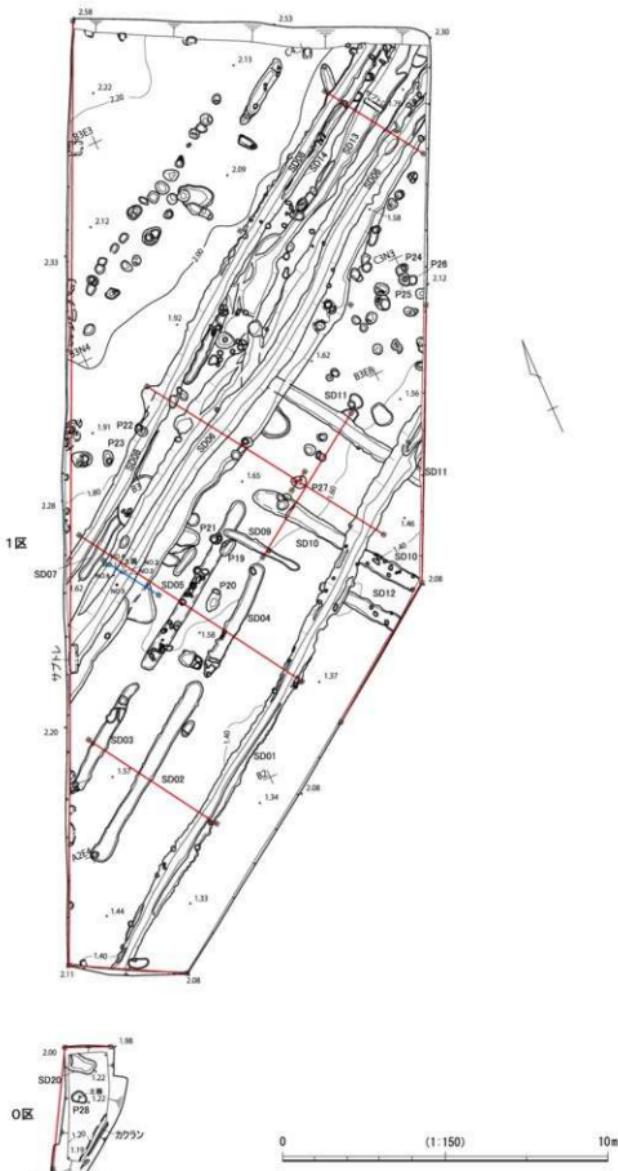
SD 12 長さ2.6mで北西-南東方向に走る。幅28~48cm、深さ2~4cmを測る。北西側の延長上に同軸のSD 09があり一連の溝とみられる。SD 01より古い。

遺物は第46図14を図示した。瀬戸・美濃焼の内堀げ皿底部で、削り出し高台である。16世紀後半の製品である。

SD 13 延長9.6mを確認した。北東-南西方向に走る。幅37~96cm、深さ4~14cmを測る。部分的に二段掘りとなる。

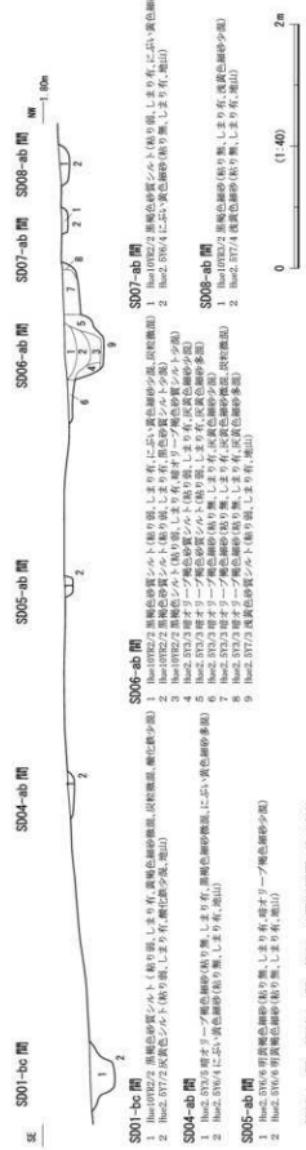
SD 14 延長5.4mを確認した。北東-南西方向に走る。幅20~30cm、深さ5~9cmを測る。SD 08に切られている。

遺物は第46図15の越前焼壺の肩部小片、16の大型のフイゴ羽口先端部を図示した。

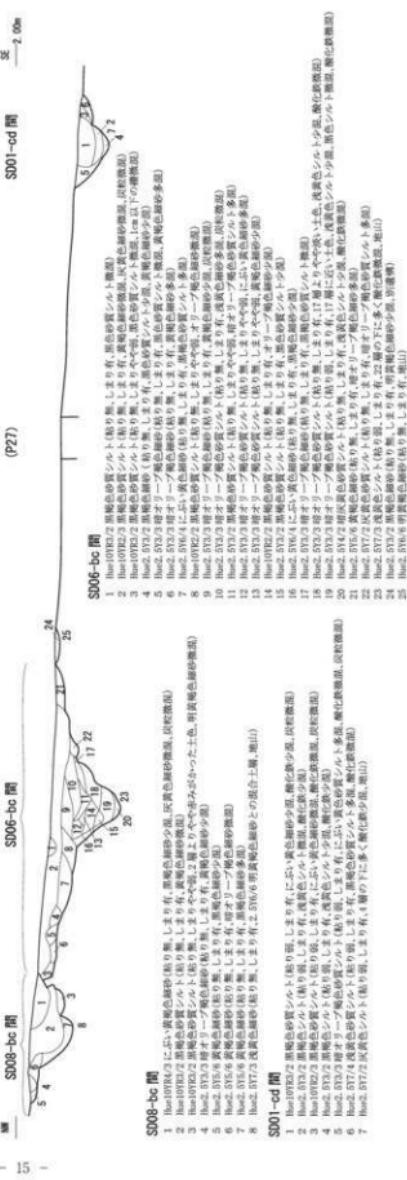


第10図 0・1区断面実測箇所図 (S=1/150)

SD01-bc 間・SD04-ab 間・SD05-ab 間・SD07-ab 間・SD08-ab 間断面図 (S=1/40)



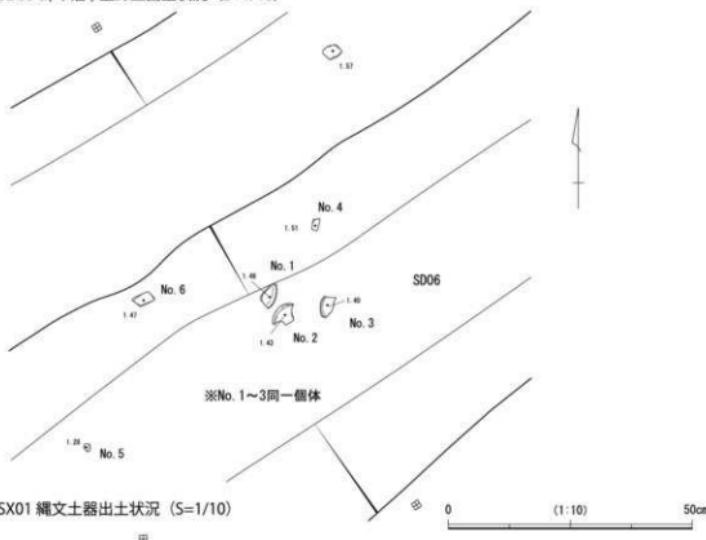
SD08-bc 間・SD06-bc 間・SD01-cd 間断面図 (S=1/40)



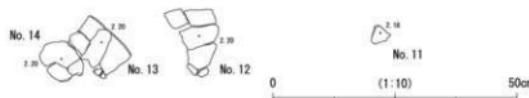
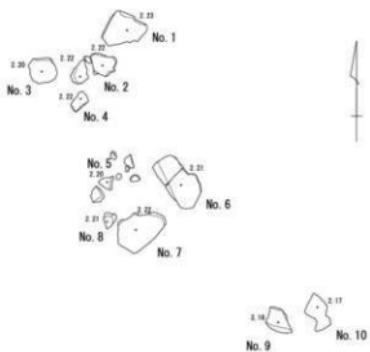
第12図 1区SD断面実測図2 (S=1/40)

第12図 1区SD断面実測図2 (S=1/40)

1区 SD06-a(下層) 土師皿出土状況 (S=1/10)



2区 SX01 繩文土器出土状況 (S=1/10)



第13図 1・2区遺物出土状況図 (S=1/10)

P 23 第46図17の鉄製品が出土した。平たい形状から鑿状の工具とみられる。

ベース（基盤層）中 第46図18・19が出土した。18は縄文土器鉢片で、外面はミガキと凹線文で加飾する。一箇所、焼成前穿孔が確認される。19は磨石片で、全面が使用のため平滑である。

3. 2区（巻頭図版4、第13~17図、第2・3表、図版2・3・10）

1区とは農道を挟み、延長約29m、幅約11mの長方形状を呈する調査区であり、調査区中央付近で小穴群や土坑などを検出した。また、基盤層の砂層SX 01からは縄文土器がまとまって出土した。

ピット P 04、07~11、13を図示した。P 08~11は芯々で90~110cmの距離をもって南北に近い軸で並んでいる。ただし、土層断面の観察では柱痕跡は明確ではなく、杭・柱列とまでは言えない。

遺物はP 04から第47図22、P 12から第47図23、P 15から第47図24、P 18から第47図25が出土した。23は須恵器無台碗である。底部は回転糸切りであり、器壁も薄いことから10世紀代に降る製品とみられる。25は染め付けの小杯で、近代以降の製品である。他にP 05からは陶胎染付碗も出土した。

SK 01 短軸60cm、長軸256cmの長円形を呈す。深さは最深部で45cmを測る。土層断面の観察からいくつか別遺構が重複しており、東半部の土坑を西半部のピット状の耕作痕が切り込んでいるようである。SK 02 と合わせ風倒木痕の可能性があるが、第47図20の縄文土器深鉢片が出土した。

SK 02 短軸80cm、長軸180cmの不整形土坑で、深さは14~27cmを測る。東部の凹みは古い別遺構の可能性があり、その部分を除けば第2層オリーブ褐色細砂ではほぼ一気に埋まっている。

SK 03 短軸70cm、長軸206cmの長円形で、深さは最深部で49cmを測る。土層断面第1~3、又は第1~3、6~7層部分は第4・5・8層部分より新しい別遺構の可能性がある。

SK 04 長軸70cm、深さ21cmの不整形の土坑である。P 14より古い。

SK 05 径70cm、深さ26cmの略円形土坑である。SK 04より古い。

SK 01 調査区中央やや南寄りの基盤層から第47図21の縄文土器片などが集中して出土した箇所をSX 01とした。掘り込み等は確認されておらず、内陸砂州形成時の埋没であろう。21は小型の深鉢で口縁はわずかに波状となる。全体に被熱し、外面上半にススが付着していることから、底から三分の一程度を灰に埋めて煮炊きに使用されたことが分かる。縄文時代後期の土器である。他にSX 01周囲を掘り下げたトレンチからも縄文土器片が複数出土した。

4. 3区（巻頭図版3・4、第18~25図、第3表、図版3~5・10・11）

延長約29m、幅約11mの長方形状を呈する調査区であり、調査区内を南西~北東方向に幅約150cmの並行する2本の溝SD 15・16を確認した。古代の道路遺構の側溝とみられる。SD 16北側には区画溝とみられるL字形の溝SD 18を検出した。他に道路遺構より古い風倒木痕SK 06を確認している。

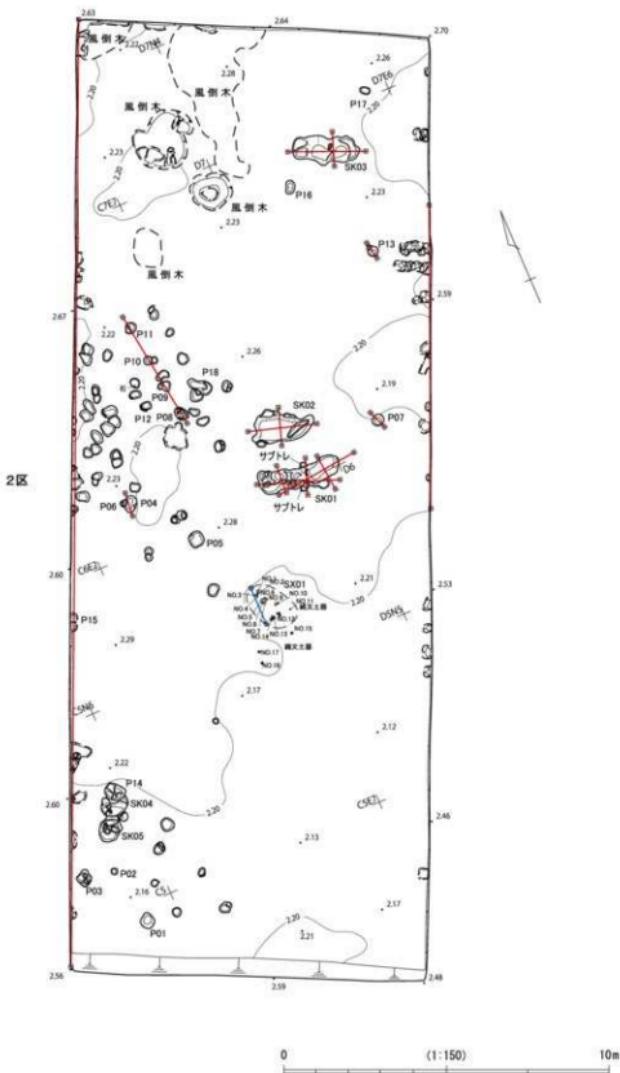
ピット P 29・31・32、P 35~37を図示した。P 29・31・32は図示しなかったP 30を含めてSD 18内側の上端に接して並んでおり、覆土も共通することから一連の遺構と推定される。

SK 06 径260cm以上、深さ47cmの土坑である。SK 07、道路側溝SD 16より古い。風倒木痕とみられ、他にも風倒木痕がみられることから、道路構築前には、周辺は林が広がっていた可能性がある。

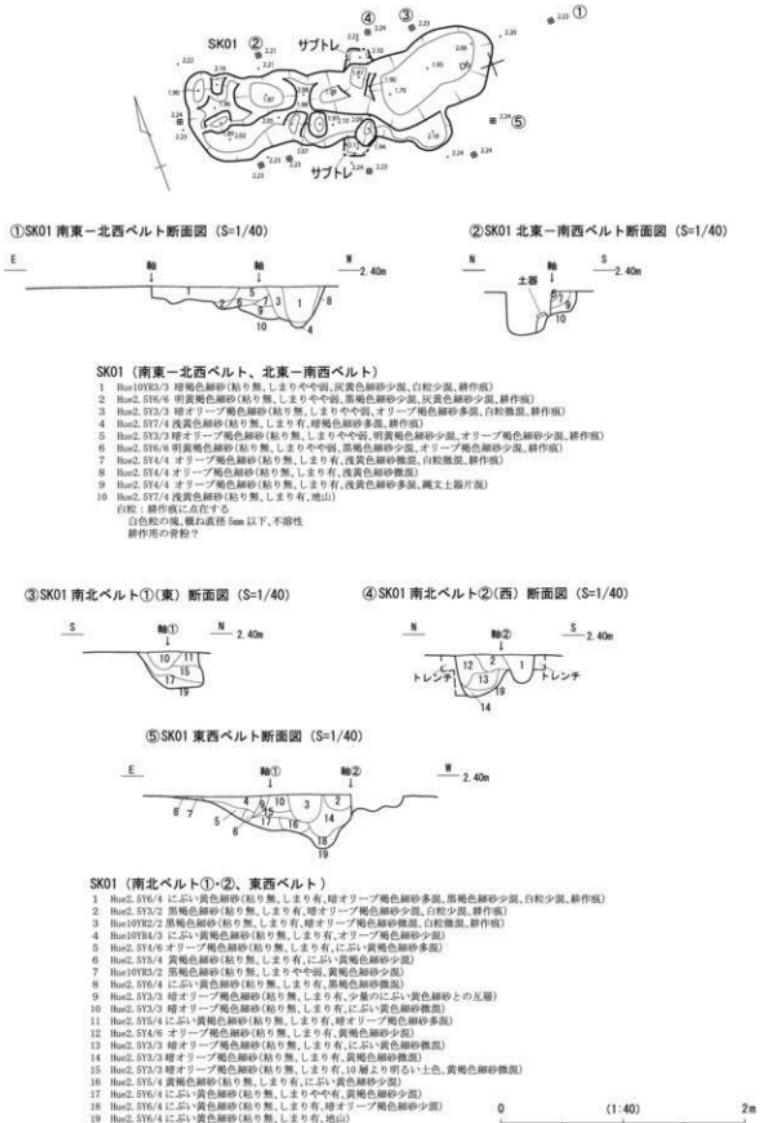
SK 07 SK 06、SD 16の上面で検出した。径88~100cmの略円形を呈し、深さは19cmを測る。

SK 08 短径90cm、長径186cmの長円形を呈し、深さは27cmを測る。土層断面から壁面が崩落して埋まった様子が窺えることから、一定期間開口していたことが窺われる。

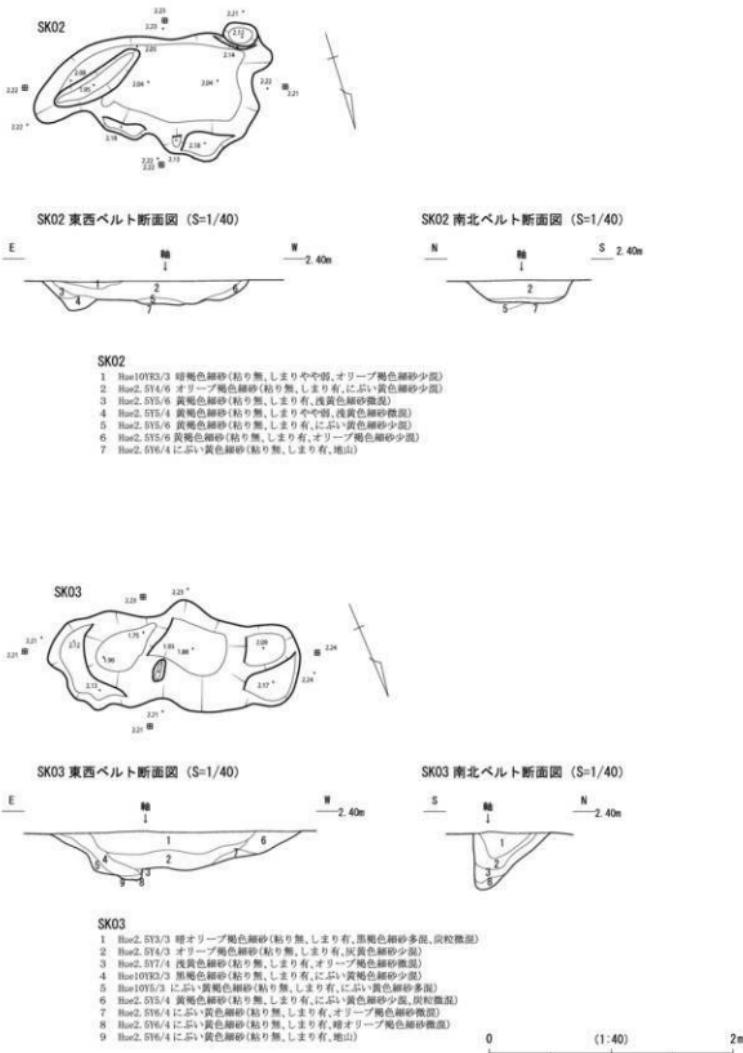
SK 09 径78cm以上、深さ24cmの遺構であるが、東部を試掘坑により損壊を受けており全形は不明で



第14図 2区断面実測箋所図 ($S=1/150$)

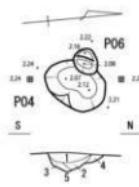


第15図 2区 SK 断面実測図1 (S=1/40)

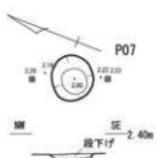


第16図 2区 SK 断面実測図2 (S=1/40)

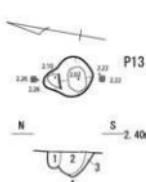
P04 平面・断面図 (S=1/40)



P07 平面・断面図 (S=1/40)



P13 平面・断面図 (S=1/40)



P04

- 1 Huie10YR3/4 單褐色細砂(粘り無、しまりやや弱、にぶい黄褐色細砂少混、炭粒微混)
- 2 Huie10YR4/3 にぶい黄褐色細砂(粘り無、しまりやや弱、にぶい黄褐色細砂少混)
- 3 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り無、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 4 Huie10YR3/2 黒褐色細砂(粘り無、しまりやや弱、明黃褐色細砂少混)
- 5 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り無、しまり有、地山)

P07

- 1 Huie2.SY3/3 線オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、炭粒微混)
- 2 Huie2.SY5/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、明黃褐色細砂多混)
- 3 Huie2.SY5/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、地山)

P13

- 1 Huie10YR3/4 單褐色細砂(粘り無、しまりやや弱、明黃褐色細砂微混、耕作層)
- 2 Huie2.SY4/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 3 Huie2.SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混)
- 4 Huie2.SY6/6 明黃褐色細砂(粘り無、しまり有、地山)

P08・P09・P10・P11 断面図 (S=1/40)



P08

- 1 Huie10YR3/4 單褐色細砂シルト(粘り弱、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 2 Huie10YR3/2 黒褐色細砂(粘り弱、しまりやや弱、明黃褐色細砂少混)
- 3 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまりやや弱、明黃褐色細砂少混)
- 4 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、地山)

P09

- 1 Huie10YR3/4 單褐色細砂(粘り無、しまりやや弱、明黃褐色細砂少混)
- 2 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 3 Huie10YR7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、地山)
- 4 Huie10YR3/4 單褐色細砂(粘り無、しまり有、明黃褐色細砂少混)

P10

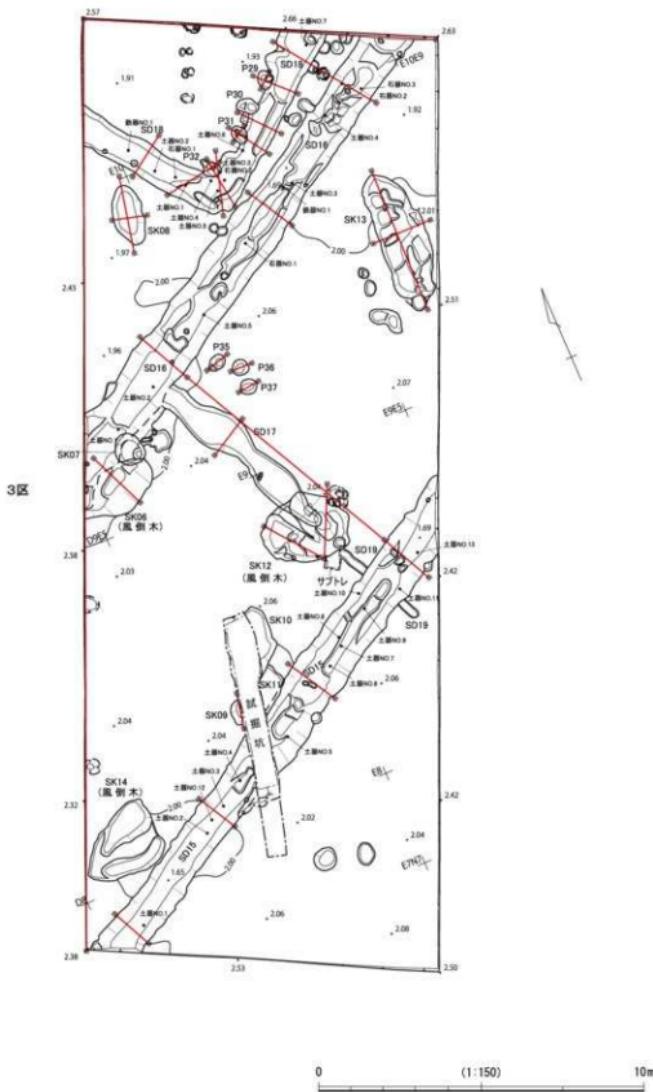
- 1 Huie10YR3/2 黒褐色細砂シルト(粘り弱、しまりやや弱、明黃褐色細砂微混)
- 2 Huie10YR7/2 黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 3 Huie2.SY7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、地山)

P11

- 1 Huie2.SY3/3 線オリーブ褐色細砂シルト(粘り弱、しまり有、明黃褐色細砂多混)
- 2 Huie2.SY7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、明黃褐色細砂少混)
- 3 Huie2.SY7/6 明黃褐色細砂(粘り弱、しまり有、地山)

0 (1:40) 2m

第17図 2区 Pit 断面実測図 (S=1/40)



第18図 3区断面実測箇所図 (S=1/150)

ある。SK 07同様に一定期間開口していたことが窺われる土層堆積である。深さが類似すること方試掘坑を挟んで対峙するSK 11と同一遺構かもしれない。

SK 10 径210cm以上、深さ24cmの遺構であるが、西部を試掘坑により損壊を受けており全形は不明である。

SK 11 径90cm以上、深さ19cmの遺構であるが、西部を試掘坑に、北部をSK 10に切られていることから全形は不明である。試掘坑を挟んで西側にあるSK 09と同一の遺構の可能性もある。

SK 12 短径200cm、長径270cmの略円形を呈し、最深部で63cmを測る。内部の構造が不整形であることから風倒木痕と推定される。bc間の土層断面図から、北西部に別遺構が重複している可能性もある。

SK 13 短軸66cm、長軸440cmの溝状遺構で、最深部で54cmを測る。ほぼ南北軸に沿う。底面が不定形であり、用途は不明だが、ある程度埋まった段階で掘り直しされている。

SK 14 短軸90cm、長軸250cmの不整形土坑で、深さは21cmを測る。風倒木痕とみられる。

SD 15 幅116~172cm、深さ34~59cmを測り、延長18.1mを検出した。主軸はN 60° Eで、北東~南西方向に走る古代の道路遺構の東側側溝とみられる。路面は削平を受け遺存していない。

遺物は第47図の26が上面から、27・30が上層から、28・29が下層から出土した。26は型作りの紅皿で、外面は蛸唐草文で加飾される。内面は全面施釉だが、外面は口縁部付近のみ釉がまばらに施されている。19世紀中葉以降の製品であり、重複する近世以降の耕作痕からの出土品とみられる。27~29は須恵器で8世紀後半~9世紀前半頃のものである。道路の存続時期に関わる遺物であるが、周間に集落遺構は確認できず、出土数も少ないため、道路の正確な構築開始時期や存続幅は不明である。27は壺片、28は盤底部、29は双耳瓶である。他に須恵器杯もしくは盤底部も出土している。

SD 16 幅122~162cm、深さ21~50cmを測り、延長17.6mを検出した。北西側が部分的に二段掘りとなっている。底面はかなり凹凸があるが、相対的に見ると南西方向がやや低くなっている。主軸はN 60° Eで、SD 15と直線的に並行していることから、古代の道路遺構の西側側溝とみられる。

SD 15 とは芯々距離で約9.5m、路面幅は約8mを測る。路面部分は削平により遺存していない。主軸を北東方向へ延長すると、小松市古府町の加賀国府推定地や佐々木遺跡、能美窯跡群など古代の遺跡へと至る。

遺物は第47図31が上面から、30・32が上層から出土した。30は中世土師器皿で、内外面とも被熱しており、器表が層状に剥離している。他に須恵器瓶類が出土している。

SD 17 幅50~120cm、深さ5~12cmを測り、延長6.2mを検出した。SD 16より古く、SK 12より新しい。

SD 18 幅72~130cm、深さ14~25cmを測る矩形の溝である。形状から区画溝と推定されるが、やや間を置いて北側に位置する4区で継ぎが検出されていないことから、調査区间でL字状に止まるのか、長方形区画となるのか不明である。

遺物は第48図33~35が出土した。33・34は繩文土器深鉢片、35は打製石斧で、周辺基盤層からの混入遺物とみられる。

SD 19 幅30cm弱、深さ7~11cmを測り、延長3.1mを検出した。SK 12、SD 15より古い。

その他 試掘坑から出土した瓦質土器を第48図36に図示した。胎土に雲母を定量含む。他に検出面から瓦質土器底部片が出土した。

5. 4区（巻頭図版3、第26~31図、第3表、図版5・6・11）

3区とは農道を挟み、延長約25m、幅約11mの長方形状を呈する調査区であり、南西角で検出した



耕作底？

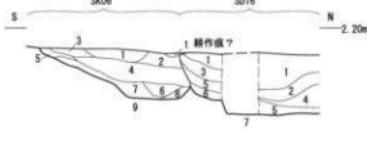
1 Huac2.5Y3/1 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂強混)

SK06

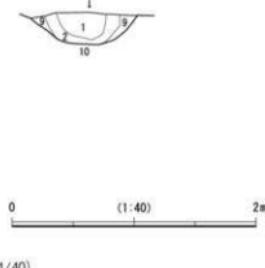
- 2 Huac2.5Y3/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混)
- 3 Huac2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 4 Huac2.5Y3/4 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂強混、白粒微混)
- 5 Huac2.5Y3/5 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 6 Huac2.5Y3/7 暗オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黑色細砂多混)
- 7 Huac2.5Y3/6 ぶどう色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂多混)
- 8 Huac2.5Y3/4 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、黑色細砂強混)
- 9 Huac2.5Y3/2 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SD16

- 1 Huac10Y3/2 黑褐色中質シルト(粘り弱、しまり有、オリーブ褐色細砂強混)
- 2 Huac2.5Y3/2 暗オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 3 Huac2.5Y3/3 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂多混)
- 4 Huac2.5Y3/4 ぶどう色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 5 Huac2.5Y3/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、灰白色細砂多混)
- 6 Huac2.5Y3/7 深黄色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂強混)
- 7 Huac2.5Y3/2 灰白色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)



SK08 東西ベルト断面図 (S=1/40)



SK08

- 1 Huac2.5Y3/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂少混)
- 2 Huac2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂多混)
- 3 Huac2.5Y4/3 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混)
- 4 Huac2.5Y4/4 ぶどう色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂多混)
- 5 Huac2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂強混)
- 6 Huac2.5Y4/2 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 7 Huac2.5Y4/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂多混)
- 8 Huac2.5Y4/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂強混)
- 9 Huac2.5Y4/6 ぶどう色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 10 Huac2.5Y4/4 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)
- 11 Huac2.5Y6/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

第19図 3区 SK 断面実測図1 (S=1/40)



SK09 剖面図 (S=1/40)



SK09

- 1 Huo2.573/3 横オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、灰白色細砂微混、白粒微混
- 2 Huo2.574/2 黄褐色細砂(粘り無)、しまり有、にじみ黄色細砂微混
- 3 Huo2.574/3 オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、黒褐色細砂少混、黃褐色細砂少混
- 4 Huo2.575/6 黄褐色細砂(粘り無)、しまり有、オリーブ褐色細砂少混
- 5 Huo2.576/4 にじみ黄色細砂(粘り無)、しまり有、無化鉄少混、地山



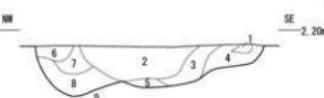
SK12-ab 剖面図 (S=1/40)



SK12-ab 間

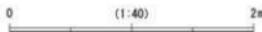
- 1 Huo2.573/2 黒褐色細砂(粘り無)、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 2 Huo2.573/2 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂多混、白粒少混、耕作痕?
- 3 Huo2.573/3 横オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 4 Huo2.573/1 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 5 Huo2.573/4 横オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、黑褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 6 Huo1092/3 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 7 Huo1092/4 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 8 Huo1092/5 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂多混、白粒微混、耕作痕?
- 9 Huo2.574/3 横オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂多混
- 10 Huo2.574/6 オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混
- 11 Huo2.572/1 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、にじみ黄色細砂微混
- 12 Huo2.574/6 オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混
- 13 Huo2.576/6 明黃褐色細砂(粘り無)、しまり有、オリーブ褐色細砂少混
- 14 Huo2.576/5 明黃褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混
- 15 Huo2.576/8 明黃褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混
- 16 Huo2.577/1 黄褐色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混
- 17 Huo2.576/4 明黃褐色細砂(粘り無)、しまり有、オリーブ褐色細砂少混
- 18 Huo2.577/4 深黄色細砂(粘り無)、しまり有、地山

SK12-bc 剖面図 (S=1/40)

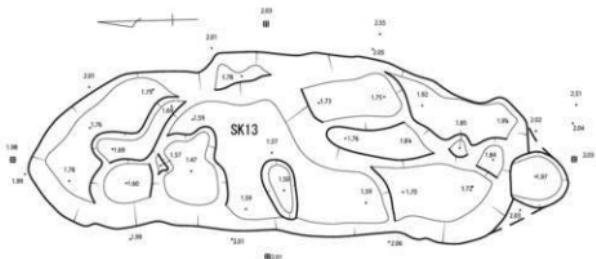


SK12-bc 間

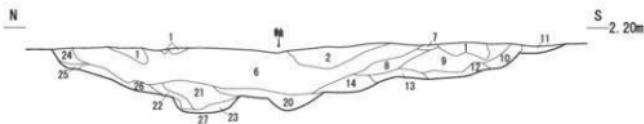
- 1 Huo2.573/2 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?
- 2 Huo2.576/3 にじみ黄色細砂(粘り無)、しまり有、浅黄色細砂多混、酸化鉄少混
- 3 Huo2.575/5 黑褐色細砂(粘り無)、しまり有、浅黄色細砂少混、酸化鉄少混
- 4 Huo2.576/4 にじみ黄色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄微混
- 5 Huo2.575/6 黄褐色細砂(粘り無)、しまり有、暗褐色細砂少混、酸化鉄多混
- 6 Huo2.573/3 横オリーブ褐色細砂(粘り無)、しまり有、黄褐色細砂少混
- 7 Huo2.576/4 にじみ黄色細砂(粘り無)、しまり有、暗オリーブ褐色細砂多混
- 8 Huo2.577/4 深黄色細砂(粘り無)、しまり有、暗褐色細砂少混、酸化鉄少混
- 9 Huo2.577/4 深黄色細砂(粘り無)、しまり有、明黃褐色細砂少混



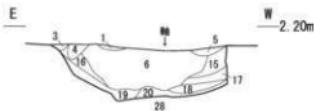
第20回 3区 SK 断面実測図2 (S=1/40)



SK13 南北ベルト断面図 (S=1/40)



SK13 東西ベルト断面図 (S=1/40)

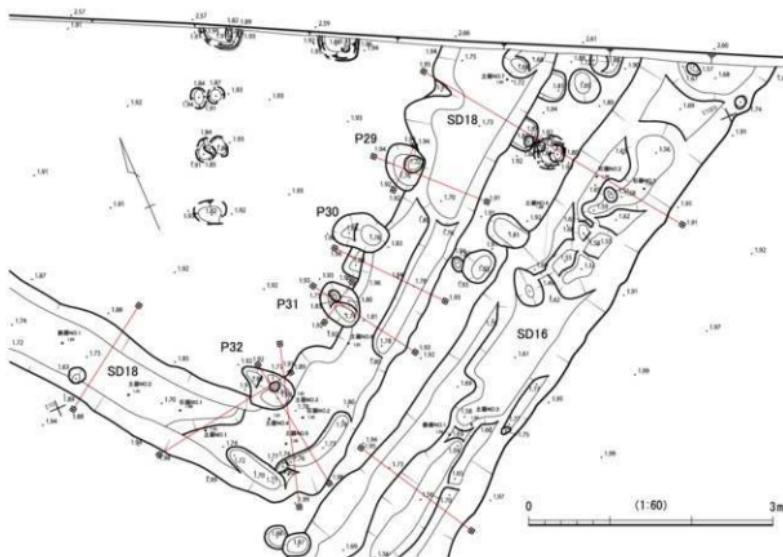


SK13

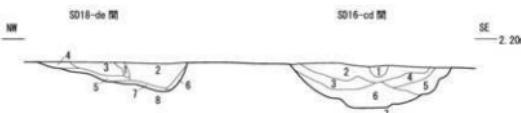
1. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、黒褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?)
2. Hor2. SY3/2 黑褐色細砂(粘り無し、しまり有、(にぶ)黄色細砂微混、白粒微混)
3. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、黄褐色細砂微混、白粒微混、耕作痕?)
4. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、黄褐色細砂少混、白粒微混、耕作痕?)
5. Hor2. SY3/4 黄色細砂(粘り無し、しまり有、オーリーブ褐色細砂少混、耕作痕?)
6. Hor2. SY3/2 黑褐色細砂少混(粘り無)
7. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、オーリーブ褐色少混、白粒微混)
8. Hor2. SY4/4 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、黑褐色細砂少混)
9. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、(にぶ)黑色細砂少混)
10. Hor2. SY3/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、黄褐色細砂少混)
11. Hor2. SY5/6 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有、オーリーブ褐色細砂少混)
12. Hor2. SY6/6 に(に)黄色細砂(粘り無し、しまり有、黑褐色細砂少混)
13. Hor2. SY7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有、暗オーリーブ褐色細砂少混)
14. Hor2. SY3/5 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、浅黄色細砂少混)
15. Hor2. SY4/6 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、暗オーリーブ褐色細砂少混)
16. Hor2. SY4/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、(に)黑色細砂少混)
17. Hor2. SY4/2 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、(に)黑色細砂少混)
18. Hor2. SY4/1 黑褐色細砂(粘り無し、しまり有、(にぶ)黄色細砂少混)
19. Hor2. SY4/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有、白色細砂微混)
20. Hor2. SY6/4 に(に)黄色細砂(粘り無し、しまり有、黑褐色細砂少混)
21. Hor2. SY2/1 黑褐色細砂(粘り無し、しまり有、(に)黄色細砂少混)
22. Hor2. SY4/4 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、浅黄色細砂少混)
23. Hor2. SY7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有、オーリーブ褐色細砂少混)
24. Hor2. SY3/2 黑褐色細砂(粘り無し、しまり有、黄褐色細砂少混)
25. Hor2. SY4/3 黄色オーリーブ褐色細砂(粘り無し、しまり有、(に)黑色細砂少混)
26. Hor2. SY6/3 に(に)黄色細砂(粘り無し、しまり有、オーリーブ褐色細砂少混)
27. Hor2. SY7/3 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有、地山)
28. Hor2. SY7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有、地山)

0 (1:40) 2m

第21図 3区 SK 断面実測図3 (S=1/40)



SD18-de 間・SD16-cd 間断面図 (S=1/40)



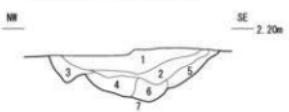
SD18-de 間

- 1 Hse.01Y2/1 黒色砂質シルト(粒り無、しまり有、黒灰色細砂少混)
- 2 Hse.01Y2/1 黒褐色砂質シルト(粒り無、しまり有、に占比 黃褐色細砂少混)
- 3 Hse.01Y2/1 黑褐色砂質シルト(粒り無、しまり有、に占比 黃褐色細砂少混)
に占比 黄褐色細砂少混)
- 4 Hse.2.5Y2/2 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂多混)
- 5 Hse.2.5Y6/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 6 Hse.2.5Y6/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 7 Hse.2.5Y7/4 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 8 Hse.2.5Y7/4 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD16-cd 間

- 1 Hse.2.5Y2/3 暗褐色オーピー褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂微混、耕作痕?)
- 2 Hse.10Y2/2 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂微混、白蛇微混)
- 3 Hse.2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂(粒り無、しまり有、明黄褐色細砂少混)
- 4 Hse.2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混)
- 5 Hse.2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂(粒り無、しまり有、洗黄色細砂多混)
- 6 Hse.2.5Y7/4 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 7 Hse.2.5Y7/3 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD16-bc 間断面図 (S=1/40)



SD16-bc 間

- 1 Hse.01Y2/1 黑色砂質シルト(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 2 Hse.01Y2/2 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂多混)
- 3 Hse.2.5Y7/3 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、オリーブ褐色細砂多混)
- 4 Hse.2.5Y7/4 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、明黄褐色細砂少混)
- 5 Hse.2.5Y7/4 オリーブ褐色細砂(粒り無、しまり有、明黄褐色細砂少混)
- 6 Hse.2.5Y7/4 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、ラミナ状に黑褐色細砂微混、酸化鉄少混)
- 7 Hse.2.5Y7/4 洗黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)



第22図 3区 SD 18周辺断面実測図1 (S=1/40・60)

P29 北西—南東ベルト断面図 (S=1/40)



P29 南西—北東ベルト断面図 (S=1/40)



P29

- 1 Rue10YR2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Rue2.5Y7/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y7/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂多混)
- 4 Rue2.5Y7/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SD18-cd 間断面図 (S=1/40)



SD18-cd 間

- 1 Rue2.5Y3/2 暗オリーブ色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Rue2.5Y6/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y6/3 暗オリーブ色細砂(1層より明るい土色、粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 4 Rue2.5Y6/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ色細砂多混)
- 5 Rue2.5Y6/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、地山)

P31 北西—南東ベルト断面図 (S=1/40)



P31 南西—北東ベルト断面図 (S=1/40)



P31

- 1 Rue2.5Y3/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Rue2.5Y6/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 4 Rue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

P32 東西ベルト断面図 (S=1/40)



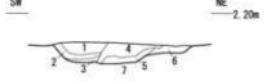
P32 南北ベルト断面図 (S=1/40)



P32

- 1 Rue10YR2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Rue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SD18-ab 間断面図 (S=1/40)



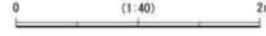
SD18-bc 間断面図 (S=1/40)



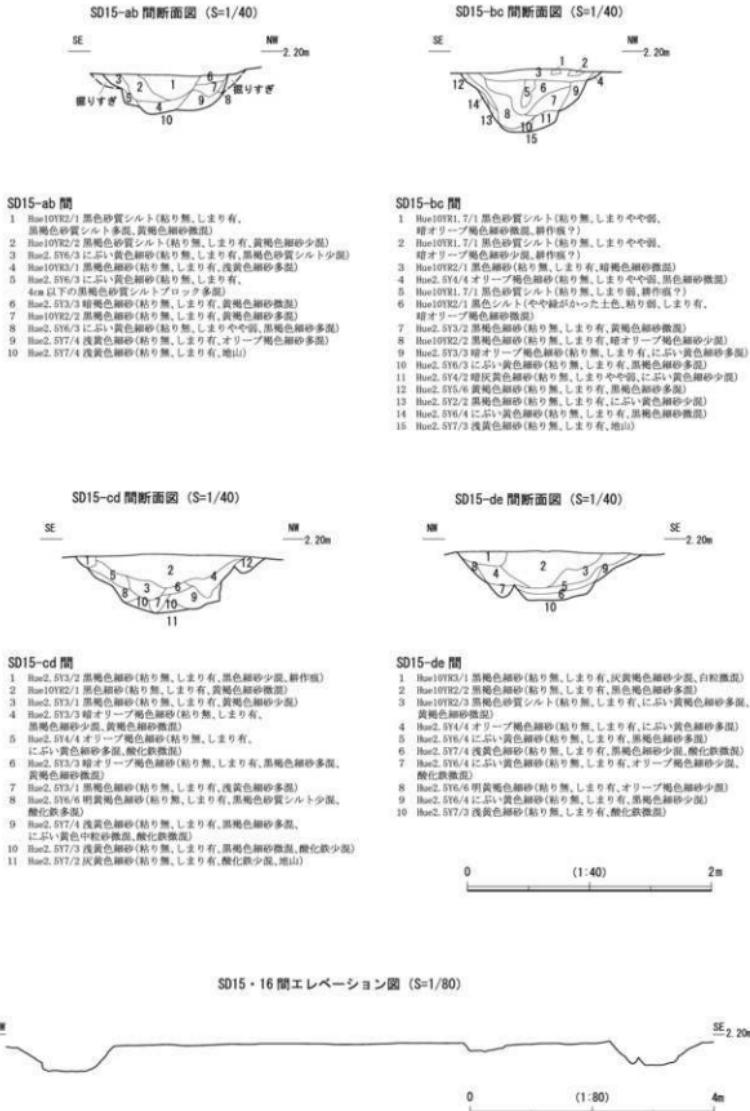
SD18-ab 間

- 1 Rue10YR2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂・中粒砂少混)
- 2 Rue2.5Y7/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y7/4 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂微混、酸化鉄微混)
- 4 Rue2.5Y3/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 5 Rue2.5Y7/4 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 6 Rue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 7 Rue2.5Y7/4 深黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄多混、地山)

- 1 Rue2.5Y3/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ色細砂、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Rue10YR2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、浅黄色細砂少混)
- 3 Rue2.5Y3/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 4 Rue2.5Y3/3 暗オリーブ色細砂(粘り無、しまり有、浅黄色細砂少混)
- 5 Rue2.5Y7/4 深黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄多混、地山)
- 6 Rue2.5Y7/4 深黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄多混、地山)

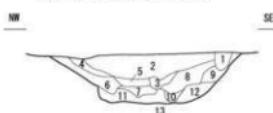


第23図 3区 SD 18周辺断面実測図2 (S=1/40)



第24図 3区 SD 断面実測図1 (S=1/40・1/80)

SD16-ab 開断面図 (S=1/40)



SD16-ab 開断面図 (S=1/40)

- 1 Hse10Y3/1 黒褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂少混、白粒微混、耕作痕?)
- 2 Hse10Y3/1 黒褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂微混、白粒微混)
- 3 Hse2. 5Y3/3 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂少混)
- 4 Hse2. 5Y3/4 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂少混)
- 5 Hse2. 5Y3/5 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、浅黄色細砂少混)
- 6 Hse2. 5Y4/5 オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、浅黄色細砂少混)
- 7 Hse2. 5Y4/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂少混)
- 8 Hse2. 5Y4/3 オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、浅黄色細砂多混)
- 9 Hse2. 5Y7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有し、オーリープ褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 10 Hse2. 5Y6/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂微混、酸化鉄多混)
- 11 Hse2. 5Y7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂微混、酸化鉄多混)
- 12 Hse2. 5Y7/4 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有し、明黄色細砂少混、酸化鉄少混)
- 13 Hse2. 5Y7/3 浅黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂少混、地山)

SD17-ab 開断面図 (S=1/40)



SD17-ab 開断面図 (S=1/40)

- 1 Hse2. 5Y3/3 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂多混)
- 2 Hse10Y4/3 にぶい 黑褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂多混)
- 3 Hse2. 5Y5/4 黃褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂多混)
- 4 Hse10Y5/2 黒褐色細砂質シルト(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂少混)
- 5 Hse2. 5Y6/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂シルト少混)
- 6 Hse2. 5Y6/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂微混)
- 7 Hse2. 5Y7/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂微混)
- 8 Hse2. 5Y7/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂質シルト微混)
- 9 Hse2. 5Y8/6 明黄色細砂(粘り無し、しまり有し、地山)

P35 断面図 (S=1/40)



P36 断面図 (S=1/40)



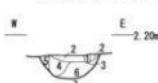
P35

- 1 Hse2. 5Y3/3 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂少混)
- 2 Hse2. 5Y4/4 オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、増オーリープ褐色細砂少混)
- 3 Hse2. 5Y5/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、増オーリープ褐色細砂微混)
- 4 Hse2. 5Y5/6 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、地山)

P36

- 1 Hse2. 5Y4/3 オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、黒褐色細砂微混)
- 2 Hse2. 5Y4/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、オーリープ褐色細砂微混)
- 3 Hse2. 5Y5/4 にぶい 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、オーリープ褐色細砂少混)
- 4 Hse2. 5Y6/6 にぶい 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、地山)

P37 断面図 (S=1/40)



P37

- 1 Hse2. 5Y5/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂少混、黒褐色細砂微混、木根植)
- 2 Hse2. 5Y4/3 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂微混)
- 3 Hse2. 5Y4/4 オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂多混)
- 4 Hse2. 5Y4/5 増オーリープ褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂少混)
- 5 Hse2. 5Y5/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、オーリープ褐色細砂少混)
- 6 Hse2. 5Y5/4 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、にぶい黄色細砂多混)
- 7 Hse2. 5Y6/4 にぶい 黄褐色細砂(粘り無し、しまり有し、地山)

0 (1:40) 2m

第25図 3区 SD・Pit 断面実測図2 (S=1/40)



0 (1:150) 10m

第26図 4区断面実測箇所図 ($S=1/150$)

溝 SD 22 は、3区 SD 18 とセットの遺構になる可能性がある。調査区中央からやや南寄りには南東-北西方向に延びる溝 SD 21 を確認した。この溝を境に北側の5・6区にかけて畠溝群を検出した。また、畠溝より新しい近世以降の溝 SD 23 を検出した。

SK 15 短径 110cm、長径 82cm の楕円形を呈し、深さは 8~26cm を測る。底面には短辺に平行する細溝状の落ち込みが複数見られる。

SK 16 短径 66cm、長径 100cm の楕円形を呈し、深さは 11cm を測る。

SD 21 幅 62~96cm、深さ 11~21cm を測る。北西-南東方向の延長 11.7m を検出した。南東部では SX 03 を切り込み、北西部では攪乱を受けている。

SD 22 幅 38~50cm、深さ 8~28cm を測り、延長 4.7m を検出した。

SD 23 幅 82~140cm、深さ 21~53cm を測り、延長 10m を検出した。SD 25・36~39・43・44 を切り込む。bc 間土層断面図 3・4 層は 5~12 層堆積後の崩落土とみられることから、下半が埋没した後、再度溝として利用されたか、一定期間開渠していたか何れかであろう。初段階の溝では、9 層に砂の互層堆積がみられるため一時的に流水があったかもしれない。出土遺物から、下層は 16 世紀以降、上層は 18 世紀以降の埋没とみられる。

遺物は第 48 図 37~43 を図示した。43 が下層から出土した以外は全て上層出土である。37 は越前焼壺片を転用した円盤状陶製品である。39 は肥前系磁器の染付け碗、40 は同じく肥前系陶器の皿である。41 は薄手の瓦質土器片である。傾きはもう少し起きる。金属模倣の火鉢類である。39~41 は 18 世紀以降の製品であり、埋没過程で混入した遺物であろう。42 は炉壁で、強く被熱している。43 は瀬戸・美濃焼丸皿とみられる底部で、内面に印花文が施される。16 世紀前半の製品である。他に肥前系陶器皿・すり鉢口縁が出土した。

SD 24 幅 36~54cm、深さ 5~9cm を測り、延長 4.5m を確認した。北西-南東方向に走る。南東部を攪乱に切られている。北東側の SD 25 とはば並行し、規模も類似することから関連遺構かもしれない。その場合、本遺構北西部の浅い段は別遺構となる可能性もある。

遺物は第 48 図 44 の須恵器壺片を図示した。

SD 25 幅 32~50cm、深さ 4~8cm を測り、延長 3.3m を確認した。北西-南東方向に走る。北西部を SD 23 に切られる。

SD 26 調査区北東端で検出した矩形の溝である。幅 40~46cm、深さ 8~10cm を測る。SD 36 を切り込んでいる。

SD 27 幅 24~40cm、深さ 15~25cm を測る北西-南東方向の溝で、延長 6.7m を確認した。北西部は SD 23 に切られているとみられる。

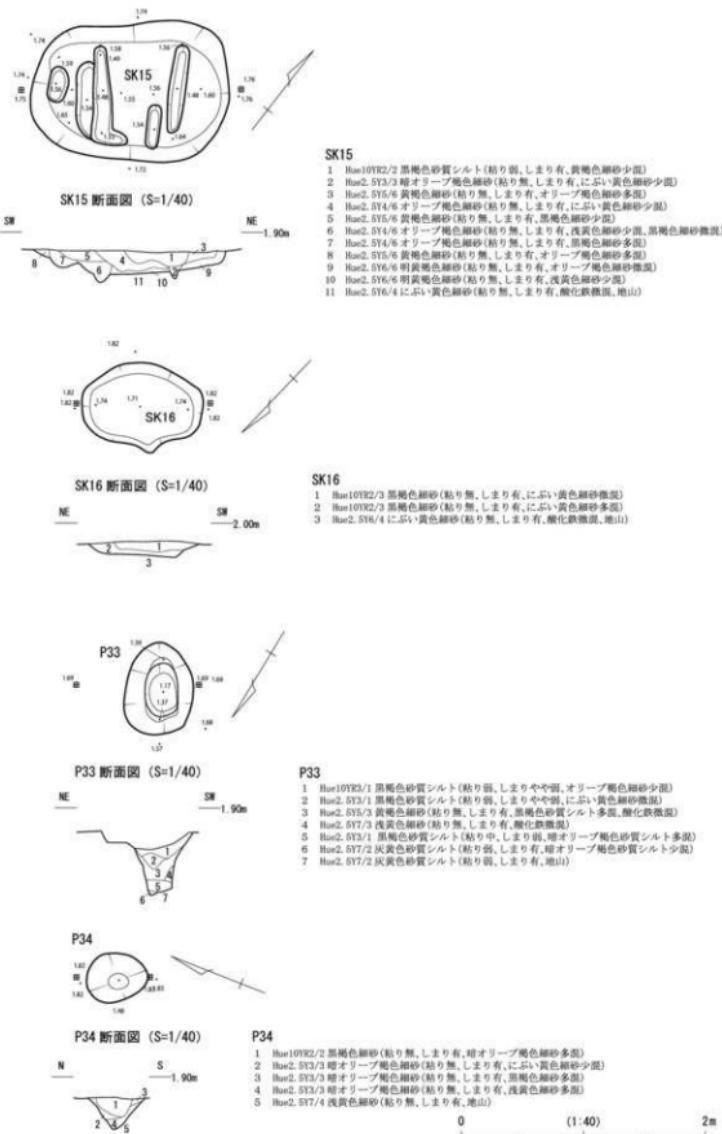
SD 28 幅 60~78cm、深さ 6~13cm を測る北西-南東方向の溝で、延長 6.4m を確認した。SD 29 を切り込み、北東-南西方向の SD 40・43・44 に切られる。

SD 29 幅 40cm、深さ 3~5cm、長さ 2.4m を測る。SD 28・43 に切られている。

SD 30 幅 28~50cm、深さ 5~8cm を測り、延長 5.5m を検出した。北西-南東方向の溝である。SD 43・44 に切られている。

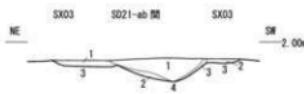
SD 31 幅 30~48cm、深さ 5~8cm を測り、延長 2.2m を検出した。北西-南東方向の溝である。SD 43・44 に切られている。SD 30 と約 1.2m の距離を持って並行し、規模も類似していることから関連する遺構と推定する。

SD 32 幅 36~50cm、深さ 4~10cm を測り、延長 2.2m を検出した。北東-南西方向の溝であるが、南西部は西側にやや方向を変える。



第27図 4区 SK・Pit 断面実測図 (S=1/40)

SD21-ab 間・SX03 断面図 (S=1/40)



SD21-bc 間・SX02 断面図 (S=1/40)



SD21-ab 間

- 1 Rue10YR2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 2 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂微混)
- 4 Rue2, SY6/4 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SX03

- 1 Rue10YR3/1 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂多混)
- 2 Rue2, SY6/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 3 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

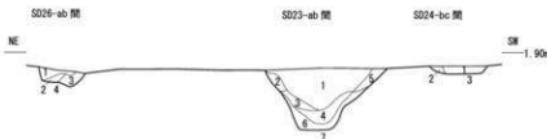
SD22-ab 間断面図 (S=1/40)



SD22-ab 間

- 1 Rue2, SY3/6 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 2 Rue10YR3/3 暗褐色細砂(粘り無、しまり有、8cm以下の黒褐色砂質シルトブロック少混)
- 3 Rue2, SY7/4 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SD26-ab・SD23-ab・SD24-bc 間断面図 (S=1/40)



SD26-ab 間

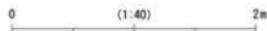
- 1 Rue2, SY3/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂多混)
- 2 Rue2, SY4/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色砂質シルト少混)
- 3 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 4 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、地山)

SD23-ab 間

- 1 Rue2, SY3/3 暗オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黒褐色シルト少混、酸化鉄微混、炭粒微混)
- 2 Rue10YR3/3 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂多混、酸化鉄少混)
- 3 Rue2, SY4/3 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色砂質シルト少混、黄色細砂少混、酸化鉄少混)
- 4 Rue2, SY3/3 暗オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 5 Rue2, SY3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(粘り無、しまり有、黄褐色細砂多混、酸化鉄少混)
- 6 Rue2, SY4/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色砂質シルト多混、酸化鉄少混)
- 7 Rue2, SY6/3 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD24-bc 間

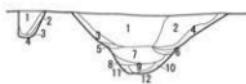
- 1 Rue2, SY4/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂多混)
- 2 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂少混)
- 3 Rue2, SY6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)



第28図 4区 SD 断面実測図1 (S=1/40)

SD27-ab・SD23-bc 間断面図 (S=1/40)

SD27-ab 間 SD23-bc 間
SW NE
— 1.90m —



SD27-ab 間

- 1 Hue10Y2/2 黒褐色砂質シルト(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 2 Hue10Y2/2 黒褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 4 Hue2.5Y6/3 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、無)

SD23-bc 間

- 1 Hue2.5Y6/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂微混)
- 2 Hue2.5Y7/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、無、黃褐色細砂微混)
- 3 Hue10Y2/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色細砂少混、酸化鉄微混)
- 4 Hue2.5Y6/3 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂少混、無)
- 5 Hue2.5Y6/4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細質シルト少混)
- 6 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混)
- 7 Hue10Y2/2 黒褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 8 Hue2.5Y3/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、無、黃褐色細砂少混)
- 9 Hue2.5Y7/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 10 Hue2.5Y7/3 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂微混、酸化鉄微混)
- 11 Hue2.5Y7/2 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、無、黃褐色細砂少混)
- 12 Hue2.5Y7/2 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD25・SD24 各-ab 間断面図 (S=1/40)

SD25 SD24
NE SW
— 2.00m —



SD25-ab 間

- 1 Hue2.5Y6/5 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂多混、酸化鉄少混)
- 2 Hue2.5Y6/5 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y6/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、無)

SD24-ab 間

- 1 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混)
- 2 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD44-bc 間・SD43-bc 間断面図 (S=1/40)

SD44-bc 間 SD43-bc 間
NW SE
— 1.90m —



SD44-bc 間

- 1 Hue10Y2/1 黒褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂混)
- 2 Hue2.5Y5/1 黑褐色砂質シルト(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y6/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、無)
- 4 Hue2.5T7/4 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD43-bc 間

- 1 Hue10Y2/1 黃褐色沙質シルト(粘り弱、しまり有、淡黄色細砂混)
- 2 Hue2.5T7/1 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂多混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5T7/1 淡黃褐色細砂(粘り無、しまり有、無)
- 4 Hue2.5T7/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、暗黃褐色細砂少混)
- 5 Hue2.5T8/4 にぶい 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 6 Hue2.5T8/5 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 7 Hue2.5T7/4 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD28-bc 間・SD27-bc 間・SD23 断面図 (S=1/40)

SD28-bc 間 SD27-bc 間 SD23
SW NE
— 1.80m —



SD28-bc 間

- 1 Hue10Y2/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 2 Hue10Y2/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5T7/3 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 4 Hue2.5T7/2 黑褐色細砂(粘り無、しまり有、暗黃褐色細砂少混)
- 5 Hue2.5T8/4 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 6 Hue2.5T7/4 淡黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD27-bc 間

- 1 Hue10Y2/3 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、暗オリーブ褐色砂質シルト微混)
- 2 Hue10Y2/3 噴出褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色細砂多混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 4 Hue2.5Y6/4 にぶい 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

0 (1:40) 2m

第29図 4区 SD 断面実測図2 (S=1/40)

SD34・SD31・SD30・SD33・SD28・SD27 断面図 (S=1/40)



SD34

- 1 Hue10Y3/1 黒褐色細砂(粒り無、しまり有、明黄色細砂少混)
- 2 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂微混)
- 3 Hue2.5Y7/4 淡黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD31

- 1 Hue2.5Y3/2 黒褐色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂多混)
- 2 Hue2.5Y6/6 明黄色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD30

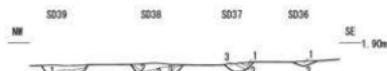
SD33

- 1 Hue2.5Y6/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 2 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD27

- 1 Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂多混、酸化鉄少混)
- 2 Hue2.5Y6/6 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD39・SD38・SD37・SD36 断面図 (S=1/40)



SD39

- 1 Hue2.5Y3/1 黒褐色細砂(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混、酸化鉄微混)
- 2 Hue2.5Y7/4 淡黄色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y7/4 淡黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD38

- 1 Hue10Y3/1 黒褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、黄褐色細砂微混)
- 2 Hue2.5Y6/6 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 4 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

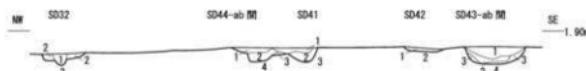
SD37

- 1 Hue10Y3/1 黒褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 2 Hue2.5Y6/6 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 3 Hue2.5Y6/6 明黄色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 4 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD36

- 1 Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、
母オーリーブ褐色細砂シルト混、酸化鉄微混)
- 2 Hue2.5Y6/6 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

SD32・SD44-ab間・SD41・SD42・SD43-ab間断面図 (S=1/40)



SD32

- 1 Hue10Y3/1 黒褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂多混、酸化鉄微混)
- 2 Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂(粒り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD44-ab間

- 1 Hue10Y3/1 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、黄褐色細砂少混)
- 2 Hue2.5Y3/2 暗オーリーブ褐色細砂(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y6/6 明黄色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂微混、酸化鉄微混)
- 4 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD41

- 1 Hue10Y2/1 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂多混)
- 2 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄微混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

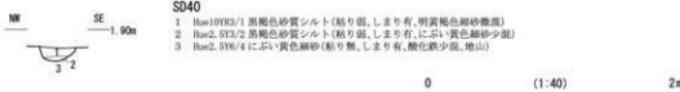
SD42

- 1 Hue10Y2/2 黑褐色細砂(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂多混)
- 2 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、地山)

SD43-ab間

- 1 Hue10Y2/1 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 2 Hue2.5Y3/2 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、酸化鉄微混)
- 4 Hue2.5Y7/4 淡黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄微混、地山)

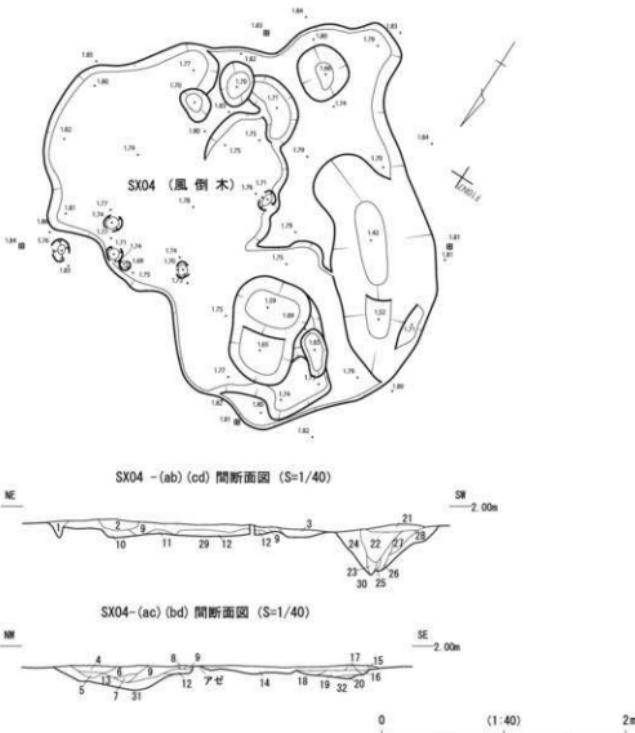
SD40 断面図 (S=1/40)



SD40

- 1 Hue10Y3/1 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、明黄色細砂微混)
- 2 Hue2.5Y3/2 黑褐色細砂シルト(粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混)
- 3 Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粒り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

第30図 4区 SD 断面実測図3 (S=1/40)



第31回 4区 SX 断面実測図 (S=1/40)

SD 33 幅22~28cm、深さ4cm、長さ1mを測る、北西-南東方向の小溝である。SD 41・44に切られる。

SD 34 幅25cm、深さ6cm、長さ0.5mを測る、北西-南東方向の小溝である。SD 44に切られる。

SD 35 幅54~94cm、深さ9~38cm、長さ3.6mを測る。部分的に深くなっている。SD 43・44に切られる。

SD 36~39 幅25~48cm、深さ5~14cm、長さ1.2~1.6mの並行する小溝群である。北東-南西方向の軸を持ち、SD 23・26に切られる。SD 38は、SD 43の北東側延長に位置することから同一の溝である可能性もある。

SD 40 幅36cm、深さ11cm、長さ0.6mを測る。SD 28より新しい。

SD 41 幅22~38cm、深さ4~7cm、長さ1.86mを測る。SD 33を切り込み、SD 28に切られている。

SD 42 幅28~54cm、深さ2~7cm、長さ1.8mを測る。SD 28に切られる。

SD 43 幅42~70cm、深さ11~16cmを測り、延長10mを検出した。SD 28~30を切り込み、SD 23・27に切られる。

SD 44 幅30~50cm、深さ6~18cmを測り、延長6.5mを検出した。SD 28・30・31を切り込み、SD 27に切られている。

SX 02~04 SX 02・03は共に浅い落ち込みで、SD 21に切られている。SX 04は不整形な落ち込みであり、風倒木痕と判断された。

その他 検出面から繩文土器片、表土から中国製青磁の線描き蓮弁文碗、肥前系磁器皿が出土した。

6. 5・6区（巻頭図版4、第32~44図、第4表、図版7・8・11）

5・6区は、4区とは市道を挟み、延長約64m、幅約11mの調査区であり、東側の畑への進入路を境に当初は平行四辺形状に5区を先行して延長約17m分を調査着手したが、のちに進入路の撤去が可能となり北側の約47m分を三角形状に6区として追加し、一体で調査を行った。幅約11mで道路遺構の両側側溝の可能性がある並行する溝 SD 45・68がある。図化できる出土遺物は無く、時期不明であるが、中世とみられる直交する畠溝群を切る。6区中央には近代以降の自然流路 NR 01があり、北東側には掘立柱建物状のSB 01が接しており、出土遺物から近代以降の建物基礎とみられる。

SK 17 短径64cm、長径86cm、深さ22cmを測る段掘りの不整形土坑である。

SK 18 短径86cm、長径140cm以上、深さ37cmの長円形土坑で、北東部は調査区外となる。

SK 19 短径52cm、長径100cm、深さ14cmの略三角形の土坑である。

SK 20 短径60cm、長径120cm以上、深さ26cmの長円形を呈す。SD 65・94を切り込み、P 49・53に切られている。

SK 21 短径112cm、長径136cm、深さ13~20cmの略円形土坑である。NR 01に切られ、畠溝を切り込んでいる。遺物は近代のガラス製の栓が出土した。

SD 45 幅60~96cm、深さ18~36cm、5・8区合わせて延長17.2mを検出した。主軸はN 35° Wの南東-北西方向に走る溝で、北西に向かって底面が低くなっている。直角方向に走る畠溝群を全て切り込んでいる。

同軸のSD 68とセットを成して道路側溝となる可能性もあり、側溝の芯々距離は約11.2m、路面幅は10.2mを測り、1区で検出した道路遺構とは、主軸方位でほぼ直交している。主軸を海側へ延長すると、小松市安宅町の安宅塗や古代北陸道安宅駅推定地付近へと至る。

SD 46 幅24~56cm、深さ4~25cm、長さ5.8mを測る。直交する全ての溝に切られている北西-南西

方向の溝である。

SD 47 幅32~50cm、深さ7~12cmを測り、延長5.3mを検出した。SD 53の延長上に当たることから同一溝の可能性がある。

SD 48 幅32~58cm、深さ6~19cm、長さ5.8mを測る。SD 46を切り込み、SD 45・97に切られる。SD 45を挟んで北東側にSD 52が伸びることから同一溝の可能性がある。同軸のSD 91と覆土が近似していることから、SD 69やSD 91など等間隔で並ぶ溝とセットの歎溝とみられる。

SD 49 幅40~80cm、深さ1~18cm、長さ18.9mを検出した。部分的に二段掘りになっており、内部の凹凸も多い。直交する溝をほぼ全て切り込んでいるが、SD 45にのみ切られている。

SD 50 幅36~54cm、深さ4~15cm、長さ10.2mを測る。歎溝群UM 02を切り込み、SD 45・49・68に南側及び両端を切られている。

SD 51 幅34~48cm、深さ5~17cm、延長6.8mを検出した。SD 74・71を切り込み、SD 45に切られている。

SD 52 幅34~44cm、深さ4~14cmを測り、延長8mを検出した。

SD 53 幅30~60cm、深さ3cm、長さ2.9mの溝で、SD 54を切り込み、SD 71に切られる。

SD 54 幅20~42cm、深さ3、4cm、長さ5.3mの北西~南東の溝で、直交する全ての溝に切られている。

SD 55 幅30~40cm、深さ3cm、長さ1.3mの小溝である。SD 71に切られている。

SD 56 幅34~50cm、深さ10~18cmを測り、延長3.3mを検出した。SD 71を切り込んでいる。

SD 57 幅25~32cm、深さ5~10cm、長さ2.7mを測る北西~南東の溝で、北東~南北方向の溝に切られている。

遺物は第48図45・46を図示した。45は中世土師器皿小片、46は椀型滓である。45は15世紀前後の製品であろう。

SD 58 幅34~60cm、深さ5~16cmを測り、延長8.1mを検出した。SD 83・84、歎溝を切り込み、SD 46に切られている。

SD 59 幅30~40cm、深さ8~13cmを測り、延長4.2mを検出した。

SD 62 幅36~60cm、深さ15~17cmを測り、延長6mを検出した。自然河道に切られている。陶製片口縁部が出土した。

SD 65 幅32~48cm、深さ10~13cm、長さ6.2mを測る。両端を直交する溝に切られている。14世紀以降の中世土師器皿が出土した。

SD 68 幅66~85cm、深さ18~27cmを測る。6・7区合わせて南東~北西方向に延長19mを確認した。直交する溝を切り込んでいる。主軸はN 35° Wで、SD 45とセットで道路遺構になる可能性があり、両溝の芯々距離は約11.2m、路面幅は10.2mを測る。

SD 70 幅36~48cm、深さ10cm、長さ1.2mの小溝で、歎溝群UM 01を前後する時期に掘削されている。

SD 71 幅26~44cm、深さ10~27cmを測り、延長6.0mを検出した。SD 53・55を切り込む以外は直交する溝に切られている。

SD 74 幅34~76cm、深さ8~20cm、長さ10.1mを測る。SD 71及び歎溝群UM 02を切り込み、SD 45・68に切られる。

SD 86 幅36~44cm、深さ8~16cm、長さ6.5mを測る。SD 68・74に両端を切られている。

SD 87 幅26~30cm、深さ4~9cm、長さ約4mを測るやや湾曲した溝である。SD 79・80を切り込み、SD 68に切られる。



第32図 5・6・7・8区断面実測箇所図1 (S=1/150)



第33図 6区断面実測箇所図2 (S=1/150)

SD 88 幅36~40cm、深さ10cm、長さ3.7mを測る。SD 79・80を切り込み、SD 68に切られる。

SD 91 幅30~44cm、深さ7~13cm、長さ10.5mを測る。北東部はカクランを挟んで延長にSD 56が伸びることから同一溝の可能性がある。

SD 93 幅40~50cm、深さ17~20cmを測り、延長4mを測る。南西部を直交する溝に切られている。

SD 95 幅40~70cm、深さ7~15cmを測る。コの字状を呈しているが、北西部が調査区外となるため全形は不明である。SD 60を切り込み、P 41に切られる。

SD 96 幅36~45cm、深さ10cm前後、長さ3.5mを検出した。北東部でSD 97と連結して矩形を呈す。

SD 97 幅32~50cm、深さ5~23cmを測り、延長6.4mを検出した。南東でSD 96と連結する。SD 47・48・69を切り込み、SD 49が切られる北西-南西方向の溝である。

畠溝群 UMO 01 5区南西部で検出した北西-南東方向の細溝群である。幅40cm前後を中心とし、深さは最大でも10cm程度である。長さは調査区内に全て収まっているもので5.6m、畠間は20~45cmを測る。UMO 01-7がSD 58に、UMO 01-11がSD 70に切られる。

畠溝群 UMO 02 5、6区境で検出した。北西-南東の溝2条である。

畠溝群 UMO 03 6区南西部で検出した北東-南西方向の溝である。幅18~42cm、深さ2~8cmを測る。長さは短いもので1m、長いもので6m、畠間は10~80を測る。

自然河道 NR 01 幅5~6m、深さ約70cmを測る北西-南東方向の流路である。中央付近には横木と杭で導水施設を設営していた。

遺物は第49図61~63を図示した。61は口銚の磁器皿で、近代以降の製品である。62・63は木製品で、62は板状であることから容器の一部であろう。63は自然木の先端部を加工した杭である。他に国産磁器蓋が出土した。

その他 表土から第48図47の土器火鉢が出土した。64~66は粗割り材の先端を加工した杭である。他に表土から肥前系磁器碗が出土した。

柱列（ピット群） 6区 NR 01北側に整然と並ぶピット群であり、P 41~58の18基を検出した。一辺74~110cmを囲む方形で、100cm前後を主体とする。深さは21~45cmを測り、底面は概ね平坦である。土層断面の観察から、幅50~64cm程度の構造物が埋設されていた痕跡が見えることから建物等の基礎と判断され、3×5間以上の建物とみられる。当初は古代の総柱建物を想定して掘削を行ったが、出土遺物から近代以降の遺構である。

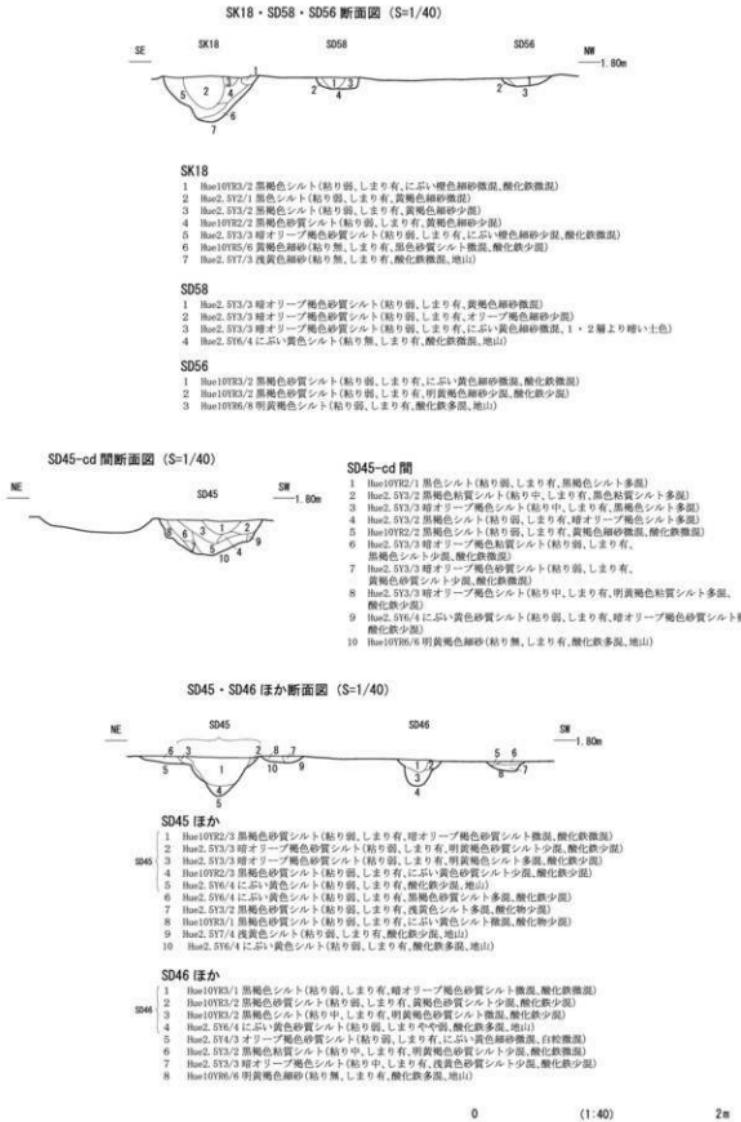
遺物は第48・49図48~60が出土した。48・54は炉壁、49は刷毛目文様の肥前系陶器碗、50は国産磁器碗、52は国産磁器染付皿、51は徳利口縁部、53・59は肥前系磁器の青磁瓶類口縁部と紅皿、55は中国製の青磁端反り皿、60は瀬戸・美濃産の磁器蓋で、赤絵により加飾される。58は棒状の木製品である。56は端部を鋭角に形成して刃部を作り出し、刃部が弧を描くことから環状石斧の可能性がある。57は台石又は敲石の断片であろう。49・50・52・53は18世紀代、51・59・60は19世紀以降の製品である。55~57は混入遺物である。他に中世土師器皿、瀬戸・美濃産磁器色絵碗、土瓶または行平鍋、肥前系陶器、銅線袖碗、外底部に墨書きされた白磁皿、磁器製飛行機玩具、磁器製ボタンなどが出土した。

7. 7区（第32・34~41図、図版8）

6区 SD 68・79・80の続きをみられる溝を検出した。図化できる遺物は出土していない。

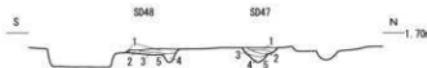
8. 8区（第32・45図、図版8）

5区 SD 45やSD 58・UM 01の続きをみられる畠溝を検出した。図化できる遺物は出土していない。



第34図 5・6・7区 SD 断面実測図1 (S=1/40)

SD48・SD47 断面図 (S=1/40)



SD48

- Hue2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色中粒砂少混、酸化鉄微混)
- Hue2.5Y6/3 にぶい黄色中粒砂(粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂微混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/4 にぶい黄色中粒砂(粘り無、しまり有、黒褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/3 にぶい黄色中粒砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色砂質シルト少混、酸化鉄微混)
- Hue2.5Y7/3 浅褐色細砂(粘り無、しまり有、明褐色砂質シルト多混、酸化鉄微混)

SD47

- Hue2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y4/4 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色砂質シルト多混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y5/4 黃褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、浅黄色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y7/3 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、明褐色砂質シルト多混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y7/3 浅黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

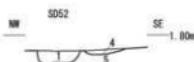
SD49 ほか断面図 (S=1/40)



SD49 ほか

- Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
- Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまりやや弱、黄褐色細砂微混、酸化鉄微混)
- Hue2.5Y5/3 黑褐色細砂(粘り弱、しまり有、明褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y5/5 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、明褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y5/6 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、明褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/2 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/3 黑褐色細砂(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/3 明褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、暗褐色細砂少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト微混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/4 にぶい黄色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/5 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/5 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/6 にぶい黄色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/7 にぶい黄色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/8 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/8 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/8 黄褐色細砂(粘り弱、しまり有、暗褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)

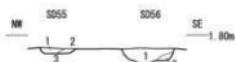
SD52 ほか断面図 (S=1/40)



SD52 ほか

- Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y6/6 明褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、暗オリーブ褐色シルト少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/8 明褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、暗褐色砂細少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/8 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗褐色細砂多混、酸化鉄多混、地山)
- Hue2.5Y6/6 明黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗褐色細砂多混、酸化鉄多混、地山)

SD55・SD56 断面図 (S=1/40)



SD55

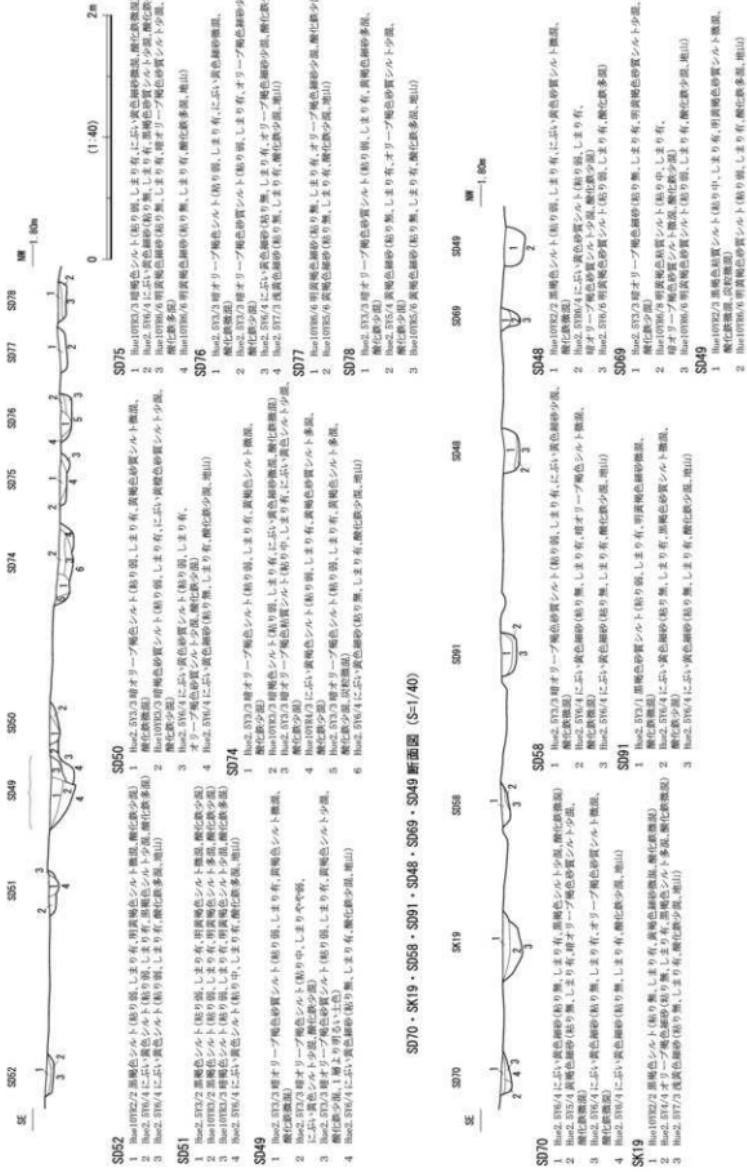
- Hue2.5Y3/2 黑褐色細砂(粘り弱、しまり有、明黄褐色細砂少混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黑褐色細砂微混、酸化鉄多混)
- Hue2.5Y6/6 明黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)

SD56

- Hue2.5Y3/2 黑褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色細砂質シルト多混、酸化鉄少混)
- Hue2.5Y7/6 明黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)

0 (1:40) 2m

第35図 5・6・7区 SD 断面実測図2 (S=1/40)



第36図 5・6・7区SD断面実測図3 (S=1/40)

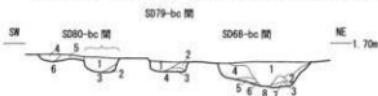
SD46 ほか断面図 (S=1/40)



SD46 ほか

- 1 Hse2.10Y6.8 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黒褐色砂質シルト多混、酸化鉄多混)
- 2 Hse2.10Y6.8 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黒褐色砂質シルト少混、地山)
- 3 Hse2.10Y2.3 黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄色砂質シルト微混、酸化鉄少混、白粒微混)
- 4 Hse2.5Y6.8 明黄色砂色シルト(粘り中、しまり有、暗オリーブ褐色シルト多混、酸化鉄多混)
- 5 Hse2.5Y6.8 明黄色砂質シルト(粘り強、しまり有、暗オリーブ褐色シルト少混、酸化鉄多混)
- 6 Hse2.5Y6.8 明黄色砂質シルト(粘り強、しまり有、酸化鉄多混、地山)
- 7 Hse2.5Y6.4 にぶい黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、暗オリーブ褐色少混、酸化鉄少混)
- 8 Hse2.5Y3.3 褐色細砂(粘り弱、しまり有、明黄色砂質シルト多混、酸化鉄多混、白粒微混)
- 9 Hse2.10Y6.8 明黄色砂色シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)
- 10 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、オリーブ褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混、10層より明い土色)
- 11 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)
- 12 Hse2.5Y6.4 にぶい黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)

SD80-bc 間・SD79-bc 間・SD68-bc 間 ほか断面図 (S=1/40)



SD80-bc 間ほか

- 1 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂微混、酸化鉄少混)
- 2 Hse10Y6.8 明黄色砂色シルト(粘り弱、しまり有、オリーブ褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
- 3 Hse10Y6.8 明黄色細砂(粘り弱、しまり有、酸化鉄多混、地山)
- 4 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、浅黄色砂質シルト多混、酸化鉄少混)
- 5 Hse2.5Y4.3 オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黄色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
- 6 Hse2.5Y7.4 浅黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD79-bc 間

- 1 Hse2.5Y3.3 增大オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明黄色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
- 2 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 3 Hse2.5Y5.6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、増大オリーブ褐色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
- 4 Hse2.5Y5.6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD68-bc 間

- 1 Hse2.5Y3.2 黄褐色細砂シルト(粘り弱、しまり有、黑色シルト微混、酸化鉄微混)
- 2 Hse10Y6.8 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 3 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黑褐色細砂シルト微混、酸化鉄微混)
- 4 Hse2.5Y3.3 増大オリーブ褐色シルト(粘り弱、しまり有、黑褐色細砂シルト少混、酸化鉄微混)
- 5 Hse2.5Y4.2 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 6 Hse2.5Y2.2 黑褐色シルト(粘り弱、しまり有、黑褐色細砂少混、酸化鉄少混)
- 7 Hse2.5Y5.6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、黑色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
- 8 Hse2.5Y5.6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD51・SD49・SD50 断面図 (S=1/40)



SD51

- 1 Hse10Y6.8/4 黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明黄色砂質シルト少混、酸化鉄微混)
- 2 Hse10Y6.8/3 黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明黄色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
- 3 Hse10Y6.6 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄褐色シルト少混、酸化鉄少混)
- 4 Hse10Y6.6/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、にぶい黄褐色シルト微混、酸化鉄多混)
- 5 Hse10Y6.6/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD49

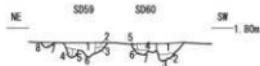
- 1 Hse10Y6.7/2 黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、にぶい黄褐色細砂微混、酸化鉄微混)
- 2 Hse10Y6.8/6 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
- 3 Hse2.5Y4.4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色シルト少混、酸化鉄少混)
- 4 Hse10Y6.7/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗褐色シルト少混、酸化鉄少混)
- 5 Hse10Y6.6/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

SD50

- 1 Hse10Y6.7/2 黄褐色砂質シルト(粘り弱、しまり有、明黄色細砂微混、酸化鉄微混)
- 2 Hse10Y6.8/6 明黄色砂質シルト(粘り弱、しまり有、黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
- 3 Hse2.5Y4.4 オリーブ褐色細砂(粘り無、しまり有、暗オリーブ褐色シルト多混、酸化鉄少混)
- 4 Hse10Y6.7/6 黄褐色細砂(粘り無、しまり有、暗褐色シルト少混、酸化鉄少混)
- 5 Hse10Y6.6/6 明黄色細砂(粘り無、しまり有、酸化鉄少混、地山)

第37図 5・6・7区 SD 断面実測図4 (S=1/40)

SD59・SD60 ほか断面図 (S=1/40)



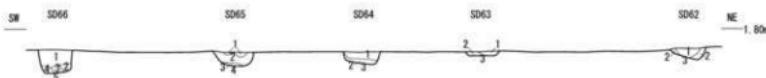
SD59 ほか

- 1 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 2 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 3 Hse2, BT3 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 4 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、にぶい黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 5 Hse2, BT6/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 6 Hse2, BT6/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、明黄褐色細砂少混、地山)
- 7 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 8 Hse2, BT6/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄微混、地山)

SD60 ほか

- 1 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂微混)
- 2 Hse2, BT3/3 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂質シルト少混)
- 3 Hse2, BT3/3 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 4 Hse2, BT3/3 黄褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 5 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄微混)
- 6 Hse2, BT3/4 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、にぶい黄色細砂少混、炭化鉄微混)
- 7 Hse2, BT6/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄微混、地山)

SD66・SD65・SD64・SD63・SD62 断面図 (S=1/40)



SD66

- 1 Hse10YR2/3 黑褐色細砂質シルト (粘り中、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄少混)
- 2 Hse10YR5/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、黒褐色細砂質シルト少混、炭化鉄多混)
- 3 Hse10YR3/2 黑褐色シルト (粘り中、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄多混)
- 4 Hse10YR6/6 明黄褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、黑褐色シルト微混、炭化鉄多混)
- 5 Hse10YR6/6 明黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄多混、地山)

SD65

- 1 Hse10YR2/3 黑褐色細砂質シルト (粘り中、しまり有、黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 2 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂質シルト (粘り弱)。しまり有、黄褐色細砂少混、炭化鉄少混)
- 3 Hse2, BT5/4 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、炭化鉄少混)
- 4 Hse2, BT5/4 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂少混、炭化鉄少混)
- 4 Hse10YR6/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄多混、地山)

SD64

- 1 Hse10YR3/2 黑褐色シルト (粘り中、しまり有、にぶい黄色細砂微混、炭化鉄微混)
- 2 Hse2, BT3/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 3 Hse2, BT5/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄少混、地山)

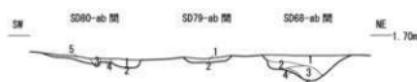
SD63

- 1 Hse10YR2/2 黑褐色シルト (粘り中、しまり有、にぶい黄色細砂微混、炭化鉄微混)
- 2 Hse2, BT3/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 3 Hse2, BT5/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄少混、地山)

SD62

- 1 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り弱、しまり有、にぶい黄色細砂微混)
- 2 Hse2, BT5/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、オリーブ褐色細砂微混)
- 3 Hse2, BT5/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、炭化鉄少混、地山)

SD80-ab 間・SD79-ab 間・SD68-ab 間断面図 (S=1/40)



SD80-ab 間

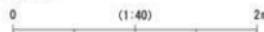
- 1 Hse2, BT3/3 棒褐色シルト (粘り弱、しまり有、淡黄色細砂質シルト少混、炭化鉄多混、炭酸鉄微混)
- 2 Hse2, BT6/6 明黄褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、炭化鉄少混、地山)
- 3 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色細砂 (粘り弱、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄多混)
- 4 Hse2, BT5/6 にぶい黄色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄多混)
- 5 Hse2, BT3/3 棒オリーブ褐色シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色細砂少混、炭化鉄多混、2cm以下の擾乱層、炭酸鉄微混)

SD79-ab 間

- 1 Hse2, BT5/5 4 黄褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、黒褐色シルト少混、炭化鉄少混)
- 2 Hse10YR6/6 明黄褐色細砂質シルト (粘り弱、しまり有、炭化鉄多混、地山)

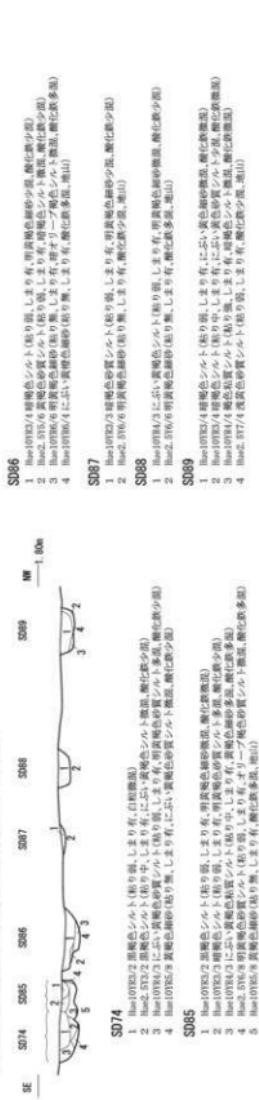
SD68-ab 間

- 1 Hse10YR3/2 黑褐色細砂質シルト (粘り中、しまり有、黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 2 Hse10YR3/2 黑褐色細砂質シルト (粘り中、しまり有、黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 3 Hse10YR3/3 淡褐色細砂質シルト (粘り中、しまり有、黄褐色細砂微混、炭化鉄微混)
- 4 Hse2, BT6/4 にぶい黄色細砂 (粘り無、しまり有、黒褐色シルト微混、炭化鉄少混、地山)
- 5 Hse2, BT5/6 黄褐色細砂 (粘り無、しまり有、黒褐色シルト微混、炭化鉄少混、地山)



第38図 5・6・7区 SD断面実測図5 (S=1/40)

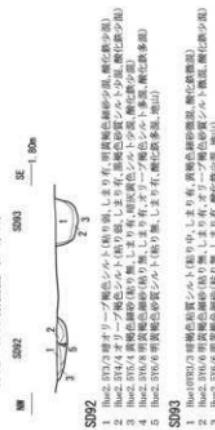
SD74・SD85・SD86・SD87・SD88・SD89 断面図 (S=1/40)



SD90・SD93 断面図 (S=1/40)



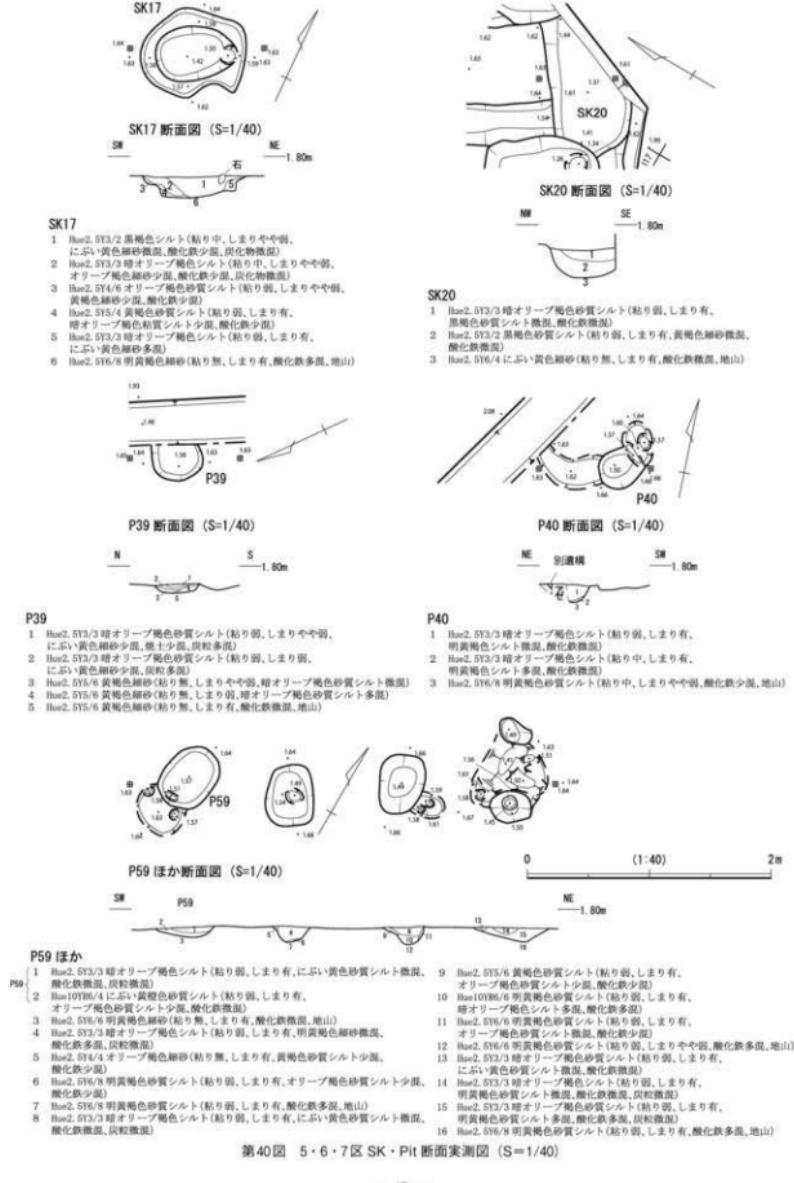
SD92・SD93 断面図 (S=1/40)

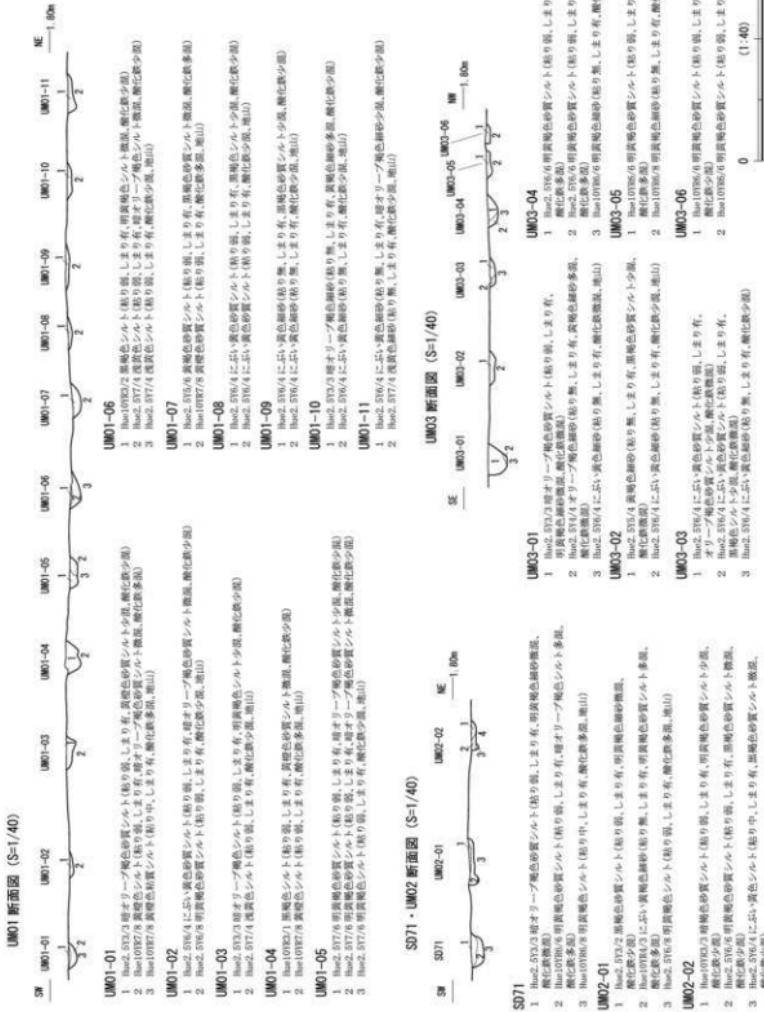


SD45・SD68 ほかエレベーション図 (S=1/40)

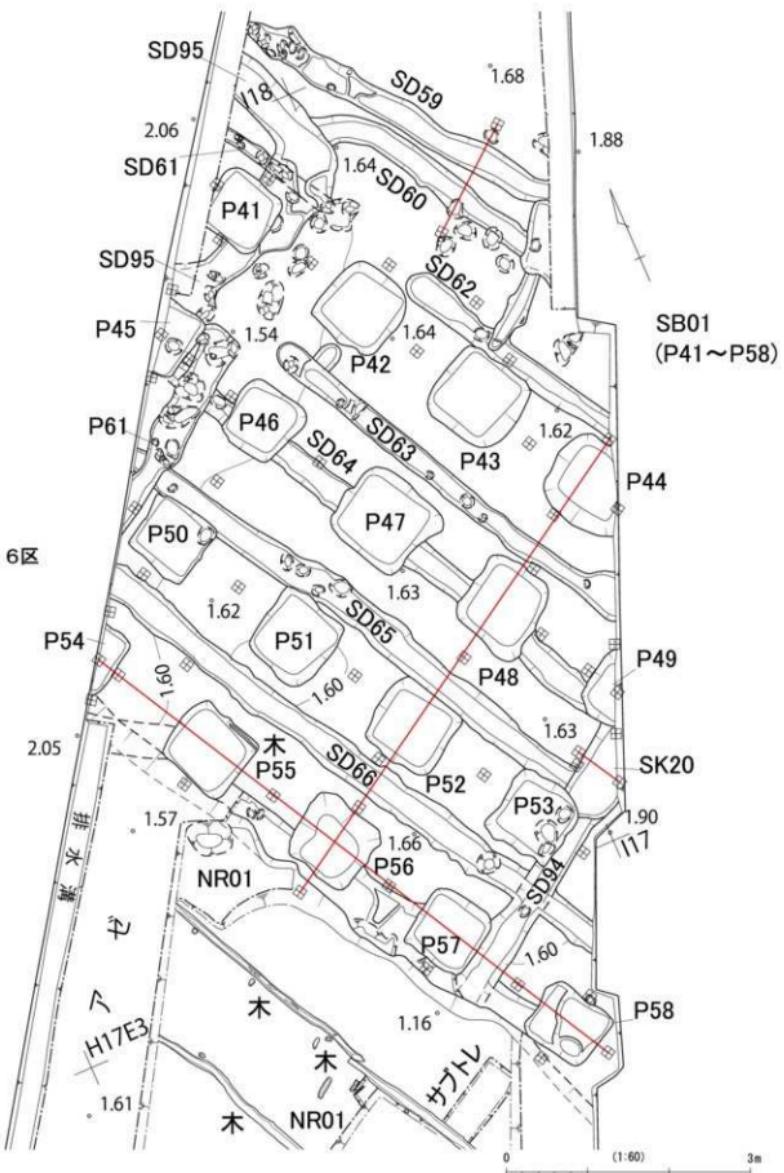


第39図 5・6・7区 SD断面実測図6 (S=1/40)



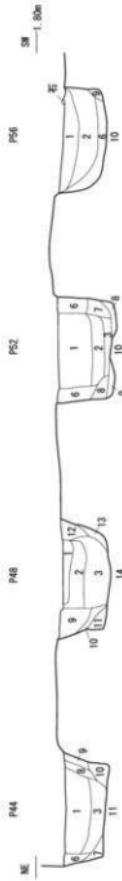


第41図 5・6・7区舗装断面実測図 (S=1/40)



第42図 6区 SB 01 実測箇所図 (S=1/60)

P44・P48・P52・P56 断面図 (S=1/40)



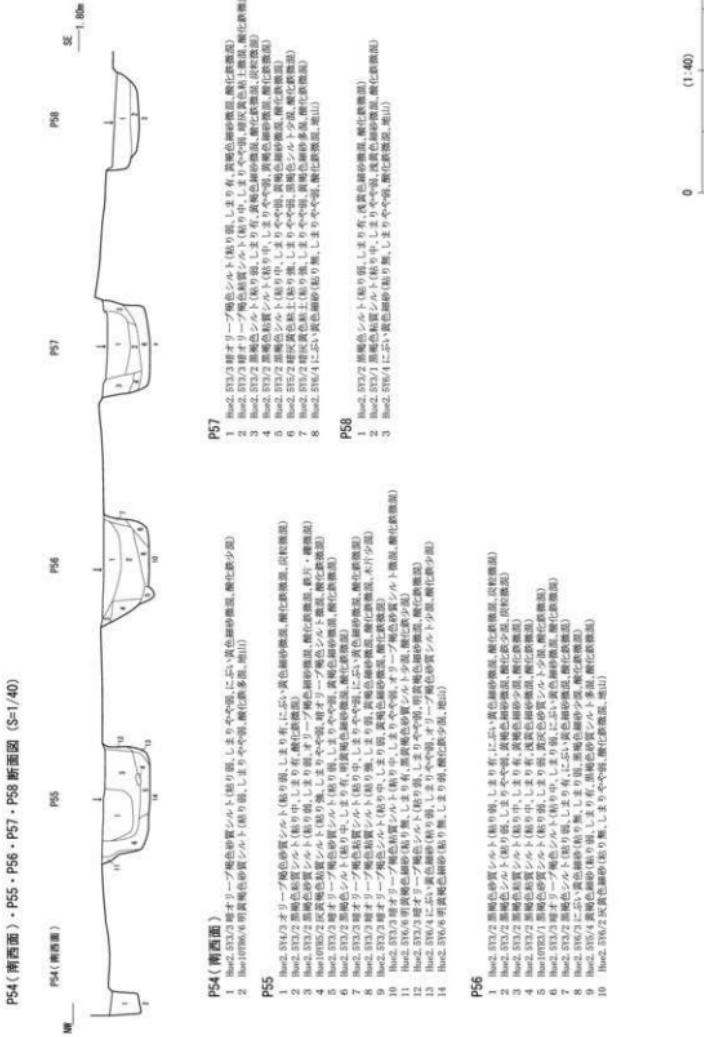
P44

P48

P52

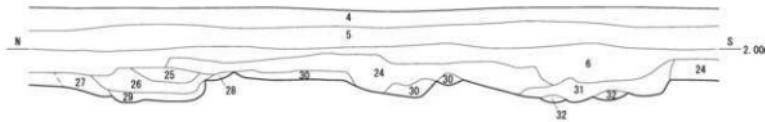
P56

第43図 6区 SB01断面実測図 (S=1/40)

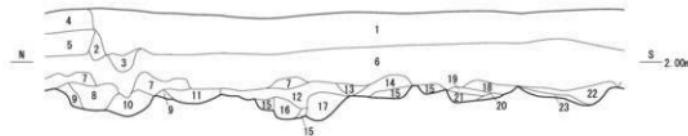


第44回 6区 SB01断面実測図2 (S=1/40)

8区調査区東壁a断面図 (S=1/40)



8区調査区東壁b断面図 (S=1/40)



8区調査区東壁a・b断面図

- 1 にぶい黒褐色細砂 盛土
2 黒灰褐色粘質土 1層混じる 混乱
3 にぶい黒褐色細砂 2層混じる 混乱
4 黒灰褐色粘質土 寄土
5 線褐色シルト
6 黒褐色シルト
7 線状褐色シルト 黑褐色シルト混じる
8 黒褐色シルト
9 明黄褐色シルト 黑褐色シルト混じる
10 黒褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（多）
11 黒褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
12 黒褐色シルト
13 黒褐色シルト 黑褐色シルト混じる
14 黒褐色シルト
15 明黄褐色シルト 黑褐色シルト混じる（少）
16 黒褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
- 17 黑灰色シルト
18 黑褐色シルト
19 黑褐色シルト
20 明黄褐色シルト 黑褐色シルト混じる（少）
21 明黄褐色シルト 黑褐色シルト混じる（多）
22 黑褐色シルト
23 明黄褐色シルト 黑褐色シルト混じる（多）
24 線状褐色シルト
25 線状褐色シルト 黑褐色シルト混じる
26 黑褐色シルト
27 黑褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
28 黑褐色シルト
29 黑褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
30 黑褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
31 黑褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）
32 黑褐色シルト 明黄褐色シルト混じる（少）

0 (1:40) 2m

第45図 B区調査区断面実測図 (S=1/40)

No.	市町名	遺跡名	道路(路面)幅	時期	
1	輪島市	中カワナミエダ道路	2m	古代以降	砂利敷きの小道（側溝無し）
2	七尾市	柴町道路	9m	9c 後半～10c 中頃	側溝を持つ古代の官道
3	七尾市	千野道路	9m? → 5.5m	古代以降	側溝を持つ宮道？
4	七尾市	吉府・国分道路	4m	古代～中世？	側溝を持つ道路
5	七尾市	大津ロクヘビ道路	3m	8c 後半～9c 後半	波板状造橋を持つ小道
6	宝達志水町	二口かみあれた道路	14m	8c 後半～9c 中頃	側溝を持つ古代の官道？
7	津幡町	加茂道路	7.5m → 5m	8c 前半～10c 中頃	側溝を持つ古代北陸道
8	金沢市	觀音寺道路	8m	7c 末～8c 前半	側溝を持つ古代北陸道
9	金沢市	木舟東道路	1～2m	8c 後半～9c	側溝を持つ小道
10	金沢市	八日市ヤスマル道路	①6.5m, ②5m, ③5m	古代	側溝を持つ古代の官道？
11	野々市市	三日市A道路	8～9.5m → 6.5m	8c 後半～9c 中頃	側溝を持つ古代北陸道
12	野々市市	三日市ヒガシンボ道路	①6m, ②3.6m	古代～中世？	側溝を持つ古代の官道？
13	野々市市	栗田道路	①4.6～5.2m, ②4.2m → 2.8m	8c 前半～9c 前半	側溝を持つ古代の道路
14	野々市市	三納アラミヤ道路	4m	古代	側溝を持つ道路
15	野々市市	上林新庄道路	2.5～3.8m	古代	側溝を持つ道路
16	野々市市	末松道路	2～3.2m	古代	側溝を持つ道路
17	野々市市・白山市	郷クボタ遺跡	1.5～2m	古代～中世？	側溝と波板状造橋を持つ道路
18	白山市	北安田キタウダ道路	0.8m	8c 初頭？	小道（側溝無し）
19	小松市	大槻道路	①8m ②10m ③7m	8c 後半～9c 前半 中世？ 中世	側溝を持つ古代北陸道？ 側溝を持つ中世の官道？ 側溝を持つ中世の官道？
20	小松市	八里向山A道路	1～3.5m	古代～中世？	波板状造橋を持つ小道
21	小松市	二ツ梨グミキバラ道路	1.5～2m	8c 後半～9c 後半	波板状造橋を持つ小道
22	小松市	鶴見町道路	1～2m	9～12c	波板状造橋を持つ小道
23	加賀市	庄・西島道路	6.5m	古代	側溝と波板状造橋を持つ古代の官道？

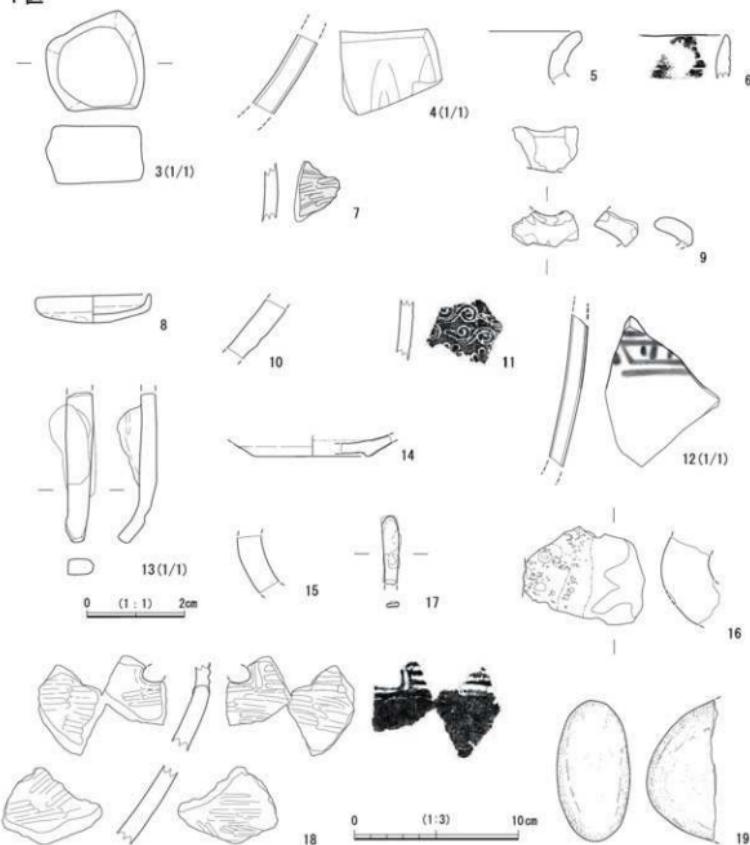
官道とみられる古代の道路（古代北陸道を含む）

第13表 能登・加賀における発掘された古代の道路遺構

0区

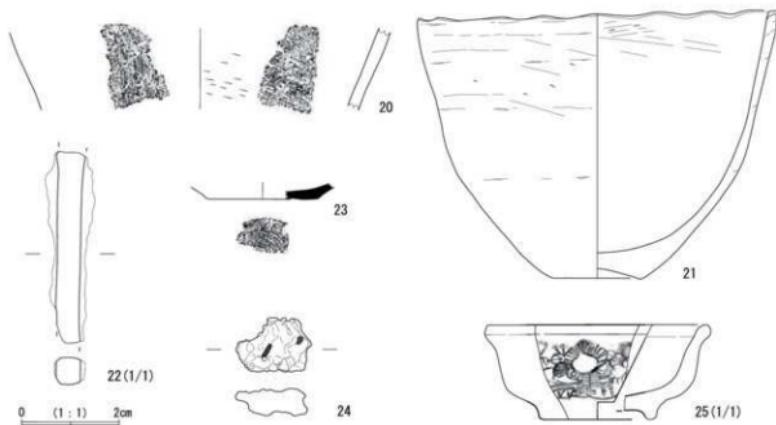


1区

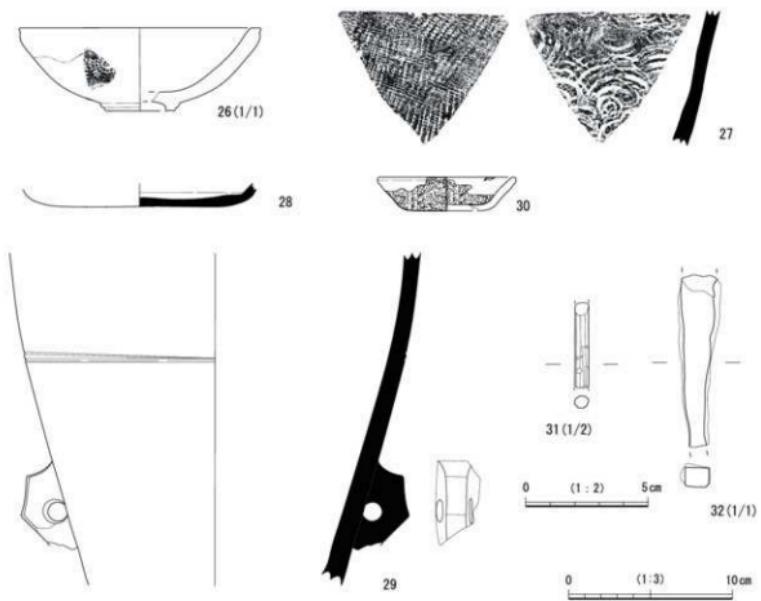


第46図 遺物実測図1 (S=1/1・1/3)

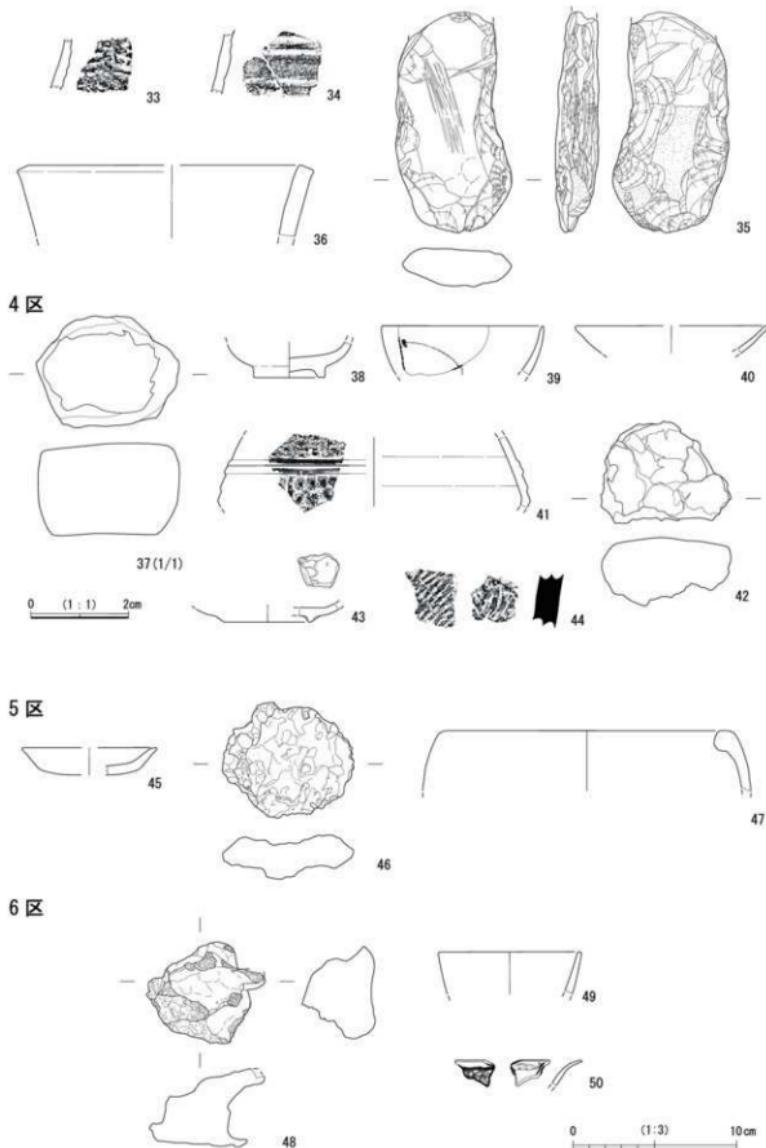
2区

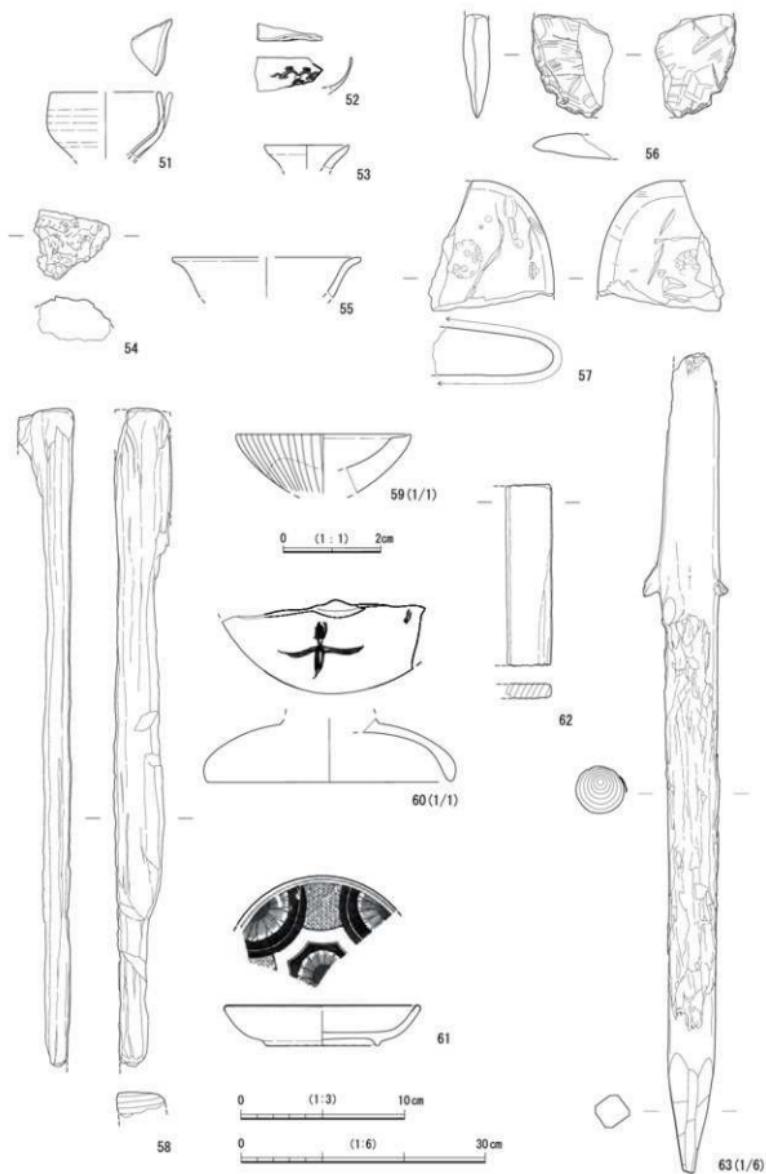


3区

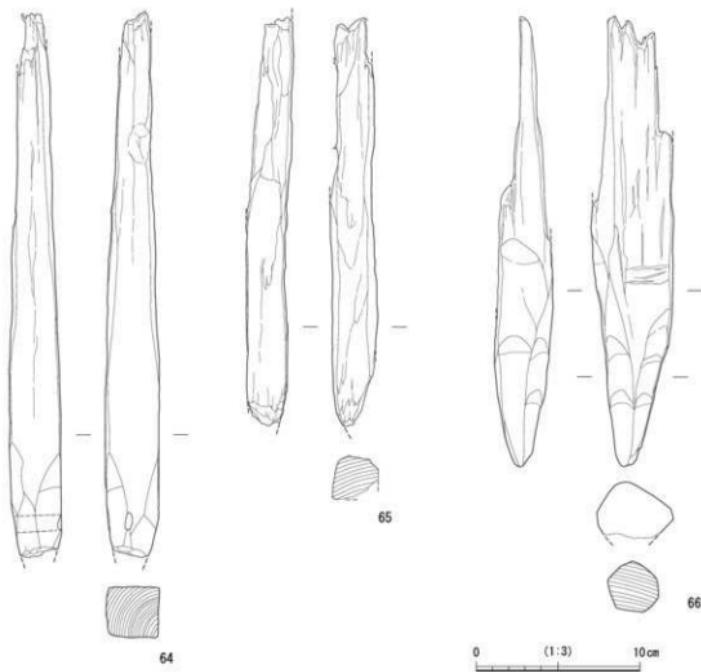


第47図 遺物実測図2 (S=1/1・1/2・1/3)

第48図 遺物実測図3 ($S=1/1 \cdot 1/3$)



第49図 遺物実測図4 ($S=1/3+1/6$)



第50図 遺物実測図5 (S=1/3)

報告書番号	実測番号	測量区	グリッド	遺構・位置	種別 構造		口径(cm)	直径(cm)	基高(cm)	色調(内) 色調(外)	地土	調整(内) 調整(外)		備考	残存率
					構造	構造						地質	地質		
1	0002	0区	A1	遺構柱出	寄生土器	深鉢	—	—	(4.3)	にぶい黄褐色	粗砂少・細砂少	良	条痕文	他の同一壁片に外因 変形、ススの擦痕あり、 発生時期?	—
2	0001	0区	A1	P28(ベース砂中)	寄生土器	壺	—	5.0	頭(4.4) 足(4.2)	灰褐色	粗砂少・細砂多	良	条痕文後部分 ケズリ跡ミガタ、 条痕ナメ	発生前期Ⅰ?	壺4/12
3	0005	1区	B2	SD01-a(上層)	瓦器	瓦質陶製品 (エンコ)	最大長 2.05	最大幅 2.0	最大厚 1.2	にぶい黄褐色	粘粒少・灰褐色	良	ナデ	要(益耕機)ト転用	重量 6.7g
4	0006	1区	B2	SD01-d(下層)	罐	罐(青磁)	—	—	(1.7)	灰オリーブ	暗紺縫 墨地	良	—	赤道洋文化、中国	—
5	0004	1区	B2	SD01-c-d間アゼ	陶器	壺(瓶前後)	—	—	(2.9)	灰灰	粗砂少・細砂少	良	ロクロナデ	—	ロクロナデ
6	0003	1区	B2	SD01c-d間アゼ	寄生土器	壺	—	—	(2.7)	にぶい黄褐色	粗砂多・細砂多	良	ナデ	寄生後期?	ロ小片
7	0008	1区	A2	SD06-b(下層) SD06-b(上層)	寄生土器	深鉢	—	—	(3.7)	反黄褐色	縦條・粗砂少、 細砂多	良	沈線文	—	—
8	0007	1区	A2	SD06-a(下層)土器No.1 SD06-a(下層)土器No.2 SD06-a(下層)土器No.3 小皿	土器器	—	6.9	6.7	1.8	淡黄褐色	粗砂少・赤 粘土色	良	ヨコナデ・ナデ	基底ゆがみ、14c前半	壺4/12 基底10/12
9	0009	1区	B3	SD06-a(上層)	土器器	支脚	—	—	(2.2)	にぶい橙	粗砂多	良	ナデ	—	—
10	0009	1区	A2	SD08-b(上層)	陶器	盤(基前後)	—	—	(3.7)	にぶい黄褐色	縦條・粗砂少、 細砂多	良	ロクロナデ	内面平滑(使用痕)	—
11	0010	1区	A3	SD08-b(上層)	瓦器	火鉢	—	—	(3.7)	灰黃褐色	粗砂少	良	ナデ	16c後半～17c初、 瓦質土器	—
12	0011	1区	B2	SD11-a(上層)	罐	瓶(染竹)	—	—	(3.1)	灰白	縦條 墨地:灰白	良	—	—	15c後半～16c初、中壇
13	0061	1区	B2	SD11-(上層)(SD11との アゼ)鉄刀No.6	工具	鉄刀	最大長 (3.1)	最大幅1.0 (訂本体0.55)	最大厚0.8 (訂本体0.3)	—	—	—	—	中壇?	重量 (1.5)g
14	0012	1区	B2	SD12-b	陶器	壺(瓶)	—	7.0	(1.3)	オリーブ	粗砂少 墨地:灰青	良	—	内外面粗面あり 灰褐色	底1/12
15	0013	1区	B3	SD13-a(上層)	陶器	壺? (瓶前後)	—	—	(3.5)	にぶい黄褐色	素面:灰青	良	ナデ	要か? 逆鉗なし	—
16	0014	1区	B3	SD13-a(上層)	土製品合金関係	小さいごの口羽	最大長 (7.5)	最大幅 (6.1)	最大厚 (3.6)	—	—	—	—	復元 元・復元法(5.9.0) cm丸径(3.0)cm、 輪郭による 割合部分り	重量 (104.0)g
17	0002	1区	A3	P23(上層)	工具	鉄鑿?	最大長 (4.3)	最大幅 1.25	最大厚 0.6	—	—	—	—	中壇?	重量 (3.0)g
18	0015	1区	C3	ベース砂中(SD13-b の下)SD13-b	磚文土器	鉢	—	—	(5.4)+(4.9)	黒褐色	粗砂多・繊砂 石・石含む	良	ミガキ・凹凸 文、穿孔	黒面後期後半、青口 式、外面すり付青 文、穿孔	—
19	0046	1区	B3	ベース砂中(棒出面) (SD08-cの様)	工具	磨石	最大長 (3.7)	最大幅 (4.35)	最大厚 4.5	—	—	—	—	調文? 全面使用済	重量 (176.0)g
20	0017	2区	C6	SK01-a	磚文土器	深鉢	—	—	(5.2)	にぶい黄褐色	粗砂多・細砂多	良	ケズリ跡ナデ ナデ	—	—
21	0016	2区	C5	SX01土器No.1,2,3,4 SX01土器No.6,7,8,9 SX01土器No.10,12 SX01土器No.11,14, SX01土器No.15,17	磚文土器	深鉢	22.2	5.3	16.5	黒褐色・にぶい黄褐色	粗砂多	良	ケズリ跡ナデ ナデ	調査後部、内面す り付青	壺4/12 壺10/12
22	0003	2区	C6	P04	工具	鉄刀	最大長 (3.95)	最大幅 1.05	最大厚 0.9	—	—	—	—	中壇?	重量 (4.7)g

第2表 出土遺物観察表(1)

報告書番号	実測番号	測定区	グリッド	遺構・位置	種別 基準		口径(cm)	直徑(cm)	基高(cm)	色調(内) 色調(外)	粒度	組成	測定(内) 測定(外)		備考	残存率
					直徑	基高							底地	底地		
23 0018	2区 C6	P12		遺物器 舞台脚	—	7.0	(1.0)	灰	粗砂少	良	ナデ ナデ、底板・底地	無加質土質	—	—	重量 24.0g	
				冶金關係 鉛津	最大長 3.4	最大幅 4.6	最大厚 1.7	—	—	—	—	—	—	—		
24 0060	2区 C5	P15		箱器 小杯(漆付)	4.5	2.4	1.95	白 白	底地:白	良	— —	透明釉	—	—	重量 24.0g	
				箱器 紅豆	5.0	1.5	1.7	— —	底地:灰白	良	— —	—	—	—		
25 0019	2区 C6	P16		遺物器 小杯(漆付)	—	—	(8.2)	灰 灰	粗砂多	良	同心円型で 具眼有り タクチ縫 カキ目	—	—	—	C2/12 底1/12	
				遺物器 要	—	—	(1.5)	にぶい黒 にぶい黒	粗砂多	不 良	クロコナデ クロコナデ、 底板へうらぎ	無加質土質	底1/12	—		
26 0022	3区 D6	SD15-c(上層)土器 No.5		遺物器 要	—	—	(13.0)	にぶい黒 にぶい黒	粗砂多	不 良	クロコナデ クロコナデ、 底板へうらぎ	無加質土質	底1/12	—	小片 底1/12	
				遺物器 要	—	—	(20.5)	黄灰 礫少、粗砂並	礫少、粗砂並	良	クロコナデ クロコナデ、 底板へうらぎ	—	—	—		
28 0021	3区 D8	SD15-c(下層)土器 No.3		遺物器 要	—	—	(8.2)	灰 灰	粗砂少	不 良	ヨココナデ ヨココナデ	—	—	—	C2/12 底1/12	
				遺物器 要	—	—	(1.5)	にぶい黒 にぶい黒	粗砂少	不 良	ヨココナデ ヨココナデ	—	—	—		
29 0020	3区 E8	SD15-c(下層)土器 No.7 SD15-c(下層)土器 No.9		遺物器 双耳瓶	—	—	—	黄灰 礫少、粗砂並	礫少、粗砂並	良	ヨココナデ ヨココナデ、 底板へうらぎ	—	—	—	—	
				土器器 灯明皿	8.3	5.4	2.1	黒褐 黒褐	粗砂少	良	ヨココナデ ヨココナデ	—	—	—		
31 0047	3区 E9	SD16(上面)石 No.3 碑状石製品		その他 碑状石製品	最大長 (3.5)	最大幅 0.55	最大厚 0.5	— —	—	—	— —	—	—	—	重量 (1.9)g	
				工具 鉤釘	最大長 (3.55)	最大幅 0.88	最大厚 0.8	— —	—	—	— —	—	—	—		
32 0064	3区 E9	SD16-c(上層)鐵 No.1		鉢	—	—	(3.2)	にぶい黄褐 浅黃色	粗砂多	良	ナデ ナデ後文様	—	—	—	重量 (2.1)g	
				鐵文土器 鉢	—	—	(4.0)	にぶい黄褐 暗黄褐	粗砂多	良	ナデ ナデヨコナデ、 沈底ヨコナデ、 沈底	—	—	—		
33 0024	3区 D9	SD18-b(土器 No.2 鉢)		石器	最大長 (13.55)	最大幅 7.15	最大厚 2.65	— —	—	—	— —	—	—	—	小片 底1/12	
				瓦質土器 火鉢?	(16.0)	—	(4.5)	褐灰 褐灰	粗砂多	良	ナデ ヨコナデ、ナデ	瓦質土器	—	—		
35 0048	3区 D9	SD18-b(石 No.1 打製石等?)		石器 瓦質陶製品 (スンコ)	最大長 (13.55)	最大幅 7.15	最大厚 2.65	— —	—	—	— —	—	—	—	重量 (293)g	
				瓦質土器 火鉢?	(16.0)	—	(4.5)	褐灰 褐灰	粗砂多	良	ナデ ヨコナデ、ナデ	—	—	—		
36 0026	3区 D8	試掘坑		瓦質土器 火鉢?	(16.0)	—	(4.5)	褐灰 褐灰	粗砂多	良	ナデ ヨコナデ、ナデ	—	—	—	C2/12	
				瓦質土器 火鉢?	(16.0)	—	(4.5)	褐灰 褐灰	粗砂多	良	ナデ ヨコナデ、ナデ	—	—	—		
37 0027	4区 F12	SD23-a(上層) 円錐形陶製品 (スンコ)		瓦質 円錐形陶製品 (スンコ)	最大長 (2.3)	最大幅 (2.6)	最大厚 (1.95)	暗灰 暗灰	粗砂多 底地:灰黃	良	— —	—	—	—	重量 (16.0)g	
				瓦質土器 瓶	—	4.4	(2.2)	— —	底地:にぶい 褐-褐灰	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—		
38 0028	4区 F12	SD23-a(上層)土器 No.2		陶器 瓶	—	—	—	— —	底地:にぶい 褐-褐灰	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	C2/12	
				SD23-a(上層)土器 No.5	10.0	—	3.1	— —	底地:灰白	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—		
40 0032	4区 F13	SD23-c(上層)土器 No.17		陶器 瓶	(11.0)	—	(1.7)	— —	粗砂少 底地:灰黃	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	C2/12	
				瓦質土器 瓶	—	—	(4.3)	暗灰 暗灰	粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—		
41 0030	4区 F12	SD23-c(上層)土器 No.8		瓦質土器 火鉢? 土瓶?	—	—	(4.3)	暗灰 暗灰	粗砂多	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	小片 底1/12	
				その他 炉?	最大長 (6.2)	最大幅 (8.0)	最大厚 (4.3)	黄灰 黄灰	粗砂少	良	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—		
42 0031	4区 F12	SD23-b(下層)土器 No.9		陶器 瓶	—	—	(3.4)	— —	粗砂少 底地:灰黃	良	— —	—	—	—	—	
				窓器 瓶	—	5.6	(1.1)	— —	底地:にぶい 黄褐	良	— —	—	—	—		
43 0058	4区 F12	SD23-c(下層)土器 No.9		陶器 瓶	—	—	(3.4)	黄灰 黄灰	粗砂多	良	— —	—	—	—	C2/12	
				窓器 瓶	—	—	(3.4)	— —	底地:灰黃	良	— —	—	—	—		
44 0033	4区 F12	SD24-a		窓器 瓶	—	—	—	— —	底地:灰黃	良	— —	—	—	—	小片	

第3表 出土遺物観察表 (2)

報告書番号	実測番号	調査区	グリッド	遺構・位置	種別 構造	口径(cm)	直径(cm)	基高(cm)	色調(内) 色調(外)		埴土	組成	面積(内) 面積(外)	備考	残存率
									内	外					
45 0034	5区	F14	SD07	土器	(8,2)	(6,6)	1.7	浅黄褐	粗砂多	良	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	口小片 底小片		
				皿				浅黄褐							
46 0059	5区	G14	SD07	冶金関係 鉄滓(磁型滓)	最大長 7.1	最大幅 8.1	最大厚 2.9	—	—	—	—	—	—	重量 153.7g	
								—							
47 0035	5区	G15	勇士中(北壁)	土器 火葬	17.4	—	(3,7)	に赤い煙	粗砂多	良	ロクロナデ	ロクロナデ	口1/12		
								に赤い煙							
48 0061	6区	H17	P41-d	冶金関係 滓	最大長 6.25	最大幅 7.3	最大厚 4.05	—	—	—	—	—	中世?	重量 136.5g	
								—							
49 0042	6区	H7	P49-a(上層)	陶器 刷毛目施	8.6	—	(2,7)	—	重地:褐色	良	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前系	口1/12	
								—							
50 0038	6区	H17	P50-c(柱頭部上層)	磁器 瓶(染付)	—	—	(1,6)	—	重地:灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	小片		
								—							
51 0039	6区	H17	P53-a(柱頭部上層)	磁器 瓶(口) (白磁)	(6,6)	—	(4,1)	—	重地:灰白	良	—	—	小片		
								—							
52 0041	6区	H17	P53-c(柱頭部上層)	磁器 瓶(染付)	—	—	(2,1)	—	重地:灰白	良	—	—	肥前系	小片	
								—							
53 0040	6区	H17	P53-b(腹方部上層)	磁器 瓶	5.2	—	(1,5)	—	重地:灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	肥前系	C2/12	
								—							
54 0052	6区	H17	P52-d(腹方部上層)	土製品金剛輪 津(口)?	最大長 (4.3)	最大幅 (4.7)	最大厚 (2.9)	—	—	—	—	—	中世?	重量 38.6g	
								—							
55 0043	6区	H17	P55-d(柱頭) (下層)	磁器 瓶(青磁)	(11,5)	—	(2,5)	—	重地:灰白	—	ロクロナデ	ロクロナデ	中国青磁	口小片	
								—							
56 0050	6区	H17	P55-d(柱頭) (下層)	石器 鐵状石?	最大長 (6.35)	最大幅 (4.95)	最大厚 1.95	—	—	—	—	—	—	—	重量 (42.1)g
								—							
57 0049	6区	H17	P55-b-d(腰セクション面)	石器 台石、敲石?	最大長 (5,0)	最大幅 (7,7)	最大厚 (3,0)	—	—	—	—	—	—	英文?	重量 (227.2)g
								—							
58 0096	6区	H17	P56-a(柱頭) (上層)	建築材等 (磚状)財物?	最大長 (40,5)	最大幅 3.7	最大厚 3.5	—	—	—	—	—	—	—	—
								—							
59 0044	6区	H17	P56-a(腰) (上層)	磁器 紅皿	3.6	—	(1,2)	—	重地:灰白	良	—	—	—	C3/12	
								—							
60 0036	6区	H16	P57-b(柱頭部上層)	磁器 重	(1,8)	9.0	(1,3)	—	重地:灰白	良	ロクロナデ	ロクロナデ	赤上粘付	C3/12	
								—							
61 0045	6区	H16-17	NR01(上層)	磁器 皿(染付)	11.7	7.0	2.5	白	磁的壊 重地:白	良	—	—	染付(銀版転写) 口 さき、右代	口C/12 底4/12	
								白							
62 0057	6区	H16	NR01-b(トレント) (上層)	容器 板状木製品	最大長 11.2	最大幅 (2.6)	最大厚 0.95	—	—	—	—	—	—	—	
								—							
63 0070	6区	H16	NR01(b-c 間の板)	その他用途不明 板	最大長 100.7	最大幅 10.4	最大厚 5.8	—	—	—	—	—	全面被覆	—	
								—							
64 0057	6区	H8	板 No.1	その他用途不明 板	最大長 (30,4)	最大幅 3.2	最大厚 3.2	—	—	—	—	—	先端部鉗で削ってあ り突っ張っている	—	
								—							
65 0066	6区	H8	板 No.2	その他用途不明 板	最大長 (25,1)	最大幅 2.9	最大厚 2.7	—	—	—	—	—	—	—	
								—							
66 0069	6区	H8	板 No.3	その他用途不明 板	最大長 (27,6)	最大幅 5.2	最大厚 3.1	—	—	—	—	—	—	—	
								—							

第4表 出土遺物観察表 (3)

第4章 自然科学的分析

第1節 石製品の石質同定

1. はじめに

大領遺跡は、石川県小松市木場湯の北側約500 mに位置する。調査では、近世以降と思われる石筆、縄文時代の遺物と思われる磨石や石斧などの石製品が出土した。ここでは、出土した石製品について、肉眼観察による石材同定を行った。

2. 試料と方法

石材同定を行った石製品は、大領遺跡において出土した石製品5点である（第5表）。

石材同定は、主に肉眼により行い、マイクロスコープを用いて石材の接写撮影を行った。

3. 結 果

第5表に、肉眼による石製品の石材同定を行った結果を示す。なお、各石材の記載は、表面観察による色調や構成鉱物、岩石組織、破断面の特徴等について行った。

以下に、代表的な石材の特徴について記載した。

(1) 細粒花崗岩（第51図-1）

白色を呈し、主に細粒の石英・長石からなり、雲母類や輝石類を少量含む。

(2) 硬質頁岩（第51図-2）

黒色を呈し、割れ目において半透明のガラス質からなる泥質岩である。

(3) 安山岩（第51図-3～5）

黄灰色～灰褐色～灰色を呈し、斑晶（輝石や長石）からなる。

分析 No.	報告番号	実測番号	調査区	グリッド	遺構・層位	種別	岩種	備考	石材
1	19	0048	1区	B3	ベース砂中(検出面)(SD08-c の横)	工具	磨石	縄文? 全面使用平滑	細粒花崗岩
2	31	0047	3区	E9	SD16(上面) 石 No.3	その他	繊状石製品	近代以前	硬質頁岩
3	35	0048	3区	D9	SD18-b 石 No.1	石器	打製石斧?未成品?	縄文? 全面使用平滑	安山岩
4	56	0050	6区	H17	P55-d(柱頭)(下層)	石器	塊状石斧?	縄文? 全面使用平滑	安山岩
5	57	0049	6区	H17	P55-d(b)開セクション面)	石器	台石 蔽石?	縄文?	安山岩

第5表 小松市大領遺跡出土石製品

4. 考 察

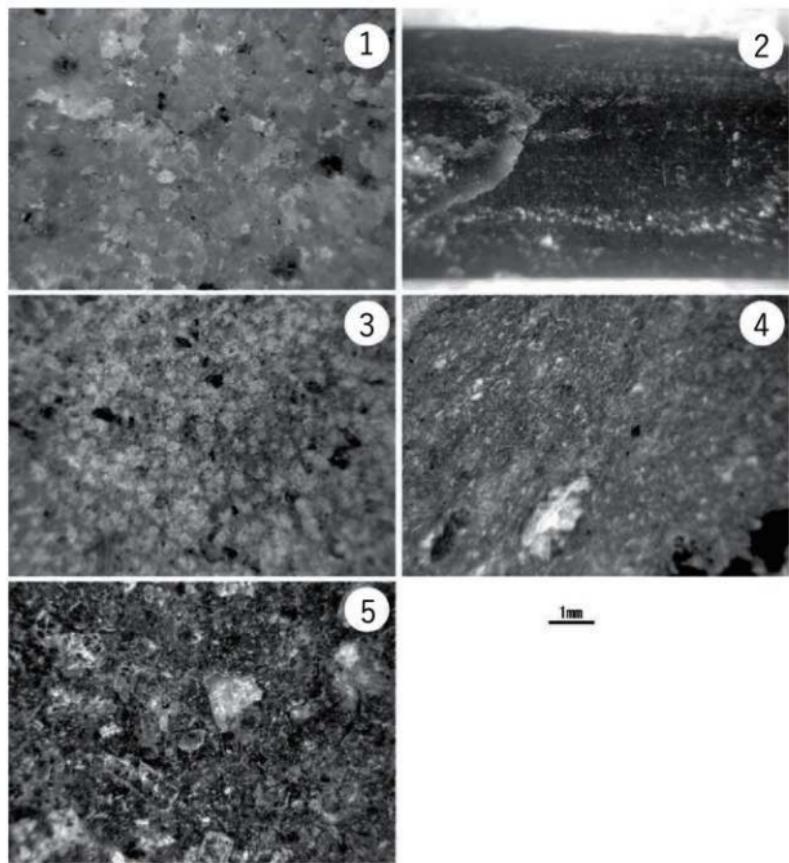
鹿野ほか（1990）の20万分の1地質図において、大領遺跡の周辺では第四紀後期更新世の中位段丘及び扇状地堆積物（凡例 tm）や中期更新世の高位段丘及び扇状地堆積物（第52図の凡例 th）のほか、新第三紀前期中新世（糸生層最上部、冠岳流紋岩、山中層及び医王山層）の流紋岩火砕岩・溶岩（第52図の凡例 Izrp）、流紋岩溶岩・火砕岩（第52図の凡例 Izr）が広く分布する。北側には手取川が流れ、上流域には新第三紀前期中新世（糸生層最上部、冠岳流紋岩、山中層及び医王山層）の岩脈状の玄武岩・安山岩溶岩（第52図の凡例 Iza）、三疊紀の飛驒花崗岩類（第52図の凡例 Hg, Hd, Hm）が分布する。

分析 No.1の細粒花崗岩製の磨石や分析 No.5の安山岩製の蔽石?は、形状が円礫の一部と推定され

るため、手取川により上流域から運ばれた川原石を利用したと思われる。

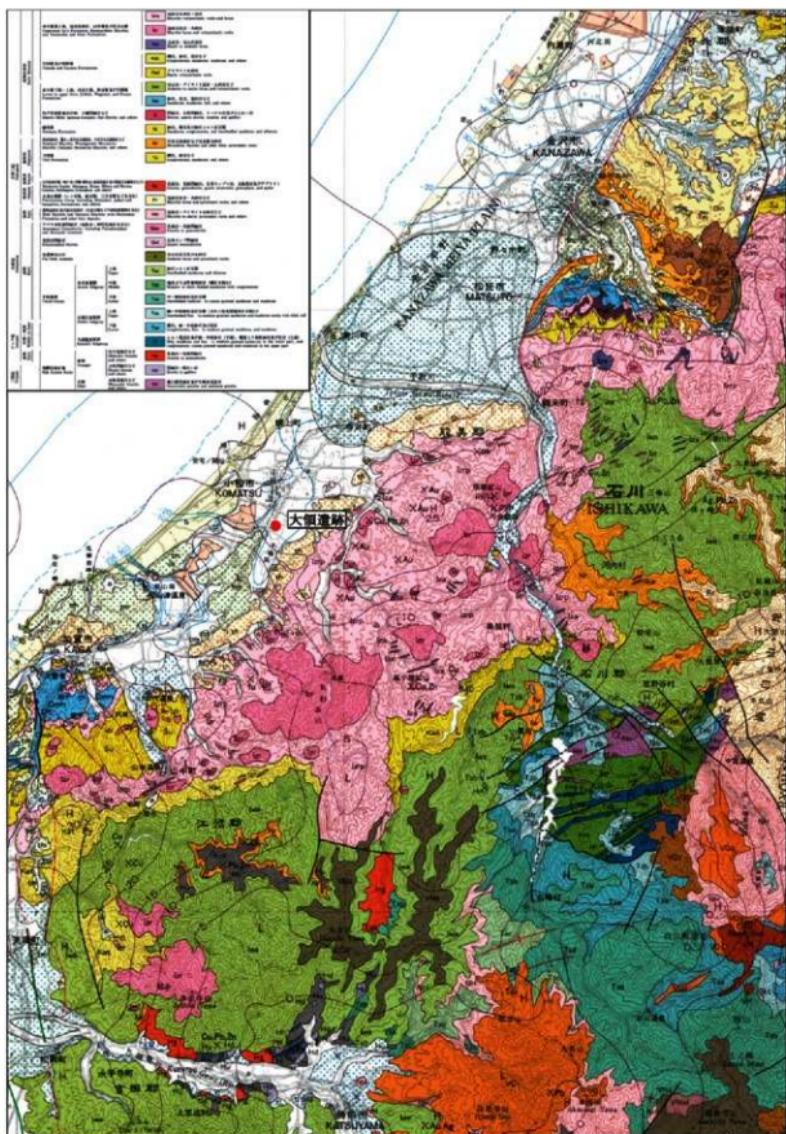
引用文献

鹿野和彦・原山 智・山本博文・竹内 誠・宇都浩三・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久 (1990) 20万分の1地質図「金沢」 地質調査所。



1. 細粒花崗岩（分析 No.1） 2. 硬質頁岩（分析 No.2） 3. 安山岩（分析 No.3）
4. 安山岩（分析 No.4） 5. 安山岩（分析 No.5）

第51図 岩石のマイクロスコープ写真



第52図 大領遺跡と周辺の地質図（鹿野ほか（1990）の20万分の1地質図「金沢」を編集）

第2節 木製品の樹種同定

1. はじめに

石川県小松市の大領遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、6区から出土した木製品6点である。各試料の時期については、第6表に示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定では、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結 果

同定の結果、針葉樹のモミ属とマツ属複維管束亜属、スギの3分類群がみられた。モミ属が3点でスギが2点、マツ属複維管束亜属が1点であった。同定結果を第6表に示す。

分析 No.	報告番号	実測番号	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り	時期
6	58	0066	6区	H17	P 56-a	部材？	スギ	みかん割り	近世以降
7	62	0057	6区	H16	NR 01-b	板状木製品	スギ	柾目	近世以降
8	63	0070	6区	H16	NR 01	杭	マツ属複維管束亜属	芯持丸木	近世以降
9	64	0057	6区	I 18	杭 No.1	杭	モミ属	分割材	不明
10	65	0068	6区	I 18	杭 No.2	杭	モミ属	分割材	不明
11	66	0069	6区	I 18	杭 No.3	杭	モミ属	分割材	不明

第6表 大領遺跡出土木材の樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第53図 1a-1c (No.9)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1~8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2~4個みられる。また放射組織の末端壁は、数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高地に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高地に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第53図 2a-2c (No.8)

仮道管と垂直および水平树脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 第54図 3a-3c (No.6)

道管と放射組織、树脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2~15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

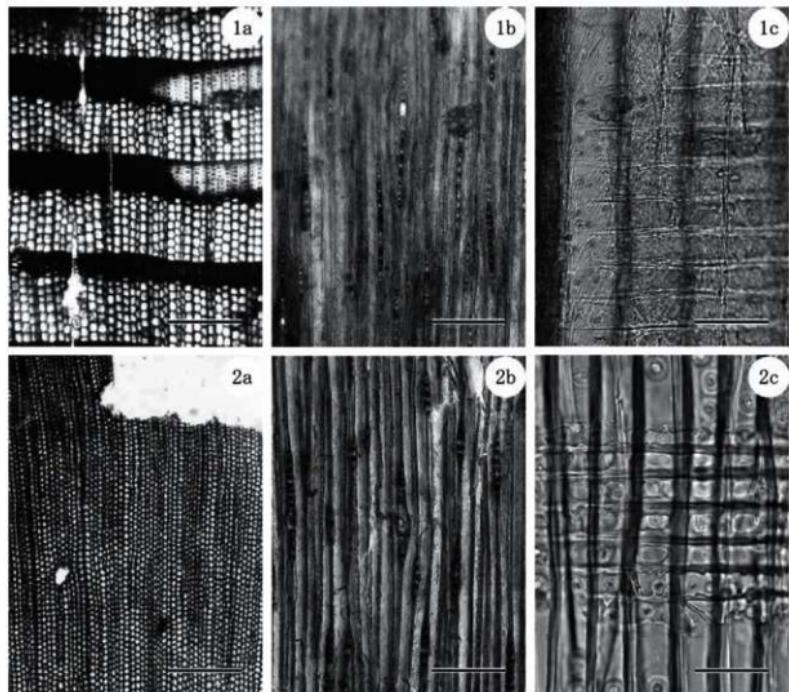
4. 考 察

近世以降の部材？と板状木製品はスギ、杭はマツ属複維管束亜属であった。スギとマツ属複維管束亜属は真っすぐで加工性の良い樹種であり、マツ属複維管束亜属は油分が多く耐朽性が高い（伊東ほか, 2011）。

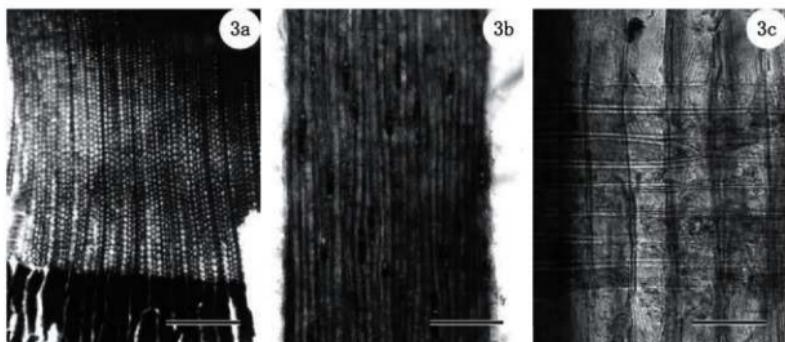
時期不明の杭は、いずれもモミ属であった。モミ属はスギと同様に真っすぐで加工性が良く、保存性も良い樹種である。（伊東ほか, 2011）。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』海青社



第53図 大領遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）



1a-1c. モミ属 (No.9)、2a-2c. マツ属複雑管束亜属 (No.8)、3a-3c. スギ (No.6)
a:横断面 (スケール=500 μm)、b:接線断面 (スケール=200 μm)、c:放射断面 (スケール=50 μm)

第54図 大領遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (2)

第3節 花 粉 分 析

1. は じ め に

石川県小松市大領町、今江町地内に所在する大領遺跡において、古植生を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料に対して行った花粉分析の結果を示し、堆積当時の古植生について検討した。なお、同一試料を用いて植物珪酸体分析と珪藻分析も行われている（別項参照）。

2. 試 料 と 方 法

分析試料は、1区のSD 01とSD 06から採取された2試料（No.1、2）と3区のSD 16から採取された2試料（No.5、10）、SD 15から採取された2試料（No.13、17）、SK 12から採取された1試料（No.21）、SD 18から採取された1試料（No.25）の、計8試料である（第7表）。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

試料（湿重量約4 g）を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え、10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え、1時間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9:硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し、保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。十分な量の花粉化石が含まれている試料については、樹木花粉が200に達するまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。十分な量の花粉化石が含まれていない試料については、プレパラート1枚を検鏡するに留めた。また、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本（PLC.3352~3359）を作製し、写真を第56図に載せた。

試料No.	調査区	グリッド	遺構・層位	時期	堆積物の特徴
1	1区	B2	SD 01 東壁下層	中世	黒褐色 (10 YR 3/2) シルト質細粒砂
2		C3	SD 06 東壁下層		オリーブ褐色 (25 Y 4/3) シルト質細粒砂
5		D9	SD 16-a・b間アゼ 2層	古代	赤黒色 (10 R 2/1) 細粒砂
10			SD 16-a・b間アゼ 11層		に赤い黄褐色 (10 YR 7/3) 細粒砂
13	3区	E8	SD 15-d・e間アゼ 2層		赤黒色 (25 YR 2/1) 細粒砂
17			SD 15-d・e間アゼ 6層		明黄色 (25 Y 6/6) 細粒砂
21			SK 12-a・b間アゼ 11層	古代?	赤黒色 (10 R 17/1) 細粒砂
25		E10	SD 18-d・e間アゼ 2層		赤黒色 (25 YR 2/1) 細粒砂

第7表 分析試料一覧

学名	和名	No.1	No.2	No.5	No.10	No.13	No.17	No.21	No.25
樹木									
<i>Abies</i>	モミ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属接ぎ管束亞属	2	—	—	—	—	10	—	—
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	—	7	—	—	—	7	—	—
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	32	11	—	—	6	82	—	—
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	—	—	—	—	—	3	—	—
<i>Salix</i>	ヤナギ属	—	—	—	—	—	1	—	—
<i>Pterocarya-Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	3	1	—	—	—	3	—	—
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	5	3	—	—	1	1	—	—
<i>Betula</i>	カバノキ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	30	97	—	—	1	20	—	—
<i>Fagus</i>	ブナ属	3	3	—	—	—	3	—	—
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亞属	17	25	—	—	1	15	—	—
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカシガシ亞属	50	48	—	—	1	20	—	—
<i>Castanea</i>	クリ属	18	4	—	—	—	11	—	—
<i>Castanopsis-Pasania</i>	シイノキ属-マテバシイ属	33	9	—	—	3	9	—	—
<i>Ulmus-Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	—	—	—	—	1	8	—	—
<i>Celtis-Aphananthe</i>	エノキ属-ムクノキ属	—	—	—	—	—	3	—	—
<i>Phellodendron</i>	キハダ属	1	—	—	—	—	—	—	—
<i>Ilex</i>	モチノキ属	—	—	—	—	—	1	—	—
Celastraceae	ニシキギ科	—	—	—	—	—	1	—	—
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	6	—	—	—	—	1	—	—
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属	2	—	—	—	—	1	—	—
草本									
Gramineae	イネ科	97	17	—	—	2	116	—	—
Cyperaceae	カヤツリグサ科	—	—	—	—	—	3	—	—
<i>Polygonum sect. Persicaria-Echinocalyx</i>	サナエタデ属-ナガツカミ節	1	—	—	—	—	—	—	—
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	1	1	—	—	1	—	—	—
Brassicaceae	アブラナ科	54	5	—	—	—	—	—	—
Haloragis	アリノトウグサ属	1	—	—	—	—	—	—	—
Apiaceae	セリ科	1	1	—	—	—	—	—	—
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	18	3	—	—	6	38	—	—
Tubuliflorae	キク亞科	—	—	—	—	—	1	—	—
Liguliflorae	タンポポ亜科	24	21	—	—	2	3	—	—
シダ植物									
monolete type spore	単条溝胞子	1	3	—	—	—	4	—	—
trilete type spore	三葉溝胞子	—	4	—	—	—	7	—	—
Arboreal pollen	樹木花粉	204	208	—	—	14	200	—	—
Nonarboreal pollen	草本花粉	197	48	—	—	11	161	—	—
Spores	シダ植物胞子	1	7	—	—	—	11	—	—
Total Pollen & Spores	花粉・胞子総数	402	263	—	—	25	372	—	—
unknown	不明	—	2	5	—	—	—	2	—

第8表 産出花粉胞子一覧表

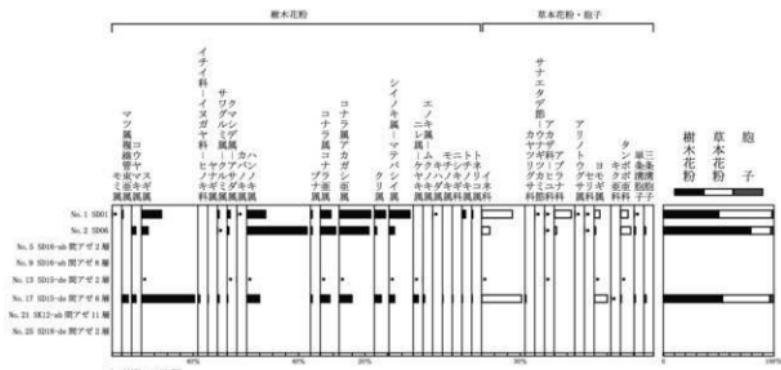
3. 結 果

検鏡の結果、8試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉22、草本花粉10、形態分類のシダ植物胞子2の、総計34である。これらの花粉・胞子の一覧表を第8表に、分布図を第55図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉と胞子の産

出率は産出花粉胞子総数を基準とした百分率で示してある。図表においてハイフン（-）で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。なお、5試料（No.5、9、13、21、25）からは十分な量の花粉化石が得られなかった。

十分な量の花粉化石が得られた古代のSD 15-d・e間アゼ6層（No.17）では、樹木花粉でスギ属、草本花粉でイネ科とヨモギ属の産出が目立つ。

中世とされるSD 01（No.1）とSD 06（No.2）では、花粉組成に相違があり、樹木花粉ではハンノキ属とシノキ属-マテバシイ属で、また、草本花粉ではイネ科とアブラナ科、ヨモギ属で顕著な産出率の相違が見られた。



樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基準として百分率で算出した。

*は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

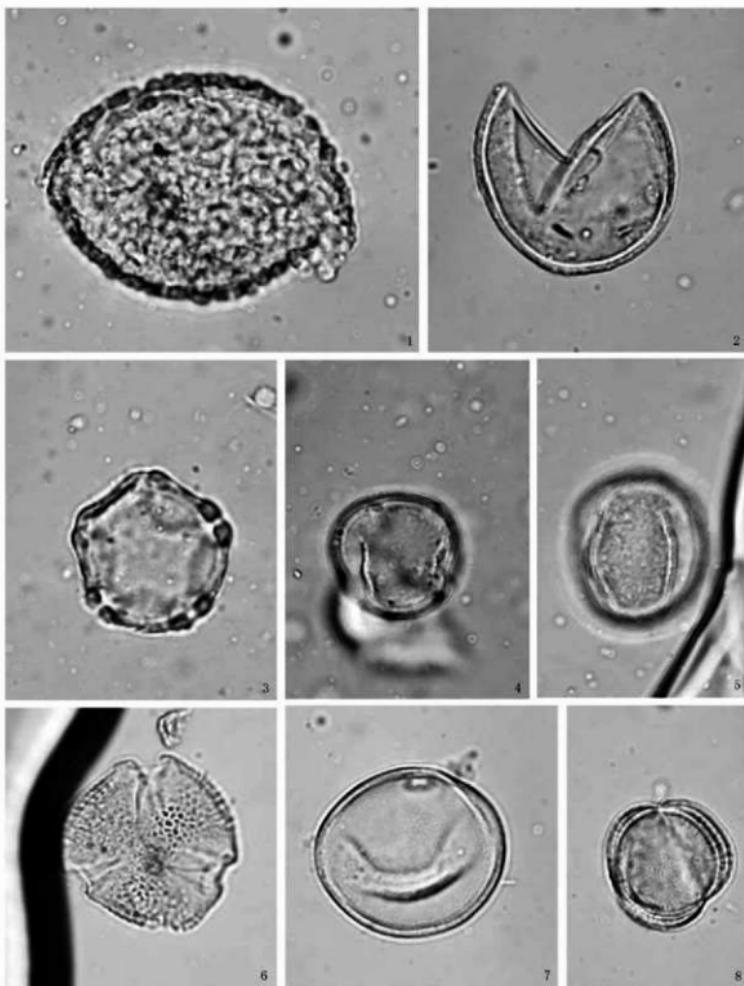
第55図 大領遺跡における花粉分布図

4. 考 察

一般的に、花粉は湿乾を繰り返す環境に弱く、酸化的な環境下で堆積すると紫外線や土壤バクテリアなどによって分解され、消失してしまう。したがって、堆積物が酸素と接触する機会の多い堆積環境では、花粉化石が残りにくい。すなわち、十分な量の花粉化石が得られなかった試料の採取層は、酸化的な環境に晒されたために花粉化石が分解・消失してしまった可能性がある。珪藻分析においても、縄文時代？や古代の試料においては、珪藻化石が産出していないか、産出数が少なく、好気的環境下で大気に曝された堆積環境が推測されている。一方、SD 01（No.1）とSD 06（No.2）、SD 15-d・e間アゼ6層（No.17）の3試料からは十分な量の花粉化石が得られた。以下では、十分な量の花粉化石が得られた3試料の花粉化石群集から古植生を検討した。

古代のSD 15-d・e間アゼ6層（No.17）では、樹木花粉でスギ属の産出率が突出している。古代の遺跡周辺にはスギ林が分布を広げていた可能性がある。また、照葉樹林要素のコナラ属アカガシ亜属やシノキ属-マテバシイ属の産出も見られ、遺跡周辺にはカシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布していたと考えられる。さらには、二次林要素のマツ属複管束東亜属やコナラ属コナラ亜属、クリ属も産出しており、遺跡周辺の開けた明るい場所にはニヨウマツ類やコナラ、クリなどから成る二次林も分布していた可能性がある。ハンノキ属をはじめとし、ヤナギ属やサワグルミ属-クルミ属、ニレ

属 - ケヤキ属、エノキ属 - ムクノキ属、トチノキ属、トネリコ属といった分類群は水分条件の良好的な場所に生育する植物を含んでおり、これらの分類群がSD 15周辺に生育していた可能性がある。草本花粉ではイネ科とヨモギ属の産出が目立つため、SD 15周辺にイネ科やヨモギ属の草本類が生育していた可能性がある。



1. コウヤマキ属 (PLC.3352)
2. スギ属 (PLC.3353)
3. ハンノキ属 (PLC.3354)
4. コナラ属・カガシ亜属 (PLC.3355)
5. ニシキギ科 (PLC.3357)
6. ヨモギ属 (PLC.3359)
7. イネ科 (PLC.3358)

第56図 No. 17 から産出した花粉化石

中世の SD 01 (No.1) や SD 06 (No.2) では、花粉組成に相違が見られた。SD 06 (No.2) ではハンノキ属が突出しているが、SD 01 (No.1) ではハンノキ属とともにサワグルミ属-クルミ属やトチノキ属、トネリコ属といった好湿性植物の産出が目立つ。溝周辺の古植生の相違を反映している可能性があり、その場合、SD 06 周辺にハンノキ属が生育しており、SD 01 周辺にはハンノキ属とともにサワグルミ属-クルミ属やトチノキ属、トネリコ属などが生育していたと考えられる。照葉樹林要素の分類群にも相違が見られ、コナラ属アカシヤ属は両遺構で同率の産出率を示すが、シイノキ属-マテバシイ属に関しては SD 01 (No.1) で産出率が高くなっている。カシ類やシイ類からなる照葉樹林も分布を広げていたと考えられるが、シイノキ属-マテバシイ属に関しては SD 01 の堆積時に周辺に分布していたと考えられる。

草本花粉においても組成に相違が見られ、タンボボ亜科は両遺構ではほぼ同率の産出率を示すが、SD 01 (No.1) ではイネ科やアブラナ科、ヨモギ属の産出率が高くなっている。イネ科やアブラナ科、ヨモギ属は SD 01 の堆積時に周辺に分布を広げていた可能性がある。

なお、中世の SD 01 (No.1) や SD 06 (No.2) における花粉組成の相違は、中世の中でも微妙な時期差を反映している可能性もあり、その場合は時期によって遺構周辺の植生が異なっていた可能性を示唆する。

第4節 珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、10~500 μm ほどの珪酸質殻を持つ单細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている（小杉、1988；安藤、1990）。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境（例えばコケの表面や湿った岩石の表面など）に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

石川県小松市大領町、今江町地内に所在する大領遺跡では、堆積環境を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料に対して行った珪藻分析の結果を示し、堆積環境について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析と植物珪酸体分析も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

分析試料は、1区の SD 01 と SD 06、SD 08 から採取された3試料 (No.1~3) と、3区の SD 16 から採取された4試料 (No.5、9、10、11)、SD 15 から採取された4試料 (No.13、15、17、18)、SK 12 から採取された2試料 (No.21、23)、SD 18 から採取された2試料 (No.25、26) の、計15試料である（第9表）。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

湿重約5 g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて、有機物の分解と粒子の分散を行った。反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この操作を4~5回繰り返した。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け、永久プレパラートを作製する。

作製したプレパラートは顕微鏡下600~1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計

数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため、同定・計数を行っていない。また、保存状態の良好な珪藻化石を選び、写真を第57図に載せた。

珪藻の同定と種の生態性については、Lange-Bertalot (2000)、Hustedt (1930, 1937–1938, 1959, 1966)、Krammer and Lange-Bertalot (1985, 1988, 1991a·b)、Desikachariy (1987)などを参考にした。

3. 硅藻化石の環境指標種群

試料 No.	調査区	グリッド	遺構・層位	時期	堆植物の特徴
1	1区	B2	SD01 東壁下層	中世	黒褐色 (10YR3/2) シルト質細粒砂
2			SD06 東壁下層		オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質細粒砂
3			SD08 北壁下層		灰黄褐色 (10YR6/2) シルト
5	D9	C3	SD16-a · b 間アゼ 2層	古代	赤黒色 (10R2/1) 細粒砂
9			SD16-a · b 間アゼ 8層		にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂～中粒砂
10			SD16-a · b 間アゼ 11層		にぶい黄橙色 (10YR7/3) 細粒砂
11		E8	SD16-a · b 間アゼ 13層	縄文?	にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂
13			SD15-d · e 間アゼ 2層		赤黒色 (2.5YR2/1) 細粒砂
15			SD15-d · e 間アゼ 4層		オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂～中粒砂
17	E10	E8	SD15-d · e 間アゼ 6層	縄文?	明黄褐色 (2.5Y6/6) 細粒砂
18			SD15-d · e 間アゼ 10層		にぶい黄褐色 (10YR6/4) 細粒砂
21			SK12-a · b 間アゼ 11層		赤黒色 (10R1.7/1) 細粒砂
23		E10	SK12-a · b 間アゼ 16層	古代?	黒褐色 (10YR2/3) 細粒砂
25			SD18-d · e 間アゼ 2層		赤黒色 (2.5YR2/1) 細粒砂
26			SD18-d · e 間アゼ 7層		黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂

第9表 分析試料一覧

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉 (1988) および安藤 (1990) が設定し、千葉・澤井 (2014) により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種 (W) として、海水～汽水種は不明種 (?) としてそれぞれ扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明 (?) として扱った。以下に、小杉 (1988) が設定した海水～汽水域における環境指標種群と安藤 (1990) が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群 (A)] : 塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群 (B)] : 塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群 (C1)] : 塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草 (アマモなど) に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群 (D1)] : 塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群 (E1)] : 塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミニナ主体の貝類相やカニなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群 (C2)] : 塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群 (D2)] : 塩分濃度が5～26パーミルの水域の砂底 (砂の表面や砂粒間) に付着生活する種群である。

【汽水泥質干潟指標種群 (E 2)】：塩分濃度が2~12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

【上流性河川指標種群 (J)】：河川上流部の渓谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にびつたりと張り付いて生育しているため、流れによってはぎ取られてしまうことがない。

【中～下流性河川指標種群 (K)】：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

【最下流性河川指標種群 (L)】：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

【湖沼浮遊生指標種群 (M)】：水深が約1.5 m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

【湖沼沼澤湿地指標種群 (N)】：湖沼における浮遊生種としても、沼澤湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼澤湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

【沼澤湿地付着生指標種群 (O)】：水深1 m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態で優勢な出現が見られる種群である。

【高層湿原指標種群 (P)】：尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原などのように、ミズゴケを中心とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

【陸域指標種群 (Q)】：上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である（陸生珪藻と呼ばれている）。

【陸生珪藻A群 (Qa)】：耐乾性の強い特定のグループである。

【陸生珪藻B群 (Qb)】：A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4. 結 果

分析した15試料のうち、1区のSD 01東壁下層(No.1)、SD 06東壁下層(No.2)、SD 08北壁下層(No.3)、3区のSD 16-a・b間アゼ2層(No.5)、SD 15-d・e間アゼ6層と10層(No.17、18)、SK 12-a・b間アゼ16層(No.23)、SD 18-d・e間2層(No.25)の計8試料から珪藻化石が産出した(第10表)。いずれの試料においても珪藻化石の産出数は、非常に少なかった。保存状態は、全体的に壊れた殻が多く、一部の殻には溶解の痕跡が認められるため、不良である。なお、検出数が少ないため珪藻分布図は作成していない。以下では、遺構ごとに検出された珪藻化石群集の特徴について述べる。

・1区 B 2 SD 01 (No.1)

SD 01東壁下層からは、27個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種を主として、汽水生種および淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata* 等である。

・1区 C 3 SD 06 (No.2)

SD 06東壁下層からは、10個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種を主として、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、流水不明種の *Pinnularia* spp.等である。

・1区 C 3 SD 08 (No.3)

SD 08北壁下層からは、4個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種および淡水～汽水生種で構

成される。

・3区D 9 SD 16-a・b間アゼ (No.5, 9, 10, 11)

2層 (No.17) からは、3個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。8層 (No.9)、11層 (No.10)、13層 (No.11) は、無化石である。

・3区E 8 SD 15-d・e間アゼ (No.13, 15, 17, 18)

6層からは、4個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種と汽水生種である。10層 (No.18) からは、2個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。2層 (No.13) および4層 (No.15) は、無化石である。

・3区E 8 SK 12-a・b間アゼ (No.21, 23)

16層 (No.23) からは、2個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。11層 (No.21) は、無化石である。

・3区E 10 SD 18-d・e間アゼ (No.25, 26)

2層 (No.25) からは、1個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種である。7層 (No.26) は、無化石である。

種 類	No.1	No.2	No.3	No.5	No.9	No.10	No.11	No.13	No.15	No.17	No.18	No.21	No.23	No.25	No.26
	1区B2	1区C3			3SD, D9					3SD, E8					3SD, E10
	SD01	SD06	SD08		SD16-a-b間				SD15-d-e間		SK12-a-b間		SD18-d-e間		
	実量	実量	北壁			アゼ				アゼ		アゼ		アゼ	
	下層	下層	下層	2層	8層	11層	13層	2層	4層	6層	10層	11層	16層	2層	7層
<i>Nitzschia plana</i> W. Smith	?	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Thalassiosira bramapuriiae</i> (Ehr.) Hakansson & Locker	?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Nitzschia palea</i> (Kuetz.) W. Smith	W	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Rhopalodiella gibberula</i> (Ehr.) Muellner	W	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.) Van Heurck	W	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Cocconeis</i> spp.	?	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Eunota diodon</i> Ehrenberg	W	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Eunota intermedia</i> (Krasz.) Noerpel & Lange-Bertalot	W	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Eunota pectinata</i> var. <i>minor</i> (Kuetz.) Rabenhorst	O	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Eunota</i> spp.	?	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Gomphonema clevei</i> Fricke	W	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Gomphonema grovesii</i> M. Schmidt	W	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
<i>Gomphonema</i> spp.	?	—	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	Qa	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
<i>Pinnularia acrosphaerica</i> W. Smith	O	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Qa	5	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia brauni</i> (Grun.) Cleve	W	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	O	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Qb	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	O	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Pinnularia</i> spp.	?	—	4	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
<i>Stauroneis bonnieri</i> (Pet.) Lund	W	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
<i>Stauroneis schimanskii</i> Krammer	W	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海水生種															
海水・汽水生種	1									1					
淡水・汽水生種	1	1	1												
淡水生種	25	9	3	3					3	2		2	1		
珪藻化石総数	27	10	4	3	0	0	0	0	0	4	2	0	2	1	0

第10表 堆積物中の珪藻化石産出表（種群は、千葉・澤井（2014）による）

5. 考 察

縄文時代？や古代の試料は、いずれも無化石であるか、珪藻化石の産出数が非常に少なかった。そのため、種の生態性や群集の特徴から、堆積時の環境を推定するのは難しい。珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度指数が高いほど溶解度が大きくなり、溶けやすい点が実験により推定されている（千木良、1995）。また、経験的に、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失することがわかっている。好気的環境下で分解される花粉

化石も同層準で得られていない点を考えると、縄文時代？や古代の試料採取層準は、好気的環境下で大気に曝されたため、ほとんどの珪藻化石が、堆積後に分解・消失した可能性が高い。

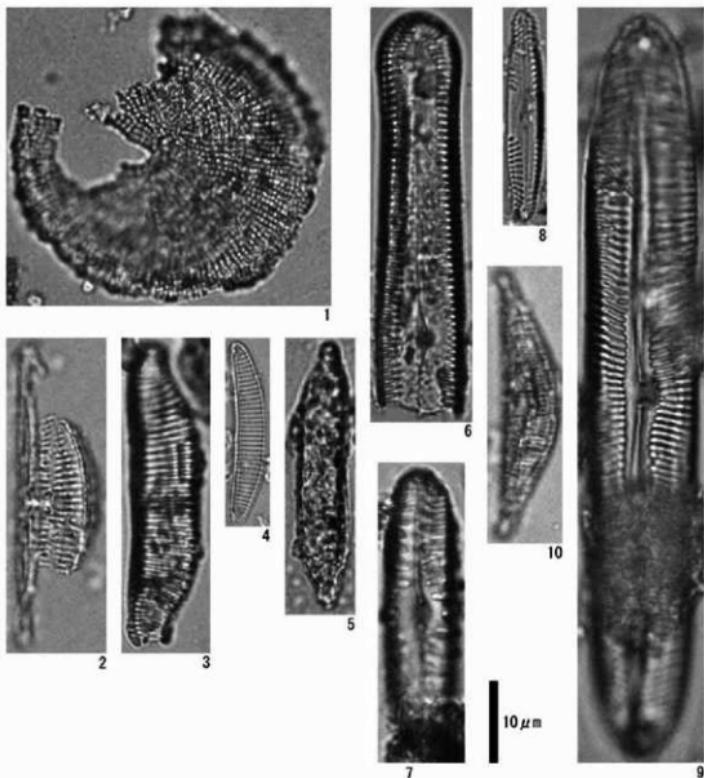
そうしたなか、中世の堆積層とされる1区C3のSD 06東壁下層（No.2）と1区B2のSD 01東壁下層（No.1）では比較的多くの珪藻化石が得られた。1区C3のSD 06東壁下層（No.2）からは、10個体が産出した。産出した分類群は、淡水生種を主として、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、流水不明種の *Pinnularia* spp.等である。*Pinnularia* spp.は、本属が複数の種で構成されるが、著しく保存不良のため、種レベルの同定が困難であった。しかし、属自体が湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。産出数が少ないため、この結果で湿地的環境と断定はできないが、同試料の花粉分析においても、湿地林要素のハンノキ属の産出が目立っており、湿地の環境を裏付けた。

SD 01東壁下層（No.1）から産出した種は、淡水生種で流水不定性種の *Eunotia pectinalis* var. *minor*、陸生珪藻の *Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata* 等である。*Eunotia pectinalis* var. *minor* は、湿地に多産する種とされるため（埼玉県教育委員会、1962）、湿地の環境の存在を示唆する。植物珪酸体分析の結果では、同層準において抽水植物のヨシ属の産出が目立っており、整合性がある。

また、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia subcapitata* 等の陸生珪藻は、水中や水底の環境以外のたとえばコケを含めた陸上植物の表面や岩石の表面、土壌の表層部など、大気に接触した環境下で生活する一群である（小杉、1986）。特に、SD 01東壁下層（No.1）から産出した陸生珪藻は、離水した場所において乾燥に耐えうる群集とされるため（伊藤・堀内、1989：1991）、SD 01の東壁下層の堆積時には、比較的乾燥した場所も存在した可能性がある。

引用・参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 73-88頁
 伊藤良永・堀内誠示 1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分 -」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』17頁
 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌』6 23-44頁
 小杉正人 1986 「陸生珪藻による古環境の解析とその意義 -わが国への導入とその展望-」『植生史研究』1 9-44頁
 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『第四紀研究』27 1-20頁
 埼玉県教育委員会 1962 『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 289-313頁
 千木良雅弘 1995 「風化と崩壊」近未来社
 千葉 崇・澤井裕紀 2014 「環境指標種群の再検討と更新」『Diatom』30 7-30頁
 Asai Kazumi & Watanabe Toshiharu 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxylicous taxa. *Diatom* 10 35-47 p
 Desikachari, T. V. 1987 Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean Region. Madras: Madras Science Foundation I-13p
 Hustedt, F. 1930 Die Kieselalgen Deutschlands, Öesterreichs und der Schweiz mit Berücksichtigung der übrigen Länder Europas
 Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In L. Rabenhorst's *Kryptogamen-Flora von Deutschland, Öesterreichs und der Schweiz*. vol.7. Part 1. Leipzig: Akademische Verlagsage Sellschaft m. b. H.
 Hustedt, F. 1937-1938 Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen - Flora von Java, Bali und Sumatra. I - III. Archiv. Hydrobiologie. Suppl. 15, 131-809 p, 1-155 p, 274-349 p
 Hustedt, F. 1959 Die Kieselalgen Deutschlands, Öesterreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas
 Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In L. Rabenhorst's *Kryptogamen-Flora von Deutschland, Öesterreichs und der Schweiz*. vol.7. Part 2. Leipzig: Akademische Verlagsage Sellschaft m. b. H.



1. *Thalassiosira bramaputrae* (Ehr.) Hakansson & Locker (No.17 : SD 15-d・e 間アゼ6層)
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (No.1 : SD 01 東壁下層)
3. *Eunotia diodon* Ehrenberg (No.5 : SD 16-a・b 間アゼ2層)
4. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (No.1 : SD 01 東壁下層)
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (No.25 : SD 18-d・e 間アゼ2層)
6. *Pinnularia acrosphaeria* W. Smith (No.3 : SD 08 北壁下層)
7. *Pinnularia borealis* Ehrenberg (No.1 : SD 01 東壁下層)
8. *Pinnularia subcapitata* Gregory (No.1 : SD 01 東壁下層)
9. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (No.5 : SD 16-a・b 間アゼ2層)
10. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (No.2 : SD 06 東壁下層)

第57図 堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真

- Hustedt, F. 1961 - 1966 Die Kieselalgen Deutschlands, Österreichs und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. In L. Rabenhorst's Kryptogamen - Flora von Deutschland, Österreich und der Schweiz, vol.7, Part 3 Leipzig: Akademische Verlagssgesellschaft m. b. H.
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1985 Naviculaceae. Neue und wenig bekannte Taxa, neue Kombinationen und Synonyme sowie Bemerkungen. *Bibliotheca Diatomologica* 9 250 p
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1986 Bacillariophyceae. 1. Naviculaceae. In *Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 2(1). Gustav Fischer. 876 p
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1988 Bacillariophyceae. 2. Bacillariaceae, Epithemiaceae, Surirellaceae. In *Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 2(2). Stuttgart: Gustav Fischer. 596 p
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1991 a Bacillariophyceae. 3. Centrales, Fragilariae, Eunotiaceae. In *Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 2(3). Stuttgart: Gustav Fischer. 576 p
- Krammer, K. & Lange - Bertalot, H. 1991 b Bacillariophyceae. 4. Achnanthaceae Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In *Süßwasserflora von Mitteleuropa*, 2(4). Stuttgart: Gustav Fischer. 437 p
- Lange - Bertalot, H. et al. 2000 *Iconographia Diatomologica: Annotated Diatom Micrographs*, vol.7 Diatom Flora of Marine Coasts I

第5節 植物珪酸体分析

1. はじめに

石川県小松市大領町、今江町地内に所在する大領遺跡において、古植生を検討するために堆積物試料が採取された。以下では、試料に対して行った植物珪酸体分析の結果を示し、堆積当時のイネ科植物相について検討した。なお、同一試料を用いて花粉分析と珪藻分析も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

分析試料は、1区のSD 01とSD 06、SD 08から採取された3試料（No.1~3）、3区のSD 16から採取された4試料（No.5、9、10、11）、SD 15から採取された4試料（No.13、15、17、18）、SK 12から採取された2試料（No.21、23）、SD 18から採取された2試料（No.25、26）の、計15試料である（第11表）。これらの試料について、以下の処理を施し、分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1 g（秤量）をトルビーカーにとり、約0.02 gのガラスピーブ（直径約0.04 mm）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30 cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により0.01 mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オバールについて、ガラスピーブが300個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第59図に載せた。

3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オバール個数とガラスピーブ個数の比率から試料1 g 当りの各プラント・オバール個数を求め（第12表）、分布図を示した（第58図）。

15試料から検出された機動細胞珪酸体は、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の7種類である。また、イネの初穂に形成される植物珪酸体（イネ穎破片）も検出された。

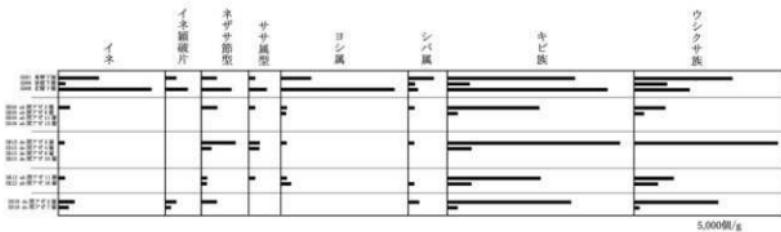
試料No.	調査区	グリッド	遺構・層位	時期	堆積物の特徴
1	1区	B2	SD01 東壁下層	中世	黒褐色 (10YR3/2) シルト質細粒砂
2		C3	SD06 東壁下層		オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質細粒砂
3			SD08 北壁下層		灰黄褐色 (10YR6/2) シルト
5	D9		SD16-a・b 間アゼ 2層	古代	赤黒色 (10R2/1) 細粒砂
9			SD16-a・b 間アゼ 8層		にぶい黄褐色 (10YR5/4) 細粒砂～中粒砂
10			SD16-a・b 間アゼ 11層		にぶい黄橙色 (10YR7/3) 細粒砂
11			SD16-a・b 間アゼ 13層		にぶい黃色 (2.5Y6/4) 細粒砂
13	E8		SD15-d・e 間アゼ 2層	古代	赤黒色 (2.5YR2/1) 細粒砂
15			SD15-d・e 間アゼ 4層		オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 細粒砂～中粒砂
17			SD15-d・e 間アゼ 6層		明黄褐色 (2.5Y6/6) 細粒砂
18			SD15-d・e 間アゼ 10層		にぶい黄橙色 (10YR6/4) 細粒砂
21	E10	SK12-a・b 間アゼ 11層	古代？	赤黒色 (10R1.7/1) 細粒砂	
23		SK12-a・b 間アゼ 16層		黒褐色 (10YR2/3) 細粒砂	
25		SD18-d・e 間アゼ 2層		赤黒色 (2.5YR2/1) 細粒砂	
26		SD18-d・e 間アゼ 7層		黄褐色 (2.5Y5/4) 細粒砂	

第11表 分析試料一覧

検鏡の結果、縄文時代？とされる試料 (No.11, 18) からは植物珪酸体が検出されなかった。古代や古代？とされる試料 (No.5, 9, 10, 13, 15, 17, 21, 23, 25, 26) からは、いくつかの分類群が検出されており、なかでもキビ族とウシクサ族については、いずれの遺構においても上位層準で産出量が増加している。中世とされる試料 (No.1~3) では、キビ族とウシクサ族に加えてイネやヨシ属が多く産出している。

	イネ (個/g)	イネ類破片 (個/g)	ネササ類型 (個/g)	ササ属型 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
No.1	9,300	2,300	3,500	1,200	7,000	5,800	30,100	23,200	5,800
No.2	1,300	0	0	0	0	1,300	5,000	7,600	6,300
No.3	21,900	5,000	7,000	4,000	26,900	2,000	37,900	13,000	13,000
No.5	2,400	0	3,600	1,200	1,200	1,200	21,600	7,200	4,800
No.9	0	0	0	0	1,000	0	2,100	2,100	0
No.10	0	0	0	0	0	0	0	0	0
No.11	0	0	0	0	0	0	0	0	0
No.13	1,100	0	8,000	2,300	1,100	1,100	40,900	34,100	10,200
No.15	0	0	2,200	2,200	0	0	5,400	0	0
No.17	0	0	0	0	0	0	0	0	0
No.18	0	0	0	0	0	0	0	0	0
No.21	1,200	0	1,200	1,200	1,200	0	21,900	9,200	6,900
No.23	0	0	1,100	0	2,200	1,100	5,400	5,400	1,100
No.25	3,500	2,300	3,500	0	0	2,300	29,200	19,800	9,300
No.26	2,100	1,000	0	0	0	0	2,100	1,000	0

第12表 試料1g 当りのプラント・オバール個数



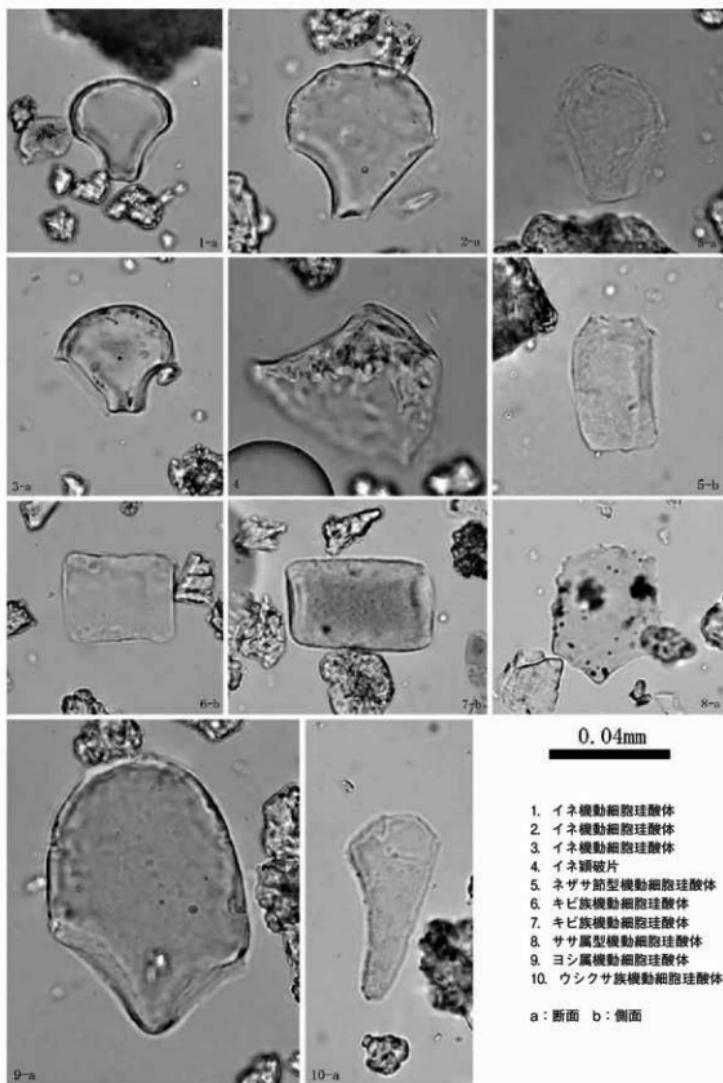
第58図 大領遺跡における植物珪酸体分布図

4. 考 察

縄文時代とされる試料 (No.11、No.18) からは植物珪酸体が検出されないため、縄文時代には遺跡周辺にイネ科植物がそれほど繁茂していなかった可能性がある。

古代や古代とされる遺構の試料 (No.5、9、10、13、15、17、21、23、25、26) では、下位層準では植物珪酸体が産出しないか、産出量が少ないが、いずれの遺構でも上位層準に向かって増加傾向を示している。遺跡周辺では、古代においてイネ科植物が繁茂するようになり、なかでもキビ族やウシクサ族が分布を広げていた可能性がある。また、No.5 (SD 16-a・b間アゼ2層) や No.13 (SD 15-d・e間アゼ2層)、No.21 (SK 12-a・b間アゼ11層)、No.25と26 (SD 18-d・e間アゼ2層と7層) ではイネ機動細胞珪酸体が産出しており、No.25と26 (SD 18-d・e間アゼ2層と7層) ではイネ穎破片も検出された。古代のこれらの遺構周辺には、稻藁やイネの初穂が堆積していたと考えられる。

中世とされる試料 (No.1~3) では、SD 06 (No.2)において機動細胞珪酸体の産出が全体的に少なもの、その他の2試料においてはイネやキビ族、ウシクサ族の機動細胞珪酸体や、イネ穎破片が多く産出している。SD 01 や SD 08周辺にはキビ族やウシクサ族が分布しており、稻藁やイネの初穂が溝に堆積していたと考えられる。さらには、抽水植物のヨシ属機動細胞珪酸体の産出も目立っており、中世のSD 01やSD 8内や周辺には、ヨシ属が生育できるような湿润な環境の場所があったと考えられる。



第59図 SD 08 北壁下層 (No.3) から産出した植物珪酸体

第5章 総括

第1節 遺跡の変遷

大領遺跡は、小松市大領町・今江町にまたがり所在する周知の埋蔵文化財であり、現在の木場潟から北へ約500m、海岸線からは約5km離れた、縄文時代に形成された内列砂丘東端の標高2~3mの微高地に立地している。地名となっている「大領」とは、古代の律令制における職名の一つで701年に編纂された大宝令によって定められた、郡司における最高の地位、四等官（大領・少領・主政・主帳）の長官にあたる。そのため調査前から古代（奈良・平安時代）の散布地として周知されており、発掘調査により古代の遺構・遺物が確認されると想定されていた。

今回、北陸新幹線建設に伴い平成29年に初めて大領遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代以降、中・近世の遺構・遺物が確認された。特に古代と中世（鎌倉・室町時代）の2つの道路遺構とみられる遺構を検出し、注目された。両道路遺構は約30m離れた場所でみつかり、どちらも路面は後世の耕地整理時に削平を受け遺存していなかったが、それぞれ両側に側溝を持つ道路遺構の延長約30m分が直線状にみつかった。出土遺物からは、古代の道路遺構は、8世紀後半～9世紀前半、中世の道路構は、16世紀後半には機能していたと考えられる。

以下時代ごとに調査成果の概略を記す。

縄文時代

主に調査区1～3区の地山（ベース）砂層を中心に後・晩期の縄文土器や石器が出土した。2区の地山砂層SX01からも、後期の深鉢（20・21）が出土しており、周辺での活動の痕跡とみている。

小松市の砂丘の形成については、小松市と弘前大学教育学部の小岩直人氏によるボーリング調査や珪藻分析、年代測定など自然科学的分析を利用した調査が行われている。一連の調査として大領遺跡2区SX01の南側で行われた下層確認トレチの壁面観察調査により、地表下115cm（標高約1m）から採取された炭化木片のAMSによる炭素年代測定の結果、約3,600～3,500年前の年代が得られ、「石川県埋蔵文化財情報第39号」2018（公財）石川県埋蔵文化財センターにより速報も報告された。

弥生時代

0・1区を中心にベース上面や溝などから縄文時代晩期末～弥生時代前期初頭頃と弥生時代後期頃の土器小片が出土したが、集落に伴うような遺構はみつかっていない。

古代（奈良・平安時代）

3区で古代の道路遺構の両側側溝と考えている平行し直線状に延びる溝SD15・16を検出した。両側溝の芯々（両側溝中心間の距離）幅で約9.5m、路面幅約8mを測り、延長約30m分を検出している。側溝は、上幅約1.5m、深さ約35～50cmを測り、断面逆台形やV字形で、土層の観察から掘り直しの痕跡がみられた。側溝からは、8世紀後半～9世紀前半頃とみられる南加賀窯産の盤や双耳瓶など須恵器（27～29）や土師器が出土したが、出土数も少なく道路の設置時期や存続幅は不明である。北から東へ約60度傾いた方向に延びており、北東方向へ直線的に延長させると小松市古府町の梯川沿いに想定されている加賀国府推定地付近へと向かっている。また、南西側へ延長させると柴山潟東縁の三湖台地（月津台地）上に位置する額見町遺跡の北側へと向かっている。

2区西側のピット群内P12から、底部に糸切り痕を持つ南加賀窯産の須恵器碗が出土した。調査地内からは建物等集落跡につながるような遺構は確認できなかったが、試掘調査時など周辺から須恵器が表採されており、近くに古代の集落が存在していると想定される。

中世（鎌倉・室町時代）

1区で検出した水路とみられる溝SD 06は、やや湾曲しながら延長約20mに渡り延びており、中世前半頃の土師器皿（8）が出土した。直交する溝SD 11が接続し、南東側の低地に向かって延びている。また、中世の道路遺構の両側側溝と考えている並行し直線状に延びる溝SD 01・08を検出し、中世後半の青磁碗（4）や越前焼擂鉢（10）、瓦質土器火鉢（11）などが出土した。水路SD 06とは並行するが、SD 11を掘り込んで掘られており、水路が埋没した後に構築されている。側溝は上幅約40～80cm、深さ約25～40cmを測り、断面U字形やV字形である。側溝の芯々幅で約7.5m、路面幅約7mを測り、延長約30m分を直線状に検出している。北から東へ約55度傾いた方向に延びており、北東方向へ延長させると、浅井畷古戦場（石川県指定史跡）の西側を通り、南西方向に延長させると御幸塚城（今江城）跡の東側を通ることから、浅井畷の戦いとの関連も想定され、中世の北陸道であった可能性も考えられる。

5～8区にまたがり検出した並行する溝SD 45・68は、溝芯々幅で約11m、内幅で約10mを測り、延長約32m分を検出した。時期を決める遺物は出土しておらず性格不明であるが、歓溝を切り込み掘られていることから中世の道路遺構の可能性があり、その場合、官道クラスの規模を測る。1区で検出された道路遺構とはほぼ主軸方位が直交し、北から西へ約35度傾いた方向に延びており、直線状に延長させると小松市安宅町の安宅湊や安宅駅家推定地付近へと延びている。

4区北端～8区にかけて、耕作に伴う歓溝群と考えている細溝を多く検出した。歓溝群は直交し重複しながら掘られている箇所もあり、歓溝の底には根株痕跡とみられる小穴を検出したものもある。時期を比定できる遺物は少ないが、5区SD 57から中世の土師器皿（45）が出土しており、古代の道路が海岸沿いへと移って以降、調査区周辺には生産域が広がっていたとみられる。

以上の状況から、今回の調査では各時代を通じて建物跡など集落に伴うような遺構は確認できなかった。そのため古代や中世の道路側溝からも出土した遺物は少なく、道路の正確な構築開始時期や時期幅は不明である。また、中世の一時期には調査区内の一部で歓溝群が検出され、生産域となっていたことが判明した。

第2節 発見された道路遺構と「古代北陸道」について

1. 古代における能登・加賀の道路遺構と「古代北陸道」

石川県内では、これまで能登6遺跡、加賀17遺跡での発掘調査により古代の道路遺構が確認されている（P. 54、第13表）。そのうち奈良・平安時代に「七道」と呼ばれる官道（国家によって整備・管理・維持がなされた道路）の一つである、「古代北陸道」と比定されている道路遺構が、津幡町加茂遺跡（国指定史跡）や金沢市観法寺遺跡、野々市市三日市A遺跡などで発掘調査により確認され、路面幅7.5～9.5mの両側側溝を持つ道路遺構が検出されている。これらの遺跡で検出された奈良時代の道路遺構の規模は、路面幅7.5～8.5mで、今回大領遺跡で検出された路面幅約8mの道路遺構もこれらと同規模であり、直進性、幅員の明示といった駅路の要素を備えていることからも新たに南北加賀の内陸部で確認された「古代北陸道」であると考えている。

2. 越前（加賀）国出土の駅名が記載された木簡

10世紀前半に完成されたとされる法令集『延喜式』では、石川県内の古代北陸道には、能登国2駅・加賀国7駅、伝馬は江沼・加賀郡各五疋が置かれたと規定され、南加賀には、「朝倉-潮津-安宅-比楽」の駅名が記載されている。これにより、潮津-比楽間は海岸沿いの砂丘上を通る経路が比定さ

れ、駅名の記載がある下記2点の荷札木簡の存在もそれを裏付けるものとされてきた。

①711~716年製作とみられる平城京長屋王邸出土木簡 「江沼郡潮津駅人神人」

②789年製作とみられる長岡京出土木簡 「安宅駅戸主財豊成戸五斗」

この荷札（貢進物付札）木簡により、古代北陸道は加賀立国（823年）の前から海岸沿いを通るルートが定説となっていた。しかし、①の釈文について、2016年奈良文化財研究所が行った赤外線カメラを用いた再釈証により、「江沼郡淡津駅人神人」へと読みの訂正が行われた。渡辺晃宏氏は、淡津は潮津の旧称の可能性が高まつた、としつつ栗津の地名が「淡津駅家」および『為房卿記』1091年7月19日条に記された「淡津泊」の遺存地名である可能性も指摘した（渡辺2016）。

これに対し、鈴木景二氏は、淡津は淡水湖（潟）の港、潮津は汽水湖または海の港の呼称であり、淡津は柴山潟や木場潟などが点在していた三湖台地周辺の地名としてふさわしく、「淡津駅」は現在の小松市栗津付近とし、奈良時代初期の内陸ルートの存在を想定した。また、望月精司氏の意見を元に「神人」の文字から駅子と須恵器生産との関わりを指摘し、隣接する南加賀窯跡群の存在から淡津駅付近に神部系氏族が居住していたと推測した（鈴木2017）。

また、長屋王邸からは、8世紀前半頃に「四沼郡□…駅子神人・久治□〔良カ〕」と四（江）沼郡の駅子と神人の人名が書かれた木簡も出土しており、①と同様に淡津駅と書かれていた可能性が高い。

3. 南加賀における「古代北陸道」のルートと「淡津駅」の所在地

大領遺跡における「古代北陸道」とした官道規模の道路遺構の発見により、発掘調査の2年前に鈴木氏が想定した通り、奈良時代前半頃には内陸部を通っており、さらに想定路上に「淡津駅」が存在し、8世紀中頃～後半の間に海岸沿いのルートに変更になった可能性が高まつたのである。

「淡津駅」の想定地は鈴木氏（鈴木2017）や三浦純夫氏（三浦2018）、吉岡康暢氏らが指摘するよう、港の近接地の可能性が高く、木場潟南西端に置かれた淡津泊付近にあったと考えている。三浦氏による地形図からの古代の加賀三潟（柴山潟・今江潟・木場潟）の復元図によると、現在よりも倍以上広い範囲を復元している。平安海進といわれる8~12世紀にかけて現在よりも海面が高かつた現象を考慮してもこの復元図は妥当であり、当時の木場潟はかなり広かつたとみられる。この復元により、現在も木場潟南西に地名が残る小松市符津町や8世紀代の遺構が検出されている島遺跡も当時は木場潟に接していたとみられ、それらを含む木場潟南西エリア、陸路と水路の結節点であり、南加賀窯跡群に近接する、現在のJR栗津駅周辺～下栗津町周辺を「淡津駅」の候補地とみている。

また、「古代北陸道」のルートは、三浦氏らも想定するように大領遺跡の南西側で角度を変え、三湖台地東縁に沿って木場潟との間を通り、「淡津駅」からさらに角度を変えて「朝倉駅」へと向かっていたとみられる。これら加賀における交通路の変化については、日本考古学協会2021年度金沢大会「北陸と世界の考古学」分科会Ⅱ「古代日本海域における人の移動－古代の港湾と関連遺跡」の中で、出越茂和氏や望月氏・鈴木氏が報告し、議論されている（出越 2021、望月 2021、鈴木 2021）。

引用・参考文献

- 渡辺晃宏 2016 「平城京・京跡出土駅家関係木簡の再釈証」「奈良文化財研究所紀要2016」奈良文化財研究所 34~35頁
 鈴木景二 2017 「北陸道の交通と景観」「日本古代の道路と景観・駅家」・官衛・寺・」八木書店 435~452頁
 安中哲徳 2018 「大領遺跡」「石川県埋蔵文化財情報第39号」(公財)石川県埋蔵文化財センター 巻頭図版8・9、12~13頁
 三浦純夫 2018 「北陸道淡津駅と江沼郡の駅路」「実証の考古学－松浦和人先生追憶記念論文集－」(同志社大学考古学シリーズ第4刷別刷) 461~472頁
 鈴木景二 2021 「古代史から見た北陸の水運と港湾」「北陸と世界の考古学」日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会 181~184頁
 出越茂和 2021 「加賀の古代津浦と交通」「北陸と世界の考古学」日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会 143~150頁
 望月精司 2021 「南加賀の渡来人集落と古代手工業生産～飛鳥時代のミヤケの経営を探る～」「北陸と世界の考古学」日本考古学協会2021年度金沢大会実行委員会 151~158頁



写真1 津幡町「加茂遺跡」の古代北陸道



写真2 金沢市「観法寺遺跡」の古代北陸道



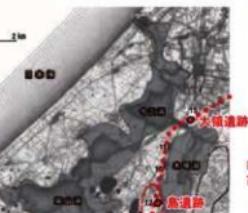
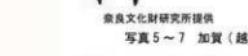
写真3 野々市市「三日市A遺跡」の古代北陸道



写真5 長屋王邸出土木簡「淡津駅」(711~716年)

写真6 長屋王邸出土木簡「…駅子」

写真7 長岡京出土木簡「安宅駅」(789年)



- 1 庄・西島遺跡
- 2 可波遺跡
- 3 佐渡遺跡
- 4 宮地遺跡
- 5 雜原遺跡
- 6 雜原新遺跡
- 7 刀河遺跡
- 8 矢田野遺跡
- 9 須見町遺跡
- 10 夷崎宮の下遺跡
- 11 道遺跡
- 12 長瀬遺跡
- 13 加賀製鉄遺跡群
- 14 加賀製鉄跡群
- 15 大領遺跡
- 16 「淡津駅」「淡津泊」

- 1 庄・西島遺跡
- 2 可波遺跡
- 3 佐渡遺跡
- 4 宮地遺跡
- 5 雜原遺跡
- 6 雜原新遺跡
- 7 刀河遺跡
- 8 矢田野遺跡
- 9 須見町遺跡
- 10 夷崎宮の下遺跡
- 11 道遺跡
- 12 長瀬遺跡
- 13 加賀製鉄遺跡群
- 14 加賀製鉄跡群
- 15 大領遺跡
- 16 「淡津駅」「淡津泊」

第63図 古代加賀三湖周辺の遺跡と「淡津駅」推定地 (三浦 2018) に一部加筆



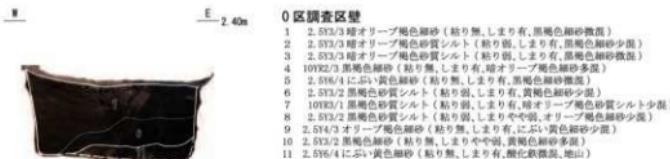
写真15 古代江沼郡の駅場と「淡津駅」推定地 (三浦 2018) に一部加筆

調査区壁断面1

0区調査区西壁土層断面図



0区調査区北壁土層断面図



1区調査区南壁土層断面図

SE NW 2.80m

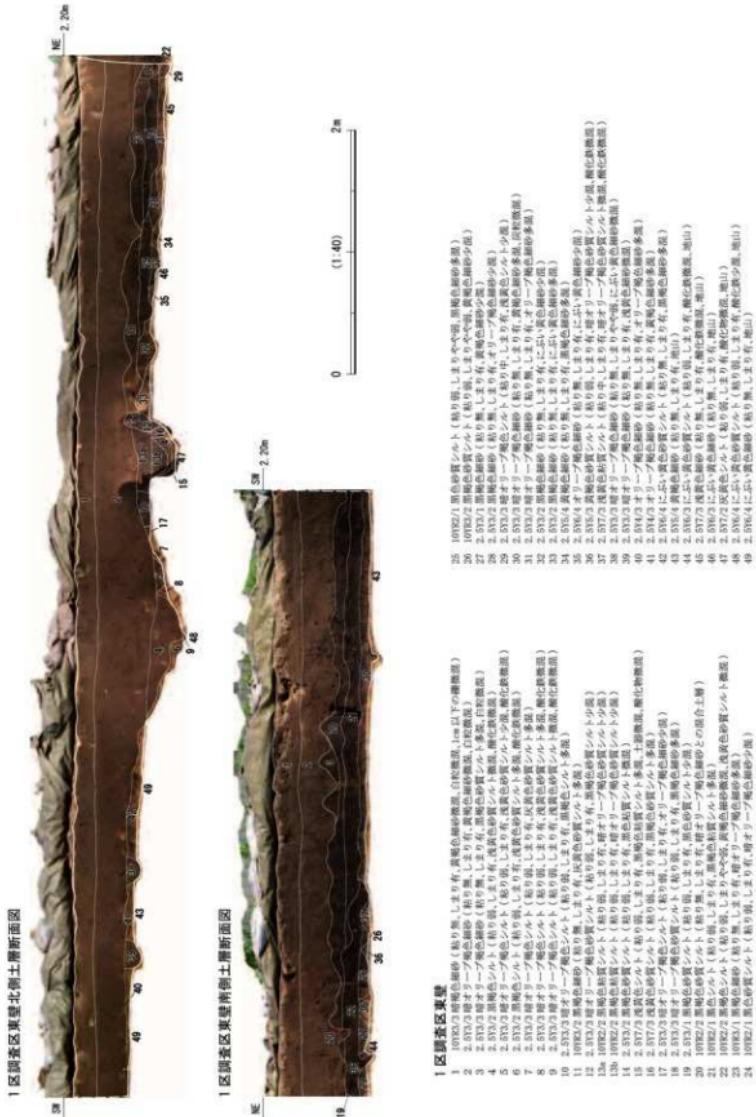


1区調査区南壁

1. 2.SY3/2 塗オーリーブ褐色細砂（粒り無、しまり有、にぶい黄色細砂微混、白粒微混、2cm以下の礫微混、耕土）
2. 10Y32/2 黑褐色細砂（粒り弱、しまり有、にぶい黃褐色細砂少混、白粒微混、金屬片等微混、旧耕土？）
3. 10Y32/2 黑褐色細砂（粒り弱、しまり有、にぶい黃褐色細砂少混、白粒微混、金屬片等微混、旧耕土？）
4. 2.SY2/1 黑色砂質シルト（粒り弱、しまり有、浅黄色細砂少混、黑褐色細砂少混）
5. 2.SY2/2 黑色砂質シルト（粒り弱、しまり有、浅黄色細砂少混、黑褐色細砂少混）
6. 2.SY7/2 浅黄色細砂（粒り無、しまりや少、黑褐色細砂少混、白粒微混、旧耕土？）
6. 2.SY7/3 浅黄色細砂（粒り無、しまり弱、黑褐色砂質シルト多混）
7. 2.SY7/3 浅黄色細砂（粒り無、しまり有、黑褐色砂質シルト多混）
8. 2.SY7/3 浅黄色細砂（粒り無、しまり有、地山）

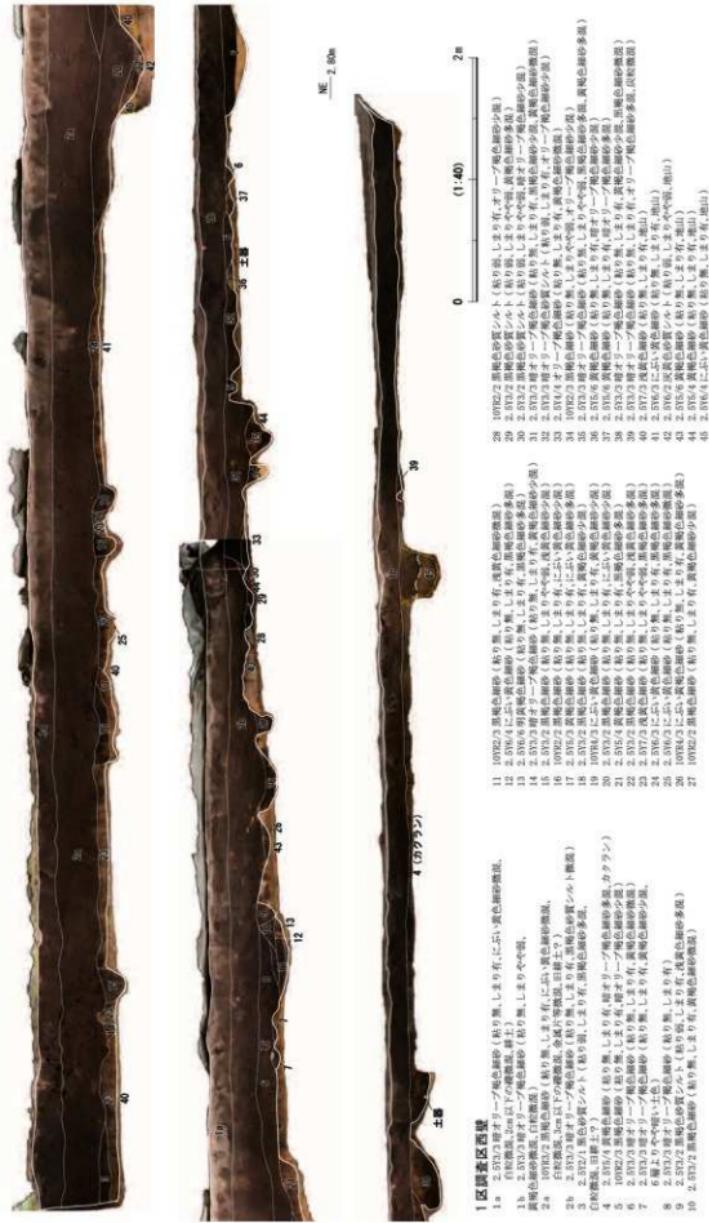
0 (1:40) 2m

第65図 0・1区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)

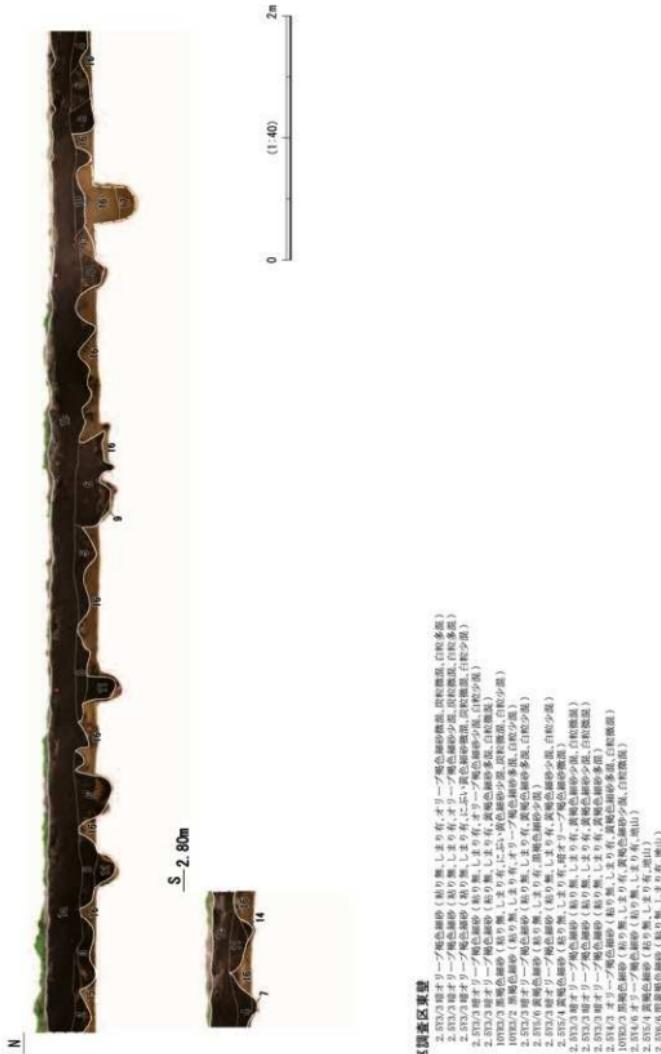


第66回 1区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1/40)

1区調査区西壁土層断面図

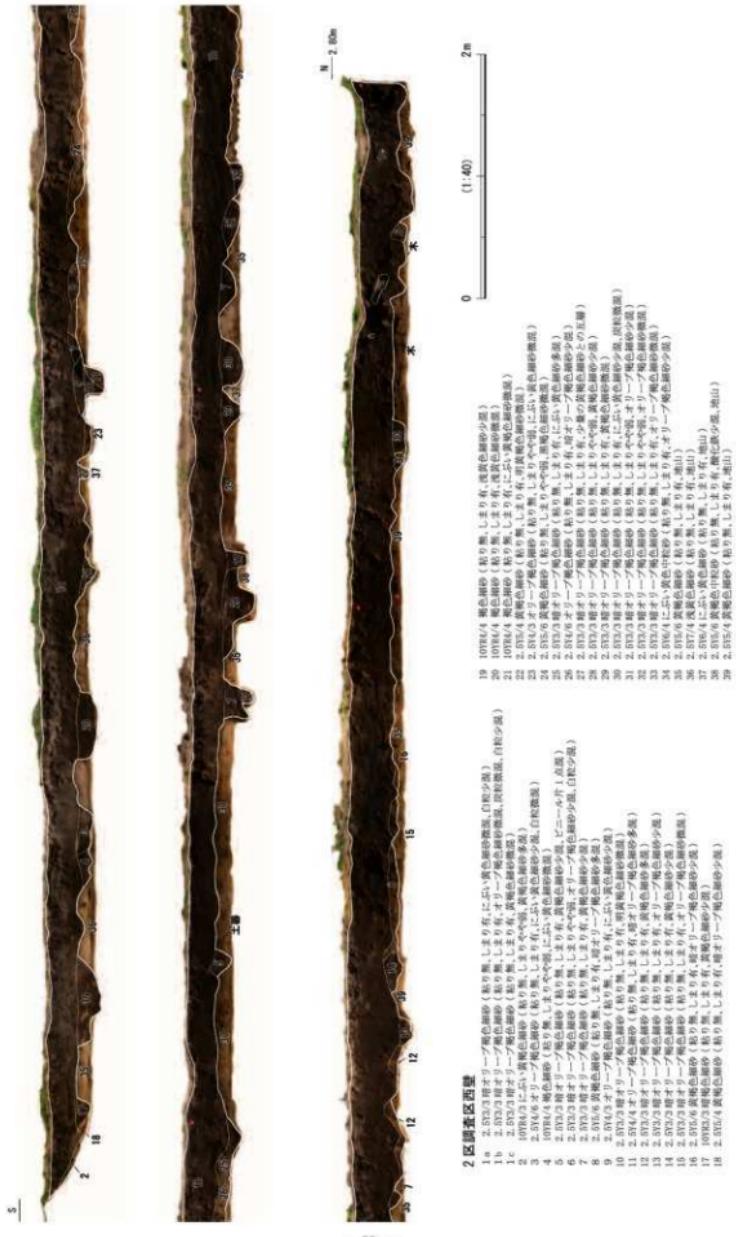


2区調査区東壁土層断面図



第68図 2区調査区盤面断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)

2区調査区西壁土壌断面図



第69図 2区調査区壁面断面実測図・オルソ写真2 (S=1:40)

3区調査区北壁土質断面図



3区調査区北壁

- 1 2.51/2 黄灰黄色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
2 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
3 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
4 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
5 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
6 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
7 1.01/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、オーブー褐色細粒少斑）
8 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、オーブー褐色細粒少斑）
9 1.01/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
10 1.01/2/1 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
11 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
12 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
13 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
14 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、オーブー褐色細粒少斑）
15 1.01/2/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
16 2.51/4 オーブー褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒多斑）
17 2.51/6 黃褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
- 18 2.51/3 オーブー褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
19 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、オーブー褐色細粒少斑）
20 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
21 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
22 2.51/4/1 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、オーブー褐色細粒少斑）
23 2.51/4 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
24 2.51/3 オーブー褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
25 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
26 2.51/3 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
27 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
28 2.51/4/1 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
29 2.51/3 オーブー褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
30 2.51/2 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
31 2.51/3 オーブー褐色細粒（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
32 2.51/5/4 黃褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）
33 2.51/5/4 黄褐色砂岩（柄り無、しまり有、黄褐色細粒少斑）

第70図 3区調査区壁面断面実測図・オルソ写真1 (S=1/40)

3区調査区西壁 土壌断面図



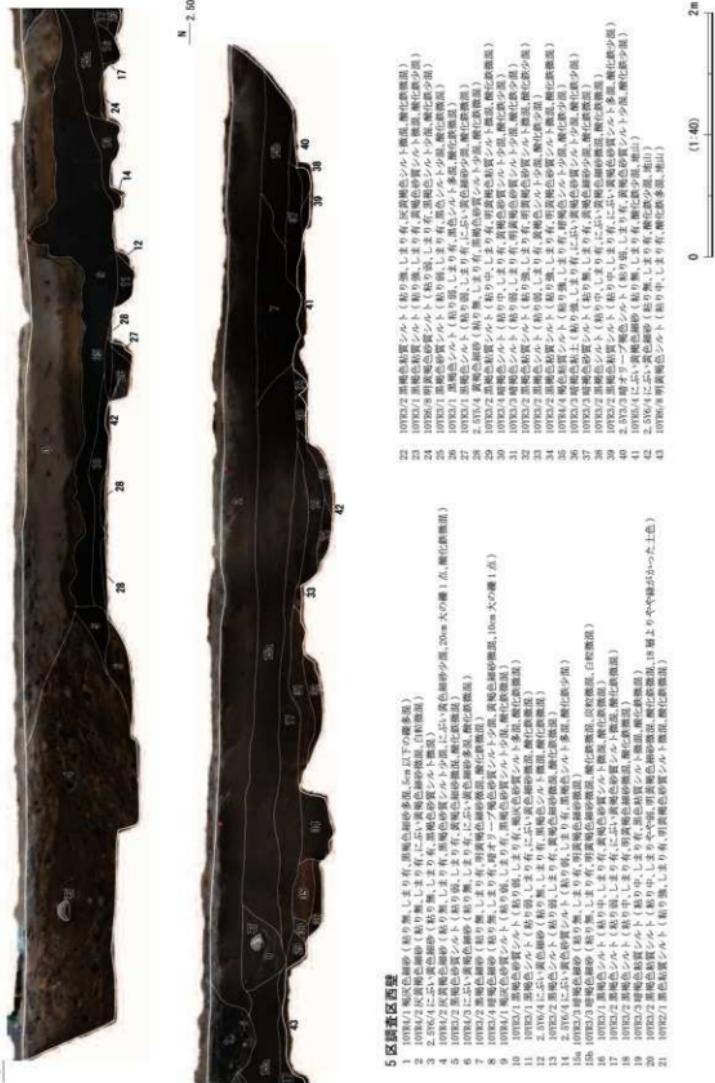
第17図 3区調査区壁面断面実測図・オルソ写真2 (S=1-40)

4区調査区西壁土層断面図



第72図 4区調査区壁断面実測図 オルソ写真1 (S=1:40)

5区調査区西壁



第74図 5・6・7区調査区壁断面実測図・オルソ写真1 (S=1:40)

調査区壁面図11

6区調査区西壁南部断面図



6区調査区西壁南部

1. 2. SY3/3 緑オリーブ褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、オーリーブ褐色細砂多混、酸化鉄微混、炭酸微混、白粘微混)
2. 2. SY3/2 黒褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、黒褐色細砂微混、酸化鉄少混)
3. 2. SY3/2 緑オリーブ褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、黒褐色細砂少混、酸化鉄少混)
4. 2. SY3/2 緑オリーブ褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
5. 2. SY3/2 黒褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
6. 2. SY3/2 緑オリーブ褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
7. 2. SY3/2 黒褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、オーリーブ褐色シルト多混、酸化鉄少混)
8. 2. SY3/2 黒褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
9. 10Y3/2 黄褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
10. 10Y3/2 黄褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
11. 10Y3/2 黄褐色砂質シルト (粘り無、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)
12. 2. SY5/4 黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、緑オリーブ褐色砂質シルト微混、酸化鉄多混)
13. 2. SY6/4 にじみ黄褐色砂質 (粘り無、しまり有、緑オリーブ褐色砂質シルト微混、酸化鉄多混)
14. 2. SY6/6 明黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、オーリーブ褐色シルト少混、酸化鉄多混)
15. 2. SY7/4 浅黄色砂質 (粘り無、しまり有、オーリーブ褐色砂質シルト少混、酸化鉄少混)

6区調査区西壁北部断面図



6区調査区西壁北部

1. 2. SY4/2 オーリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色シルト少混、酸化鉄微混、炭酸微混)
2. 2. SY4/2 黒褐色シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄少混、炭酸微混)
3. 10Y3/6 明黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、緑オリーブ褐色シルト多混、酸化鉄多混)
4. 2. SY5/4 黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
5. 2. SY6/6 明黄褐色シルト (粘り弱、しまり有、緑オリーブ褐色シルト少混、酸化鉄多混)
6. 2. SY6/6 明黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、緑オリーブ褐色シルト多混、酸化鉄多混)
7. 2. SY6/6 明黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄多混)
8. 2. SY7/4 浅黄色砂質シルト (粘り弱、しまり有、酸化鉄少混、地山)

7区調査区西壁断面図



7区調査区西壁

1. 2. SY3/4 黄褐色砂質 (粘り無、しまり有、緑オリーブ褐色細砂微混、酸化鉄微混)
2. 2. SY3/3 緑オリーブ褐色細砂 (粘り無、しまり有、黄褐色細砂微混、酸化鉄微混、炭酸微混)
3. 2. SY3/4 黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、緑オリーブ褐色シルト少混、酸化鉄少混)
4. 2. SY3/4 黑褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、明黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
5. 2. SY3/2 緑オリーブ褐色シルト (粘り弱、しまり有、オーリーブ褐色細砂微混、酸化鉄微混、2層より明るい土色)
6. 2. SY3/2 黑褐色シルト (粘り少、しまり有、明黄褐色シルト微混、酸化鉄微混、炭酸微混)
7. 2. SY3/2 黑褐色砂質シルト (粘り強、しまり有、にじみ黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
8. 2. SY3/2 黑褐色砂質シルト (粘り強、しまり有、オーリーブ褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
9. 2. SY3/2 黑褐色砂質シルト (粘り強、しまり有、緑オリーブ褐色砂質シルト少混、酸化鉄微混)
10. 10Y3/3 にじみ黄褐色砂質シルト (粘り強、しまり有、明黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
11. 10Y3/3 黄褐色砂質シルト (粘り強、しまり有、にじみ黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄少混)
12. 10Y3/2 黑褐色シルト (粘り強、しまり有、にじみ黄褐色砂質シルト微混、酸化鉄微混)
13. 10Y3/2 黑褐色シルト (粘り強、しまり有、にじみ黄褐色砂質シルト多混、酸化鉄微混)
14. 10Y3/2 黑褐色シルト (粘り強、しまり有、にじみ黄褐色砂質シルト少混、酸化鉄微混)
15. 10Y3/1 黑褐色砂質シルト (粘り中、しまり有、明黄褐色シルト微混、酸化鉄少混)
16. 2. SY6/6 明黄褐色シルト (粘り弱、しまり有、酸化鉄少混、地山)
17. 2. SY6/6 明黄褐色砂質シルト (粘り弱、しまり有、酸化鉄少混、地山)

第75図 5・6・7区調査区壁断面実測図・オルソ写真2 (S=1:40)

遺構（0・1区）1



調査(0区) 全景(南東から)



P28遺物出土状況(南西から)



1区中世の道路状遺構(SD01・08)と水路(SD06)の全景(北東から)



調査(1区) 全景(南東から)



1区道路側溝(SD01)の全景(南西から)

図版2



1区道路側溝(SD08)と水路(SD06)の全景(南西から)



1区道路側溝(SD08)と水路(SD06)の土層断面(南西から)



1区水路(SD06)土蔵器皿出土状況(南東から)



1区水路(SD11)完掘状況(北西から)



調査区(2区)全景(南東から)

遺構(1・2区)2



調査区(2区)全景(北東から)



2区P12周辺発掘状況(北から)



2区P12須恵器壺出土状況(北から)



2区縄文土器出土状況(南から)



調査区(3区)全景(北東から)



調査区(3区)全景(北東から)



調査区(3区)全景(南東から)



3区古代の道路状遺構(SD15・16)検出状況(南西から)



3区道路側溝(SD15)掘削作業風景(北東から)



3区道路側溝(SD15)土層断面(北東から)



3区道路側溝(SD15)遺物出土状況(南西から)



3区道路側溝(SD15)須恵器双耳瓶出土状況(南東から)



3区道路側溝(SD15)発掘状況(北東から)



3区道路側溝(SD15)土層断面(南西から)



3区道路側溝(SD15)発掘状況(南西から)



3区 SD18発掘状況(南東から)



調査区(4区)全景(南東から)



調査区(4区)全景(南から)



調査区(4区)全景(北東から)



4区 SD21 完掘状況(南東から)



4区 SD22 完掘状況(北西から)



4区 SD23周辺完掘状況(南東から)



4区欽溝群(SD43・44周辺)完掘状況(南西から)



調査区(5・6区)全景(南西から)



調査区(5・6区)全景(南西から)



5区 SD45・欽溝群検出状況(北東から)



5・6区南 SD45・68(道路?)完掘状況(南東から)



5・6区南 SD45・68(道路?)完掘状況(北から)

図版8



5区 SD45(側溝?)上層断面(北西から)



5区 SD45(側溝?)完掘状況(北西から)



6区 SD68(側溝?)土層断面(南東から)



5・6区南歛溝群完掘状況(南西から)



5区歛溝(SD57)土器器皿出土状況(西から)



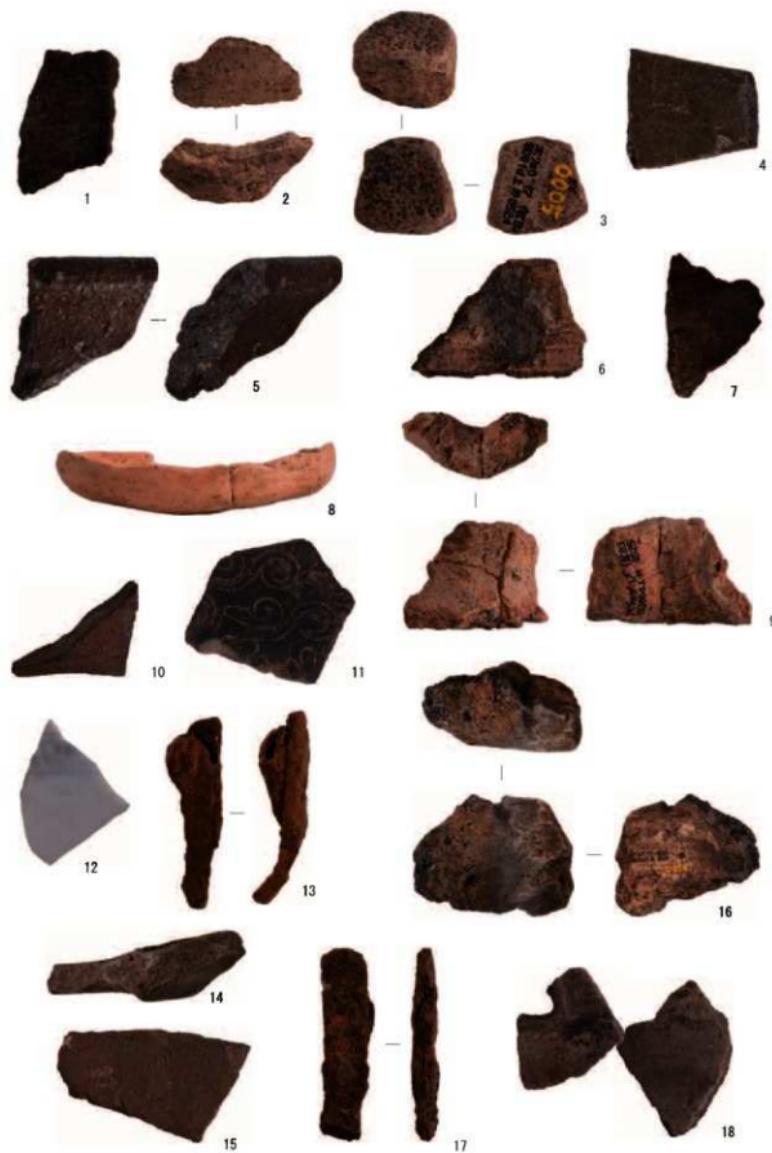
6区北SB01完掘状況(南西から)



7区完掘状況(北東から)



8区完掘状況(南西から)









報告書抄録

小松市 大領遺跡

発行日 令和4(2022)年3月22日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市輪月1丁目1番地

電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中口町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail daihyou@ishikawa-mabun.or.jp

印 刷 ハヤシ印刷紙工株式会社